
ARK

星河 翼

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ARK

【Nコード】

N9407C

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

その日、突然天使が舞い降りた。それは、ウリエルの庇護の下、休息していた少年、京極結。そして、その結は実は人間であり、要の隣人、晶の双子の弟であった。世界は、天界、魔界、地上界を動かす異変で満ち溢れ始める。地上界から転生し、天界、魔界へと旅をして使命を全うする、少年少女達を描いた物語。

1 PROLOGUE

PROLOGUE

少し白んだ空気の中。

果てにある大地は丸く弧を描いて、何処までも続く草原。

その中央にはそびえるように、一本の大きな木が立っている。その木に宿る精霊が小鳥達を、りす達をそれだけではない、小さな小動物達を集わしている。

不思議な世界。

そしてこの世界に何時からいるのかさえも忘れた一人の少年は、一冊の本をたずさえて、この大地に住んでいた。たった独りでである。名前は無い。

しかし、誰もそんなことを気にしてはいなかった。

動物達は口々に、会う度に声をかける。

『忘れられた時の者よ』とだけ。

その少年は、この日も同じようにこの場所に腰を下ろしていた。その木にもたれ掛かるために、『忘れられた時の者』は、本を携えてやって来るのであった。

辺りでは、小鳥達が言葉も無き歌を語りかける中、その本を読んでいた。

それは儼かな時であった。

あまりの静寂の中、『忘れられた時の者』は暫くして眠りに誘われていて、いつもとは打って変わった大きな鳥の羽ばたく昔を聴いたのである。

『うつらうつら』していただけにその霞んだ視界の中、暫くして目を醒ます。

「誰？」

と、一言囁きかけた。

こんな事は、初めてのことであった。

一人の長い髪をなびかせた、背中に鳥のように羽根を持った者が目の前に現われたのである。

「この地に住み始めて、どれだけの年月を費やした事であろうの？」

その者は語りかけた。

「さあ、分かりません」

この『忘れられた時の者』は答える。

「時は満ちた。今こそこの地を出る時が来た……そなたに、それを告げにやってきたのである。心の準備は出来ておるか？」

その翼を持った者は問い掛けて来る。

「ボクが？」

「……訳有って、そなたはこの地で休息をしなければならなかった

……でもその日々はもう、終わりにしなければならなかったのだ」

「……」

「今日より地球と言う場所に、そなたは住まなければならぬ。その覚悟は出来るであろうか？」

「地球？」

「そうだ、この世界よりも遥かに文化が栄えた青い惑星。そこで本当の自分を捜しに行つて欲しい」

「本当の自分？」

「今はこれだけを告げる。そなた……はそこで生きたいか？」

「……訳有って、この地にいたのであれば、是非その地に赴いてみたいけど……」

「お前のような人がたくさんいる場所だ」

「ボクのような？」

「そうだ。そこに行く事を願うのであれば私は、そなたをそこへと導く」

そう言つと、両手を前に差し出し大きく弧を描くように手を伸ばす。

すると、大きな光が大地を潤すかのような光を放ち、その中心に
来るようにと誘う。

「ボクは、その人々に会いたい。そしてもっと多くの事を体験した
い！」

導かれるまま、『忘れられた時の者』はその光の中に足を進めた。
「我が愛し子よ。それでは……」

『パーツ』と、瞬間真つ白な光が、辺りを飲み込んだかと思うと二
人の姿はこの場から消えてなくなった。

それは不思議な光景であった。暫くすると、再び小鳥達の声がこ
の地に戻って来る。

しかしその場に『忘れられた時の者』はおろか、翼ある者も共に
消えていたのである。

あれから幾月経ったのであろうか？

指折り数えながら一人の少年は一匹の犬を散歩しながら考える。

「一、二、三……」

それは粉雪が降る、河川敷に面した場所。

「お前の御主人様。もう、半年も入院してるな……？」

この少年の名前は、結城要^{ゆづきかなめ}。色素の薄い髪の毛を短くカットした
小学四年生であった。

体格は、標準の小学四年生らしい様相をしている。

連れている犬は、隣に住んでいる二つ上の幼馴染みの少女、伊集
院晶の愛犬アンダーソンであった。

晶は、水泳部のマネージャーをしてはいるものの、心臓が弱く、
小さい時からよく入隣を繰り返すような病弱な子である。

そして黒い髪を後ろで二つに三つ編みをし、大きな瞳をした愛く
るしい子である。

普段は、そんな病気を持っている事を全く周りに見せない心の穏
かな子で、要自身、心が和む幼馴染みであった。

「早く元気になったもらいたいよなあ。お前もそう思うだろう？ アンダーソン？」

そんな事を呟きながら、いつもの散歩道を歩いていた。

その矢先の事である。いきなり何を思っただの行動か、アンダーソンが要の手をいきなり力強く引つ張った。その弾みで、前のめりになる要。

余りに唐突な事だったので、繋いでいる散歩用のリードの先を離してしまった。

勢い良く駆け出すアンダーソン。それは嬉しげでもあった。

それを、

「おいっ！ 待てよ！」

と、要は慌てて駆け出し、捕まえようとす。

どれだけ走った事であろうか？ 要は、息を切らしながら、何時の間にか河川敷の下に流れる河の草むらへ下りる階段を駆け下りて、早く捕まえようと後を追った。

「もう、息が続かない……」

『ゼハ、ゼハ』と乱れる呼吸。それを落ち着けようとするが、上手くはいかないでいた。

暫くすると川岸に、アンダーソンが座り込んで、止まっているのが見受けられたのを切っ掛けに、要はゆっくりとその場所に歩いていた。

アンダーソンは、川の上空を見上げて、

「クーン、クーン」

と鳴いていた。

その側まで近寄った要は、安心したのか両手で膝を押さえ肩で息をしていた。

そして、何を見上げて鳴いているんだらうと、気になり見上げる。そして大きな色素の薄い瞳をこれ以上ないといったくらいに大きく見開き、驚いた。

そこには、一人の天使がこちらを見下ろしていたのであった。

「うわ〜っ天使!！」

要は叫ぶような大声で喚いた。

「えっ?ボクの事が見えるの?」

惚けた様にその天使は答える。

「……見えるよ……!！」

何やら、両手を顎の下で合わせ感嘆の声を上げているのを見て、

この天使はなんなんだ!?

と、少し冷静になって来た頭の要は、悪態をつく。

「見えますとも。そんなに踊って歌っていれば……嫌でも……」

だんだんと腹が立ってきた。

こんな者のために、オレはこんなしんどい目にあったっていつのか……!?

と、心の中で思う。

そんな時、『スツ』と、目の前の天使が、忽然とその上空から姿を消した。かと思うと、『パシャー』という音をたて、河に落ちたのである。

それを見届けてその場所へと駆け出す要。

この寒空の下、要はその天使を助け起こそうと水の中に入って行った。

「おい、大丈夫か?余り深く無くて良かったな。このくそ寒いのに風邪引くぞ!」

その傍に行つて、声を掛けながら手を差し出す要。

「ほらっ」

しかし、初めてこんなに間近に見たその天使の顔は……

「晶ちゃん!？」

そう、晶の顔をした天使は、短い癖っ毛のある髪を短くそろえた

少年であった。

「えっ？」

その天使は、不思議そうに要を見上げる。腰あたりまで水に濡れたその天使は、恐る恐るその差し出された手を素直に取る。

「……ありがとう」

「えっ？どう致しまして……」

と、心ここに無い感じで要は返事をした。

莫迦な、晶ちゃんの訳なんか無いか？

と、放心状態のまま頭で理解しようとする。

そして、

「オレ、初めて天使なんか見た……」

と口から零す。

「天使？」

「そうだろう？お前……」

と、言おうとしたが、それを聞いてか聞かずか、アンダーソンの方へと駆け寄るその天使の背中には……今まであったはずの天使の羽根が消えてなくなっていたのである。

羽が……ない……！？

今まで見ていたのは現実だったのか？

顔を指でつねる要。確かに痛い。莫迦みたいな事をしてしまったと思った。

アンダーソンの側で抱き寄せているその少年の背中には羽根が無かったのである。

「おいつ！お前！！羽はどうしたんだ……？」

「えっ？」

と、立ち上がって背中に手をまわしている少年。

「あつ。無い……」

余りにもぼけた事を言っているこの少年に、

「無い。で済むのかよ！お前！！」

他人事なのについ突っ込まずに入られなかった。

「うくん。ちよつと不便かも」

なんてぬかした時には、脱力感さえした。

「そう言う問題なんかよ……？」

「うくん。そうだね……でも必要無いよ。君にだって無いじゃないか」

「……まあ、そりゃそうだけど……」

こういう人種にそんな事をいっても、きつとなんの効果も得られないんだろうと判断した要は、腕組みをしつつ、

「お前、名前はなんて言うの？」

と、相手の名前を聞いた。

「ボクの名前？」

今まで、『忘れられた時の者』としか無かった名前にどう答えたらしいのか判らなかった。

そんな折、どこからともなく声が聞こえてきた。それは、あの時の翼ある者の声であった。

『そなたの名前は、京極結……憶えておきなさい』

その声は、その少年の耳に鳴り響いた。

「僕の名前は、京極結」

空から舞い落ちる粉雪は、夕方近いこの空を、静かに舞い散っていた。

それからの二人は、要の家を紹介するために、アンダーソンを連れて家路へと歩いていった。

余り車の通らない道で、簡素な住宅街。

「それじゃあ何か？お前……この地に来たのは、その『翼ある者』」

の導きだつて言うのか？」

と、まるで、異次元の世界から来たこの訪問者を受け入れているかのような姿勢で、要はその話に耳を傾けていた。

「うん。ここに来る途中、幾人もの人達に会ったんだ。だけど誰もボクの事が見えないらしくって、相手にしてくれなかった。君が初めてだよ」

嬉しそうに話すこの少年が、本当の事を言っている事は飲み込めた。というか、自分の見て来たこの事柄を嘘だとは思えないからでもある。

「それじゃ、お前これから困るだろう？家なんて無いんじゃないのか？」

「家？」

結には、それがどう言う物なのか分からない。

「なんて言えばいいのかな？生活する場所？住む所……？」

「うん。無い」

「そう簡単に答えるなよ……」

そんな話をしていた矢先だった。

「くらー！！」

と、言う女の子の声が、後ろから矢のように突き刺す勢いで投げかけられた。

振り返る二人。

その先には、おかつぱ頭の勝ち気な一人の少女が眉間にしわを寄せながら立っていた。

「げっ！！」

要は後ろに身を引いた。

「げっ！！……じゃあ無いでしょう？要！！」

『ジリジリ』と詰め掛けて来るその足取りが、怒りから来るものだと分かる。

「誰？」

静かに問う結。

「小五月蠅い、掃除のおばさん！」
ボソボソと囁く。

「ふ〜ん？」

「あんだ！また、掃除さぼったでしょう」

と、その少女は怒り込めて言う。

「イヤ〜、ちよつと野暮な用事が有りましてね……」

と、『ゴニヨゴニヨ』と言い訳じみた事を話す要。

「しつかりしてよね！！」

この少女。要のクラス副委員長で、名前は宮下^{みやした}水。

水泳部員で、晶の後輩。そして要の従姉妹でもある。

「ははは……」

笑って誤口化してはいるが、これ以上話していると、この水の術中にはまる事このうえない事を悟った要は、何とかこの場を去ろうと必死であった。

「ねえ、何でこの子怒っているの？」

と、結は問う。こういう感情表現を余りよく判ってないらしい。

「いや、ちよつとオレが掃除さぼったものだから……」

「掃除？」

「知らないのかよ〜！綺麗、綺麗する事！！」

「ふ〜ん」

と、要は結が話をしている。

その様子を訝しげに見ている水。

「ちよつと、あんだ……さつきから一体誰と話をしているのよ？」

「えっ？」

水の言葉に、同時に振り返る二人。そう。水には結の姿が見えていなかったのである。

「それじゃ、あんだの側に、天使だった子が居て、名前は京極結という。それも、私の目には見えないって言う事ね？」

ここは、要の部屋。性格どおり、ざっぱな部屋である。

しかし、ここがまるで自分の部屋のよう居座る水は、ちゃっかり要の勉強機の椅子を死守している。

「そこかっ!!」

と、指をさす水。言い当てられて驚く結。

「莫迦、驚くな……座布団敷いてるから判るんだよ……」
と助言する要。

床に敷かれた座布団の上に正座するように座っている結。

水から向かって左に有るベッドに腰掛ける要。三人は、立ち話もなんだからと言う理由で、この要の部屋に来ていた。

「ふうん。でも良かったじゃない？姿が見えない事で、住む家も出来た事だし？」

と、言う水の目には映らない他人に、何の事はないという風に答える。

「でも、このままじゃいけないよな？」

「なんで？」

「だって、幽霊って訳じゃないんだぜ!？」

要は付け加える。

「きつとどうにかすれば、この身体だって見えるようになるはずなんだろうし」

要の目に姿が見えた時、天使の羽根がなくなった。

どう考えても、要と言う媒介が、その羽根を不必要にする要因があったはずなのだ。

つまり、結の家……結を実体化する物がどこかに有る筈なのである。

「それを探さないとダメだっ事？」

「そうだよ!」

結には、何だか解からない話をしているかのようで、ただ二人の会話を聞いているだけに留まっている。

「そうだね……それじゃあ、ちょっと専門外かもしれないけど、私の姉、四季姉ちゃんに相談してみようか？」

『四季姉ちゃん』とは、水の三つ上の姉である。

宮下家は代々受け継がれてきた水神を奉ってきた一族であった。その長女四季は、その力を持った巫女であるらしい。

「お話の途中で悪いんですが、つまり、ボクの本体がどこかに存在していると言っ事なんですか？」

「その可能性が大きいって話していた所なの」

「……僕の本体？」

結は立ち上がって窓際へと歩き始めた。

「おいっ結！」

何かを決心したように振り返る結。

「ボク、自分の事を知りたい！だから、力になって欲しい！！要、水！」

その結の瞳には、希望に溢れる光を宿していた。

「ありがとう」

そう言った。というより聞こえたその声は、まだ大人になっていない声高な確かに少年のものであった。

しかし、水は考えていた。

見えなかったその結の表情が見れた瞬間があったからだった。

あの顔は、晶先輩……！？

尊敬する先輩の顔を、水が見間違えるはずなんてなかった。

でも、なぜ？

水の心の中は複雑に絡み合っていた。

「おい、こんな夕方にお邪魔して大丈夫なのか？」

と、要は水に問いかける。

「平気よ。四季姉ちゃんこの時間だったら、忙しくないと思うから」

「しかし久しぶりだよな、お前の家に行くの……」
要は、その従姉妹の家に、お盆に顔を出したきりだったのを思い出しながら答える。

「そうだったかしら？」

「そうだよ。ああ、あの四季さんに会えるなんて幸せだよ!!」

『四季さん』呼ばわりするのは、憧れの対象である事に他なら無い。妹の水とは全く正反対で、落ち着いた、品の有るその四季の容貌は、誰の目から見ても好感が持てるのである。

「何でこんなにも違うかな？」

と、ふと自分を見る要の視線に気付いた水は、

「ふんっ。悪かったわね！」

と、比べられた事に腹を立てていた。

「どうせ私は、四季姉ちゃんのような人格者じゃないわよぉ！」
道すがらそんな取り留めの無い会話に華を咲かせていた。

「さあ、着いたわよ！」

厳格な門を開けた。

『ガラッ』と開けた水は、道すがら庭を案内していた。

「ただいま」

と、一度玄関の戸を開けると声をかけていた。

「お邪魔します」

要はその後を追い掛けるように、声を掛けた。広い土間のある玄関。歴代の風格が有る場所である。その奥に、古い間取りの部屋並びが見渡せられた。

「四季姉ちゃん!いる〜!?!」

暫くすると、一つの扉が『ガラッ』と開かれた。

「四季なら裏の庭にいるぞ……」

と、頭をかきながらあらわれる少年。

「げっ……」

と、その姿と声を聴いた瞬間、後ろに引く要。

「何だか、客人が来るって言って、待っていたようだけれどお前だったのか……」

その視線の先に要の姿を見つけてニヤリと笑っていた。その様子に、『しまった』と言う表情で、

「そう、ありがとう」

と、簡単に答える水。

「ところで、久しぶりだね要君？まも鎮お兄ちゃんは元気かな？」

壁に寄り掛かりながら腕を組んでこちらを眺めている少年。

「ええ、まあ。相変わらず、バスケ莫迦をやっていますよ」

と、顔をヒクつかせながら答える要。

「やめてよね！光一にいちゃん！」

顔を突き合わせる度に、この態度。いい加減、いがみ合うのはやめて欲しいものである。

「もっつ、行くわよ、要！」

そう言うと、再び玄関のドアから外に出る、水達。

その背中を見ながら、

「三名様御案な〜い」

と静かに見ている光一であった。

裏庭は広く。しかも神社の境内裏ともあって趣の有る所である。

ここに来ると、要は何だか悪さが出来ない気分になるものだった。

「さっきのは、誰？」

「水の兄貴」

「何だか、険悪だったようだけれど……」

鈍感ながらも結は、事を察したようである。鈍いんだかどうか？

「う〜ん。オレの兄貴に鎮って言うのが居るんだけど……（今度紹介するよ）そいつと折が合わなくてさ……いつもオレがとばっち

りを受けるんだ」

「お気の毒だね……」

「……ホントだよな」

そんな話をしながら三人は歩く。

『カコーン』という獅子舞の音が鳴り響いていた。

「四季姉どこ〜?」

裏庭には、神社の境内もあって、捜すにも一苦勞である。先程から、水は声を張り上げて四季を呼んでいた。そして、

「あつ!」

と、気付いた。

渡り廊下の有るそこに、巫女の格好をした四季が掃除をしていたからであった。

「あら、水。おかえりなさい」

その場所へと一目散に駆け出していた水。

何やら喋っているのが遠目にも分かる。そして、要のいる方に視線を送ってきた。要と結が、その場所に辿り着いた時、

「今日、お客さんが来る予感があったのだけど、要君だったのですね?」

四季が物静かな口調で話し掛ける。

「そして、そちらにるのが、結さんですね?」

と、見えるはずのない結の顔を微笑んで見ている。

「四季姉、見えるんだ?」

「ええ、見えますよ」

その言葉に、ちよつと頬を膨らませる水。

「ちえつ。見えないのは、私だけか!」

その表情は『つまんない』とでも言うかのような様子であった。

「水から話は聞きました。占うと言うのとは違いますが……ちよつと潜在意識を引き出すような事で、結さんの事を占って差し上げます。境内に来ていただけますか?」

そう言うと、掃除をしていたその箒を近くの壁に立て掛けて、その境内へと案内してくれた。

「我が宮下家の力は、水の力で占いやお払いをする事を生業として

きました」

言いながら、境内の中央に用意された水鏡に手をかざし、四季は何かを見ようと暗示を掛けた。そして、その中央に有る水鏡の前に結は立っていた。

「その力は、我が一族に受け継がれています。兄の光一は、傷を癒す力。妹の水は水の力を利用し力を与える力。そして私は未来を見、安定を量る力を。今、見えざる力を呼び起こします。精霊よ！降り来れ！！」

そう唱えると、四季は静かに水鏡に張られた水に精神を集中していた。

要と水は、その水鏡と、結の右に位置した所に正座して控え、この成りゆきを見守っていた。

「お前にそんな力があつたのか？」

「まあね……じゃないと、水泳部での都大会優勝だつてそう簡単には出来ないでしょ？」

「納得……」

「それより、静かに！」

水は、要の言葉が五月蠅いとも言うかのように、それを制した。暫くすると、水鏡を中心に眩い光が放たれる。

すると結の周りを、水鏡に張られたその水の飛沫が上がったかと思つと、勢いよく結の背後に取り巻き、ある像を形作つた。そして浮かび上がったのである。

「うわっ！なんだ！？」

要は驚いた形相で、後ろに身を引いた。

我八、『忘れられた時の者』ノ庇護者。名前八『ウリエル』

そう告げるとその像は、少しつつ形を変動させながら、結の背後で光を保ちながら揺らめいていた。

「コノ者ノ何ヲ知リタイノカ？」

「過去ならび、未来を！」

「その言葉に答える四季。」

「未来ナレバ答エラレヨウ」

「なれば、お教え下さいー」

「彼ノ器ヲ捜スナレバ、ソノモノニ近キモノヲ捜シナサイ」

「その者に近き者とは？」

「双子ノ姉」

「双子？」

「ソウ、無惨ニモ引キ裂カレタ、カノ双子ノ姉ヲ」

「次の刹那、その像は形をとどめられない様にして分断された。」

「何？どうしたの！？」

「四季の顔に疲れが見えている。その表情を水は確かに見届けた。」

「我が邪魔ヲスルモノガ現ワレタ」

「部口の片隅で、小さな物音が聞こえる。」

「誰！？」

「すぐさま四季が声を上げた。要と水がその音のする方を見る。」

「光一兄！何て事してるのよ！」

「その場を汚すかのようにこの場に現われた異端者。その瞬間、」

『バターン』と、四季が倒れた。
それを、助け起こすかのように、水と要は駆け寄る。

デハ、我が愛シ子ヨ……

そういつと、その水の像は水しぶきを上げ、光が解き放たれた。
次の瞬間『パーツ』とした虹色に光る光を放ちながら、大きな翼
を持った、一人の女性の姿が現われたのである。

「よくも邪魔をしてくれましたね」

要と水がその方角を見上げる。そして絶句しそうになった。

「……晶ちゃん!？」

「晶先輩!」

二人は同時にその人物の名前を呼んだ。

「何故ここに、晶ちゃんが?」

疑問符を投げかける要。訳がわからなかった。

そして水は、一目散で四季を要に任せて立ち上がった。

「やっぱり、見覚えが有ると思ったんだ!双子の姉弟って、晶先輩
なんでしょう!？」

見上げながら水は、胸に手を当てて叫んでいた。

「……」

その言葉に何も答えない晶。

「晶ちゃんと結が双子?そんな話、聞いた事もない……」

四季の意職が戻らない中、要は訳が分からないといったふうに事
の成りゆきを見守っていた。

「先輩!」

叫ぶ水。

「その前に、この場の邪魔をしてくれたネズミに消えてもらいまし
よう」

静かに答える晶。

「邪魔者ってオレの事?」

と、戸口に寄り掛かっている光一は、自分を指差し、『ふざけるな』とでも言った顔で晶を見上げていた。

「他に誰がいるのでしょうか？ラファエル殿？」

光一の事を言っているらしいが、要にも、水にも、何が何やら見当がつかないでいた。

すると晶は、両腕を大きく横に弧を描くように振り上げ、頭上で手の平に神経を集中する構えを見せる。

刹那、放射状に解き放たれた光がだんだんと大きな光の玉を形作った。

「暫く眠って頂きます！」

そう語ると、晶は、有無をいわせないようにして、光一目掛けてその玉を放ったのである。

一直線に走る光の玉。その玉は拡散し、大きな渦をも従え、光一を飲み込んだ。瞬闘、爆発的な音を発して光は収まった。

「うわー！！！」

という叫び声が辺りに響き、光一は光の渦の中に飲み込まれるようにして消えて行く。

後に残るのは、倒れた光一の姿であった。

「光一兄！」

その様子を逆光の中見届けていた要と水は何も出来ずにいた。

「晶先輩？一体これは……」

尊敬する先輩と言えども、水にとってこの状況は説明無しでは許せるものではなかった。

「ごめんなさいね……水。こうでもしないと、話が出来ないの……」

「光一兄は……？」

「大丈夫。ただ眠っているだけだから」

柱に崩れるように寄り掛かっている光一の姿は、あの音からは想像も出来ない程、何の変哲もないものであった。

「要。四季さんもそのうちに気を取り戻すから、安心なさい」

「晶ちゃん……これってどう言う事なの？それに、何故ここに晶ちゃんがいるの？」

今は入院生活をしている晶であった。しかし今、この場にいるのはまぎれもなく伊集院昌なのである。

「何から説明すればいいのか解からない……」

といいながら、晶は羽根を休めるかのように床に降り立った。

「説明？」

「そう。さつき、ウリエルが言っていたと思うけど……わたしがその、結の双子の姉なの」

「やっぱり……似ていると思った……」

要も水も結を晶と間違えた事は事実である。それ程に二人は似ていた。

「姓は違えど、私達は同じ母を持つ姉弟。だけど訳があつて私達が三歳の時、違う親元で離ればなれに暮らす事になったの」

静かに答える晶。

「でも、結の一家は破滅の道を歩んで行く……美奈子おばさまが……

…結のお母さんんだけど、結を虐待するようになって行ったの……

…それも話を難しくすると、仕方の無い事なんだけどね……」

「それじゃあ……結の家族は今？それに結は？」

要は問うた。そんな事まで知っていて、今まで平気でいられたのであるうかこの晶は？

「一家は既に死に絶えた。結の身体はもう既にないわ」

「えっ？」

要、水は驚きのあまり、声を失った。

「実は私の魂は、もう尽きようとしているの。と言うより、約束の期限が来たの」

「！？」

「ウリエルの導きが私の元に現われた。私はこの身を結に明け渡し、天界へ行かなければならない。それが私と、結に架せられた約束」

「そんな……先輩！？」

「晶ちゃん!!」

晶の器が、結の器になろうとは思ってもみない出来事であった。

「やだよ。晶先輩がいなくなるなんて……そんなの嫌だ!!」

水が、ベソをかくような仕種で涙を拭う。

「ごめんなさいね……でも、私はこうなる運命を、今か今かと待ってもいたの」

そう言うと、遠いその天界を夢見るかのように、遠い目をした晶がその場に居た。

「今まで、結は日の目に当たった事が無かった身の上。あなた達二人なら、この子を見守ってくれる事だと思う。それを見込んでお願いよ。この子のこと宜しく頼むわ!」

そう言うと、先程までハッキリとしていた晶の姿が半透明になって来た。一瞬涙で曇ったのかと目を擦る二人。

しかしそうでは無かった。

「ありがとう。また逢う日を楽しみにしているわ。必ず……」

「晶ちゃん!!」

「晶先輩!!」

次第に消えて行く晶の姿。その姿がすっかり消え行くまで一步も動く事が出来なかった二人は、じきに四季や、光一が目覚めるまでその場に立ち尽くしていた。

二人の前から消え去った晶。

それが、死を意味するものだとは知った二人はその後、すぐさま晶の居る病院へと駆け込んだ。駆け込んだ病院の郎屋の前には、面会謝絶の札が掛けられている。その部屋の前で二人と、結は時を待っていた。

「……」

誰一人声を発する者がいない中、不思議な現象が結を包んでいた。静まり返った部屋の中、晶の母の涙ぐんだ声だけ嗚咽として聞こえてくる。弱々しい心臓の計測器が、只静かに時を刻んでいる。

その様子が、結にはなぜか見えていたのである。暫くすると『ツ
ーッ』ともう何も刻まない心拍停止の音が鳴る。

「晶　　!!!」

泣叫ぶ晶の母。薫。

その様子を見届け、結は要と水に声を掛けた。

「ボクは、これから晶として生まれ変わる。でも、それを君たちは
許してくれるだろうか？」

そう語りかけた。

「……」

どう反応していいか戸惑う二人。しかし、答えを貰わないまま結
は、

「……それじゃ。行つて来るよ」

それだけ言い残すと、壁をすり抜けて結は部屋の中に入つて行っ
た。

「奇跡だ!!!」

部屋の中は、歓喜の声で持ち切りであった。

たった今止まったばかりの心音が蘇つたのである。

扉を開けて『バタバタ』という足音を立てながら、看護師や医師
が出入りを始めた。

たった今起こった事。それを要や水は知っていた。

「どう思う？」

要は水に問いかけた。

身体は晶のまま、中身は結である事実。

この事を知っていて今まで通り接する事が果たしてできるであ
るか？

「晶先輩は、私達を信じてこの事を知らせてくれた。信じていな
かったら、人知れず入れ替わっていたかもしれない。それに報いる
ために私達ができる事は？」

水は考えられる全て、受け入れる事を考えていた。

「そうだよな。晶ちゃんは、オレ達に後の事を頼んで逝ったんだよ……ならそれに答える事が先決だよな……」

水の言葉に同意するように答える要。

「それには、結の記憶が、晶先輩の物と変わらない物で無いと不自然だよな……」

「確かにそうだよな……」

これから先の事など分からない。

でも、一風変わった二人の精神構造を同じ物にする事など可能なのか？

それが今の二人の悩みの種であった。

「これから大変だ」

「本当……」

そうして晶の、いや、結の誕生を見届けて、二人はこの場を去っていったのである。

#1 PROLOGUE (後書き)

先にご忠告あります。

話の途中で、少しBL要素もあつたりですが、人が人を好きになる愛の形というものも必要だなと思つたりしたので、取り込んでます。お気をつけて頂ければ幸いです。

#2 RE BORN

RE BORN

「最近仲が良いな、お前達？」

とは、要の兄、鎮まもるの言葉であった。

先程帰ってきたばかりの鎮は、晶と、水。そして、要が部屋から出て来るのを帰り際見送っていた。

「二週間後に学習発表会があつて、オレと水が、主人公の劇をやんなきゃいけなくなつたんだ。で、晶ちゃんはその劇の監修役で手伝つてもらつてるんだよ」

と、言葉を返す。

「女の子に囲まれて、お前も軟派な奴」

呆れたと一言漏らす鎮。

その言葉に険が有る事は重々承知の上であつた。

特に、晶が退院してからは、要は付きっ切りと言つても良いくらい、傍から離れなかつた。それは、何も知らないであろう結の魂の事を気に掛けた行為である事は、誰にも言えない秘密であるのではあるが。

水に到つても、その事情を知っている上で手伝つてくれている。

今は冬で、水泳部もたまにしか練習が無い。晶は六年生で、もう引退している身では有るが、時に後輩に顔を見せる程度の付き合いがあつても差し障りは無かつた。

「軟派で悪かつたね。鎮兄ちゃんのように、男に囲まれて、バスケばっかやってるより健全だよ！」

ちよつと皮肉れて反発してみる。

鎮は、色素の薄い要とはうって変わったかのような黒髪を、スポーツマンらしく短く切りそろえた風貌をしている。

「へんつ。お前みたいに、男友達と遊ばないような変わり者よりは

いいさ」

この台詞と共に、冷蔵庫からポカリスエットの入ったベットボトルを取り出しながら答える鎮。

「それって焼きもち？オレだって、学校行けば男友達との付き合いだつてあるんだよおーだ！」

その様子を見ながら台所の椅子に腰掛けながら要はそう答える。

確かに、友達はいる。

しかし、家に帰ってまで遊ぼうとは思はない。と、言うより、今では晶、いや、結が男友達である気がしてきているのである。

一方、水に到っては、そんな事は二の次で、女として生きる振りをしているように思われる点があるが…

「ただいま……」

そこに、久しぶり顔を覗かせた道が、この部屋に入ってきた。

「おつ、要、元気そうだな！」

軟派と言えばこの男である。

「さつきそこで、晶ちゃんと、水ちゃんに会ったけど、お前達会ってたのか？」

「うん」

要にとつては良い兄であった。と言うより心が知れている兄でも言つのであるうか？

部屋に入って来るなり、要の頭を撫でている。

この道は、高較一年生。鎮の二つ上の兄である。その姿は、長い髪の毛を茶髪に染めていかにも不良です。といった風情である。

鎮より小柄で、一見華奢に見える。まあ、鍛え抜かれた鎮の体型が良すぎると言っただけなのだ……

「久しぶりだな。今日は夜遊びには行かないのか？」

この兄に対抗するような言葉で威圧するかのような鎮。

「良いじゃん。お前には関係ない事だ」

そんな会話をかわす道と、鎮。

高校生になる前までの道は、もっと落ち着いた、物静かな青年で

あつたような気がする。しかし、受験を始める年、鎮と一時険悪な喧嘩をして以来この変わり様だ。

「だけど、この喧嘩の理由を要は知らない。」

小さい頃は、よく、道の後を付いて歩いていた鎮であつたことは、幼い要の目にも記憶に残っている情景があつたくらい、仲が良かったのに……

「まあ、関係ない事だが、女遊びも少し控えたら良いだろう？ 実際、母さん達も心配している事だ」

水を差すかのように鎮は忠告した。

「重々承知の上だ。別に何の問題も起こしてはいない。楽しくやっているのに水を差すような事を言わないでくれるかな？」

「こつやつて、また喧嘩になる。それをはぐらかすように、」

「そうそう。オレ、主役もらつたんだ。劇で！」

と、焦りながら要はこの状況から脱するかのような勢いで話を切り出した。

「へえーすごいじゃん。で、何て劇？」

と、訊き返す道。椅子を逆向きにして『ドサツ』と座り込む。

「聞いて笑つてよ……何と、ロミオとジュリエット！」

「げつ！ 何んだそれ……！」

とは、鎮の言葉。

「ヒューツ。そんなの小学生がやんのか？ イカス……！」

とは、道の言葉。両極端に分かれてしまった。

「そう言えば主人公と言つていたけど、お前、ロミオやんのか？」

「そうだよ。似合わないだろう？ 容姿で選ばれた所見え見え！ っと思わない？」

「どこが……」

鎮は、そんな言葉に呆れて、物が言えないと言つ顔をしている。

「で、水ちゃんみなが、ジュリエット？」

「そう、気が強い上にあの短気さ！ 何で選ばれたのかさえ疑問だ！」

「単に、従姉妹同士だから気が合うだろうと言つ配慮じゃ無いか？」

という道。

「ホント、オレとしてはもっとう、派手なアクションものとかが良かったんだけどねえ……」

要が思い描くアクションものとは一体どんなものなのだろう。二人は影ながら疑問に思った……が口には出さないでおいた。

「それで、こんな家で練習しているって言うのは？」

「うっ……いやさあ、学校でも練習してはいるんだよ……ただ、何時まで経っても台詞を覚えられないために……」

と、その後は『ゴニョゴニョ』とただ、言い訳じみた言葉が飛び交う。

「つまり、居残り特訓な訳だ！」

鎮の口から笑いが飛び出した。

「そんなに笑う事無いだろう……」

底意地悪い鎮。その態度に要の頭に血が上ろうとした時、

「まあ、そう焦る事無いさ。その内何とかなるって！」

と、励ましてくれたのは道。

「道兄ちゃん〜！そう言ってくれるのは兄ちゃんだけだよ〜!!」
椅子越しに抱きつく。

それを良い子良い子。と道は慰める。その様子を見ながら、

「さてと、オレは宿題が有る。晩飯出来たら呼んでくれ」

とだけ言葉を残すと、その二人に一瞥をし、鎮は二借へと上がって行った。

「さて、オレも遊びに行つて来よおつと。晩飯はいらないうって言う
といてな。要！」

そう言うのと立ち上がる道。それを見上げながら、

「道兄ちゃん……」

と少し躊躇しながら要は道に語りかける。

「お節介かも知れないけど、鎮兄ちゃんも言っていたこと……もう
少し、家に居てあげてよ。母さん達本当に心配してるよ……」

その言葉をどう受け止めたかは分からないが、

「ああ」

とだけ答えると、道は、一度自分の部屋に戻るため二階に上がっていった。しかし数分立つと、着替えを終えた道は、玄関を後にしていた。

ため息をつく要は、『やはり』の状況を察し、台所から居間へと足を伸ばしていた。

「何度言ったら判るの、要！」

またかと大声で叫ぶ水。

「えっ？」

「そこは、マキユーシオと、ベンボリオとの会話で、余り気乗りしない態度を見せる所なの！そんなんじゃ、行きますよ。行きたいです！っていう演技に見えるわ！」

学校の教室の一室。練習している要に一言申す！という勢いで水は、先ほどから台詞と演技がバラバラな要にまくしたてていた。

「宮下さん。演技指導も良いけれど、これじゃあ全く先に進まない……少し、熱の入れ方を控えた方が……」

とは、クラス委員の安藤の言葉であった。

「いいえ！要ったら全く演技者としての心構えが足りないわ！こんな劇、見る人がみたらなんて思うか知れない。恥をかくのなんて嫌！根性で、この劇を乗り切るのよ！」

腕を振り上げ、一段と熱を入れている様子のこの少女の姿を、脇投のみんなが頭を抱えるように見守っていた。

そこに、『ガラッ』と、ドアを開ける者がいた。

「あつ。晶先輩！」

部屋に入って来たのは晶であった。

「晶ちゃん？」

駆け出す水。そしてあっけに取られるかのように見守るクラスメイト達。この変わりようが凄いからだった。

「どうしたんですか？」

「うん。ちょっと見学に来たの」

「ゲッ」

と、要は退く。

「本当ですか？それじゃあこの椅子使って下さい。立って見ていると疲れますから！」

「あれって、伊集院晶じゃないか？」

「何時見ても綺麗だね」

皆が口をそろえて囁きあっている。

晶は以前から、『美人薄命』の意味を込めた言葉が似合う先輩として、この学校で有名であった。

「晶ちゃん？何でこんな所まで……」

以前の要だつたら、ここで歡喜の言葉を上げている所であるが、これが結である事を知っているために、言葉が微妙に途切れていた。

「どれだけの成果が出るか見に来たの。どう？成果は？」

「それが台詞は何か覚えてきたんだけど、まだまだ演技者として上手くは行かないですよ！」

水は、ハツキリとその事を告げる。

「悪かったな……下手で！」

「そう思うなら、しっかりやってよね！」

まくしたてる水に、返す言葉が無い要は、頂垂れるしかない。

「まだ一週間有るのだもの。まだまだよ、頑張つてね」

微笑む晶。

「天使だ……！」

近くにいた少年が言葉を発した。確かに、元天使だったけど……それを何故だか違和感有る気持ちで聞いてしまった要は、『けっ』という表情で流す。

「それじゃあ続けるわよ！」

再開される劇。

一通りの所を流し終え、ついには下校のチャイムが鳴った。

「それじゃあ、解散。お疲れさま！」

暗くなった学校の廊下には既に電気がともっていた。

要達は、その廊下を三人で歩いていた。

「今日な、要の家行けないんだ。帰って家の手伝いしなきゃ行けないの……」

残念。という風に両手を顎の前で組む水。

「そうなのか？それはしょうがないな」

と、逆に、残念そうな顔を装いつつも、半ば嬉し気な心中の要。

「それじゃ、急いでて悪いんだけどこれで失礼します。それじゃ、

また明日ね！」

そう言うのと駆け出す水。

「五月蠅いのがいなくなって清々した〜！」

と、ボソリと言う要に、

「何？」

聞き取れなかった晶が返す。

「いや、何でも無いよ」

二人揃って、階段を降りて行く。

「あのさ、実は気になって隅べたんだ。お前の事……」

要は、二人でいる時は晶の事を、結として語りかけるようにしている。

「調べる？」

「うん」

そう言うのと、昇降口の踊り場までやってきていた。

もう外は真っ暗であった。

「京極結って言ったっけ？名前……」

「そうだけど……」

二人の時は、男言葉に戻る結。

「晶のお母さんが結婚する前の名前、京極薫って言うんだって、聞いたんだ」

「それじゃあやっぱり、晶とは双子なんだね」
 とは結の言葉。

「余り突っ込んで聞いた訳じゃ無いんだけど、晶のお母さんにはお兄さんが居て、そこに養子で三歳の時引き取られた子供が……つまり結、お前であつたらしい」

「……」

「晶。お父さんいないだろう？」

「うん。お母さんと二人暮らし。お父さんは『実^{みの}さん』と言って、六十歳の若さで晶が産まれる前に亡くなったと聞いたよ。」

静かに立ち止まり、昇降口で靴を置き換える。

「それが、初めは晶と結の二人を我が手で育てるつもりだったらしいんだけど、その力が及ばなくなって、お母さん。お兄さんの元に結を預けたらしい。養子として」

もうシャッターが降りかけている出口を、頭を曲げてぶつけないように潜ると、瞬間、野球部の練習が終わった校庭にライトが灯った。

「だから、ボクの名前は『京極』って言うんだね？」

「うん」

ライトの灯った校庭を横切りながら、尚も話し続ける二人。

「でも、良かった。結、ちゃんと家族と共に住んでるんじゃない？」

「うん。そう言う事になるよね。晶ちゃんがいなのは寂しいけど

……」

そう、もうこの世には何処にもいない魂。

ただ、受け繋がれた身体だけを残し去っていた。

「あのさ、『ウリエル』って天使の名前なんだってさ！」

「ああ……ボクを庇護してくれてたと言う人？」

「そう。図書館で調べたんだ。」

そういうと、鞆の中に仕舞い込んでいた一冊の本を取り出す要。

「四大エレメンタルの一人であり、土の守りを持っている者。時には、時間の狭間で、魂の管理をしているらしい」

「へえ……よく調べたね」

結は感心して続きを聞き入った。

「結構しんどかったよ。何処にもそんな事を載せている本なんか無かったから」

「ありがとう」

「いや、礼には及ばないさ。知らない事有ると調べたがる、オレの性分だから」

「意外に勉強家なんだ？」

その言葉はどうかと思うがと要は少し苦笑い。

「別に……勉強は好きじゃ無いんだけど、下らない事は良く覚えたがるんだ」

思わず額に汗をかいてしまった。

「あと、光一こういち兄の事も気になって調べたんだ」

「光一？」

「そう、水のお兄さん」

「何？何かあったっけ？」

もう忘れたのか結は問う。まあ、あの時意識があってもなかったようなものだから仕方ないか。

「ほらっ、晶ちゃんが言っていただろう？『ラファエル』って！」

「ああ、うん、そう言えば……」

「その『ラファエル』という名前も四大エレメンタルの内の一人としてあるんだ。風を守護するもの。」

「癒しの天使として名を列ねているらしい」

「それって？どういうこと？」

「解からない。けど『ウリエル』と『ラファエル』の二人が敵対しているってのは……何だか戴けないような気がする……」

「確かに……」

「どう見ても、敵って感じだったよね……」

結は、今やっとあの時の事を思い出していた。

「一体何なんだろうな？」

「全く見当が付かないや……」

結にはちんぷんかんぷんである。

まだ、この世界に慣れようとするのに手が一杯で……自分のことや、晶の事にまで頭が回らない状態であった。

「まあ、その内に何か有るかもしれないなあ……この事が重大な事であるのならば？」

要は、そんな結の事を想い、この辺でこの話は止めにしようと思いに決めた。

「ところで、勉強の方はどう？」

と、話をすり変える。

「あつ、うん。時間の狭間で読んでいた本のおかげかな？結構簡単だよ」

とあつさり答える結に、

「あつそう。それは何よりだったな」

と、そんな結に呆れる。

「それより、今年度、結構休んでいたから出席日数の方が心配ですねって担任の先生が言ってた」

と、結。

「半年以上休んでいたもんな……どう？身体は？しんどかったりしない？」

心配気に気を配ってくれている要の言葉に、

「それは全く心配無いよ。メキメキ健康になってるってお医者様が言ってる」

「そりゃ驚くよなあ。いきなり健康になったんじゃ……」

「あはは……そうだよね？」

そうやって笑っている結はのんきものだ。

「そういや、三月には結、卒業していなくなっちゃうんだ……」

「寂しい？」

少ししんみりする。夜道に二人の影が伸びていた。

「……まあな」

「大丈夫！家が隣なんだから遊びに来てくれたら良いじゃない？」

「うん……そうだけど……」

何だか、いつも側にいる事ができるはずなのに、遠くに行ってしまう気がして……

「何時でも、遊びにおいでよ！待ってるから！」

優しく笑って語り掛けてくれる結の言葉に、心無しか戸惑いを覚える。

「ああ……」

そう言いながら要は本を鞆に入れる。

「その前に、学習発表会！」

「げっ、それがあつたか……」

そんな感じでまたまた笑いが起こる二人。

一週間後、要は果たしてこの劇に馴染みそして上手く演じきれるのか？それは要にとって第一の試練であった。

「楽しみにしてるよ」

「御期待に添えるよう頑張りますです。はい」

そして、忙しい一週間は過ぎていくのである。

#3 METENMPSSCHOSIS

METENMPSSCHOSIS

この一週間は怒濤のように過ぎ去っていった。

劇の練習も然り、衣装合わせや、演出用のライティングや、音合わせなど。ステージとなる体育館の舞台でも練習をしてきた。

相変わらず、水の突っ込みみなをかわしながらの大変な一日一日であった。

「大分、見れるものになったじゃない!？」

と最後には、水の言葉も和らいでいた。

「こつぴどく指摘してくれたもんな……」

「当たり前でしょ! あんたの演技次第で、私の見栄えも変わるんだから!」

とは、いかにも水らしい返答である。

「しかし、よく間に合ったものよね……」

確かに、本当によく間に合ったものだ。皆の力あっての、この学留発表会である事が今にして頷ける気がする。

「後は当日を残すのみ!」

「オレ達の出番って何時だっけ?」

持ち時間二時間。四年生以上が対象のこの劇は、学年三クラスを選出して行われる。

時に、二日にも渡る期間を持った、派手な見せ物としては、この学校の名物なのである。

要は、手許の薄っぺらいパンフレットを見ながら、

「土曜の十時からか……今年是他校の学生も訪問する程派手なものになる事、請け合い無しだよな?」

とは、要の言葉。

「だからこそ、力も入るつてもんじゃない！」

水の気合いは十分であった。

そこに最後のリハーサルのための舞台貸しが始まった。

「それじゃ、頭張ろうぜ！」

「せいぜい、足を引つ張らないように！」

そうして、各所に別れる。

このリハーサルも、無事終わった。

あとは当日。明日十時に始まる開演を心待ちにするのみであった。

「それでは、四年一組の演目『ロミオとジュリエット』です」

当日、各学年及び、保護者や、他校の生徒の見守る中劇の幕は上った。

モンタギュー家とキャピレット家の悲恋物。

時に、ティボルトと、ロミオの一騎討ちに嘆くジュリエット。ここまで上手く事を進めてきていた。

要も水も上手くやってる

と、照明を浴びている二人を遠目で見ている結。

六年生は二日目の月曜日に演目のスケジュールが組まれていた。

しかし、結のいるクラスは、その劇の代表として名前は上がっていなかった。実の所、六年生のクラスの中でこの結のいるクラスも候補に上がっていた。結の人氣がそうさせていたのでは有るが、何と言っても病気を持っていた結に劇をさせる事は負担になってしまふのではないか？との配慮のため、保留にされてしまったのである。今日になっては、その心配もないのではあるが……劇に出ないクラスの人達は、火曜日からの各学科の特別研究発表会が催される事になっている。

そういふ結は、地元の歴史資料の発表をする手はずになっていた。その前に、この劇を見るため、一時席を離れたのである。

いよいよクライマックスだ…

何度か練習に付き合っていた結は、そのクライマックスをどんなふうになすかを楽しみに見物していた。

薬を飲むジュリエット。そして、そのジュリエットの死に悲嘆にくれて抱き寄せるロミオ。

スポットライトを浴びてその姿が浮き出されていた。

そして剣を引き抜くロミオ。

観客の目はその二人の姿に見入っていた。

静かに見守る観客。

そしてロミオの死。

時間が経ち。息を吹き返したジュリエットは、抱きかかえられたまま死んでいるロミオの姿に落胆し、自らの命を断つ。

悲しい音楽。そして幕は閉じられた。観客からの歓声が上がる。劇は程なく終幕した。

アンコールに答えて出て来る一同。

今回の配役の紹介。

要に水。そして今回の脇役に、演出した者の名前が上げられていた。

一礼してゆく一同。

拍手の嵐が、観客席から沸き起こる。

無事、終わったね

と思い、結が席を立とうとした瞬間だった。

まばゆい光が結の元に降りて来た。

それだけではない。要、水の立っている場所にも降りてきたのである。

しかし、誰一人としてその光景を不思議に思った者はいないよう
で……

『時の狭間の者達よ』今こそ転生の時が来た。魂よ我が元を集え
！』

そう言った声が耳もとに確かに響いた。晶はステージ上の要と、
水を振り返る。すると、要と水もこちらを見ていた。

「結！」

「晶先輩！」

二人の声が聴こえる。

しかしその言葉は辺りには聴こえていないらしい。

「要！水！」

三人は、暖かな光を感じながら、天空へと魂を解き放った。そし
て、光は細く消え失せたのである。

それからが大変であった。突然倒れ込むステージ上の要、と水。
そして、席を立ち上がった晶の三人が突如倒れこんだからである。

動揺するクラスメイト。そして観客達。

三人が三様、それぞれ息をしていなかったのだから……

光の渦が、要達三人を取り囲むようにして天界に導かれるよう浮
き上がって間もなくであった。

その光の渦の中、無数の泡を見た。それは、シャボン玉のような
泡に見えた。

「晶先輩！」

その泡の中から水が呼び掛ける声がまるで、霧の掛ったような声
として響いて来る。

「これは？」

問いかける要。

「分からない……」

何時の間にか、結はこの状況下、魂として浮上しているためか、

自分が自分本来の姿をしている事に気が付いた。

「結！」

遠くで自分を呼ぶ声。その声には聞き覚えがあった。

「晶ちゃん!？」

その姿が自分達を導くように眼前に立ちはだかっている。

「あれ?あそこにいるのは……」

要は、自分達と同じように泡に包まれた人影を見た。

「鎮兄ちゃん!それに道兄ちゃん!？」

要はその姿を見て驚く。

また同じように、水の声が響く。

「四季姉ちゃん!光一兄!？」

『フワフワ』と巻き上がるこの泡。

しかしそれは、ただ一点に向かって流れているようであった。そして、流れ込んだ先。大きな翼を持った晶の口にその泡が全て流れ込んだ時、目が眩む程の光でこの場にいる七人は、気絶した。

次に目を醒ますまで、どれだけの時間を用いたかはしれない。

そして目覚めた。

そこは、宮殿のような大理石を伴った階段を目の前にして、結は静かに起き上がったのである。

「要?水?」

まだぼやける視界の中、目を配った。

すると、すぐ側でうつ伏せに寝転がっている要と水の姿が視界に入ってきた。

揺すり起こそうと身体を持ち上げようとす結。

「起きて!要!水!」

二人の肩を同時に揺り動かしてみる。すると、

「うっん」

と、まどろみの中にあるような声を発して目を醒ます要。

「ここ。何処?」

うつぶせのまま、半身を起こして辺りを見渡す要。

「何？どう言う事？」

と、こちらは仰向けになって半身を起こす水。

「分からない……突熱光に包まれて、そしてシャボン玉のような泡に飲み込まれて……大きな晶ちゃんを見たんだよ」

結の解かりうる範囲、憶えている事を話した。

「オレ、兄ちゃん達を見たんだ！」

「私も、四季姉さんと、光一兄を！」

驚きにこれ以上ない表情を浮かべる三人。辺りは静かであった。

暫くして、立ち上がった三人は、周辺を歩き始める。

取り敢えずはこの宮殿を出ようと足を光のある窓辺へと伸ばした。外は晴れ渡った空に、二つの太陽を従え、緑なす大地と、石で出来た建物を見渡す事が出来た。

「何処？ここ……いったい何が？」

水らしくなく、『ヨロヨロ』とした足取りで、

「もしかしてボク達、晶ちゃんに導かれてこの場に来たんじゃないのかな……」

結は答える。

「『時の狭間の者達よ』今こそ転生の時が来た。魂よ我が元に集え！」とか何とか言ってたような……」

再び蘇る声の事を、結は考えていた。

「でも何でオレ達三人なんだ？」

「さあ……でも、要も水も兄妹の姿を見たって言ったよね？……もしかしたら、この場の何処かにいるんじゃない……？」

一理ある。とでも言う気がして三人は、取り敢えず、外へと出て行った。

少し混乱した頭を揺すぶりながら動き回っている。

宮殿を出ると、ところどころに大きな石像が立っていた。

「この石、何だか晶ちゃんを形どった石像のような気がしない？」
翼さえなければ、確かに言われたような気がして来る。

「これに向かつて、ボク達は流されたんだ……」

結が答える。

黙々と歩く三人。暫くすると、開けた大地に来ていた。辺り一面黄色い花が咲き乱れていた。

「こんな花、知らない……」

「見た事無いね……それより、何でこんなに暑いんだ？」

要は、ロミオの姿をしたままであった。

「夏のような陽気ね……」

水も、ジュリエットの衣装を着ているためか、動きづらそうに服の裾を引きずっている。

「君たちなんてまだ良いよ。ボクなんかこんな女の子の制服来てるんだから……」

とは、結の台調。

「いきなり、結の姿に戻ったな！」

要は、以前見た結の姿を思い起こしながら答える。

「そう言えば、初めましてかな？」

水は、今までこうやって、きちんと向かい合った事がなかったためか、些かためらっているようだった。

「言われてみれば、水はボクの事見るのは初めてだったんだ……」

結はそんな、改まった水に照れながら答える。

「うん。正直に言ったら、二度目なんだよね。瞬間だったんだけど顔見てるんだ」

と、あの時の事を思い出しながら、答える水。

「へえ、そうなんだ……？」

掛けられた書葉に驚く結。暫くその場を放心状態のまま歩く三人。
「ねえ、これから何処に行くの？」

水の問いかけに、ただ当て所もなく歩き回るのも何だとはかりに、

一度考えをまとめようと三人はその場に腰を下ろした。

「ふう。お腹すいた」

とは要の言葉。

「あんたこんな時にそんな事にかまってないでよ……私までお腹空いちゃう気分になるわ……」

水は膝を陶に当てるように体育座りをしている。

結は再び、石像の方を眺めていた。

その時であった。その石像から一筋の光が放射状に広がってこちらへと流れ込んできたのである。

「あれっ！」

「えっ？なに？」

その方角を指し示すように指を向ける結。

「今、石像が光ったんだ……ちよっと思ってみようよ！」

「何？どうしたのよ？」

立ち上がる結の姿を見上げて水が呼び掛ける。

「何かあるよ……きつと！」

「ちよっと思ってる！独りで行動すると迷っちゃうぞ！」

要もその姿を目で追いながら後に続く。変わらず晴れ渡った空は、二つの太陽を抱き天空を泳いでいた。

「こっちだ！」

石像の近くまで戻る要達。

その周辺を歩く。

「ねえ、見て！」

「こんな所に入り口が……」

近くに来て初めて分かった。その石像の右横に階段があったのである。

「入ってみるか？」

ごくりと生唾を飲み込みながら、要が二人に訊く。

「こうなれば、もう何が起きても驚かないわ……行きましょう！」

水が賛成する。

「ボクも同じだよ！」

そう言って三人は満場一致の意見で、その階段を上って行った。先頭は要であった。

草の蔓がはびこるこの石像内は、うすぼんやりとした光を回りに従えていた。

「何処まで上ったのかしら？」

だんだんと疲れてきた水は何時になったら最上階にたどり着けるのかが心配になっていた。

「かれこれ、一時間は歩いているな」

時間の経つのも分からないはずだが、体内時計的発想でそんな事を言う要。

「腹減ったぞー！」

要はだんだんこの景色に飽きてきた様子である。

何処までも続く階段。

「もう少し頑張ってみようよ！確かにこの石像から光が漏れてたんだ！」

言い出しつぺであったが何とか励まそうと結は言葉をかける。

「へいへい分かりましたよ。結の旦那」

と、足を引こずる様にして歩き続ける要。

こうしてどれだけの時間を費やしたのか、ついに最上階に足が辿り着いたのである。

そこは、水の音がしきりに聴こえる噴水がある部屋で、天井には青空を覗かした一角であった。

きらびやかな装飾を施した縛麗な場所。

「何なんだ？この部置は！」

実際、部屋と言うには間違っているのかもしれない。が、そうと例えるしか出来ない。

「ん？これは？」

噴水のあるその奥に、四方がガラス張りになった一角がある事に

気付いた要。促されて、その一角に足を向ける三人。
ガラスに手を掛けて中を見る。中には、七つの棺が並べられていた。

「あれっ？この紋章……」

結はその棺の蓋に描かれた敏章を指差して答える。

「確か……あの本に載っていた物にこんなのがあったよ……」

「何だって!？」

要は不思議そうに、その紋章と言われる装飾を眺める。

「ちよつと二人で一体何の話言ってるのよ!」

水は二人の会話に付いて行けない様子で、二人の後ろから声をかける。

そんな時であった。三人の脳裏に木霊するような声が聴こえてきたのは。

「お待ちしておりました。ルシフェル。トロンス。ミズチよ!貴方達の身体は今この棺の中に収まっています。解放するためには本人の魂を呼び起こさなければなりません。今このバリアを解き放ちます。中に入り、手を翳しなさい!さすればおのずと自分を取り戻せます!」

暫くすると、そのガラスに手を掛けていたはずなのに消えて無くなった。

「うわっ!!!」

いきなり消えたそのガラスのために、要は預けた身体のバランスを崩しそうになった。

「もっと早く忠告してくれよな!」

と、ケチをつける。

「それでは、手を翳しなさい」

言われるまま、どの棺に手を翳したらいいのかも分からなかった三人は、戸惑いながらもそうする。

暫くすると、手の平が熱くなり今にもただだれて溶け出してしまいうそうになった。

「い、痛い！」

水はその痛さに耐え切れない叫び声をあげる。

「我慢なさい。少しの間です。自分の身体を捜すのに今一度勇氣を持ちなさい！」

よく見れば、その三人の手の平には、それぞれ違った紋章が浮かび上がっている。

「もう一息です！」

声は励ますかのように聴こえる。

「うおっ！」

要の手から発散された光が、一つの棺に光が当たった。

「ルシフェルよ、そなたの身体はその棺の中にあります！直ちにお開けなさい！」

言われるがままその棺の蓋を開ける。

中には金髪の長い髪をした青年くらの年頃の天使が胸に手を組んだ状態で入っていた。その姿を見た瞬間、要は引きずり込まれるかのように、その器に入ってしまった。

同じように、結の光が一つの棺を見つけた。

「それがあなたの身体です。お開けなさいトロンズよ！」

光に包まれたその棺をあける。中には、栗毛色のウエーブの掛った髪を肩まで伸ばした青年が横たわっている。

結もその身体に引き込まれるかのように器に入ってしまった。

最後に水。

同じように棺が光り輝いた。

「ミズチよ！それがあなたです。お開けなさい！」

水は言われたとおり、棺の蓋を開けた。

中には竜神人の姿をした一匹の小動物が横たわっていた。

「これで転生は終わりました。先に来た『ガブリエル』『ラファエル』『ケルビム』『セラフィム』も、既に自分自身のすべき事を思い出しこの場を離れました。さあ、あなた達もその使命を全うするために行動しなさい。そして、一刻も早くこの天界を救うのです！」

その言葉を残し、声は聴こえなくなった。

まるで、この展開を知っていた者の言葉のような意味合いだけを
残し、その不思議な声は遠ざかったのである。

4 A REUNION

A REUNION

「この世は『ビッグバン』が始まってからと言うもの、この広がりつつある宇宙を遠くから神が支えられて来られました。この天界はその大きくなる宇宙の外側。まるで膨れ上がるシュークリームのような、皮の外側に位置しています。我らが護る宇宙はそのクリームのような物。何時破裂して皮を飲み込んでしまうかも知れません。また、柔らかなクリームは、何時形を変えるかも知れません。もちろん、それにあわせて皮の形態も変わって来ます」

一人の女性がこんな事を話している。

授業中、一人の『トロンズ』はその話を聴いていた。

『ジリリン』と、ベルの音が聴こえ、授業が終わる。

「今日はここまで。明日はまたこの続きをやります。ちゃんと予習をしてくて下さいね」

と、先生と思われるその女性は教卓から離れて教室を後にしていた。

「おーい。『トロンズ』！今日帰りに近くの喫茶店に行かないか？奢るぜ！」

とは、親友の『ルシフェル』の言葉。

「うん。いいよ……でも、予習ちゃんとやっとなないと先生に怒られてしまうよ」

「なーに堅い事言ってるんだよ。そんなのチヨチヨイとしてればいいんだって！」

気軽に答える『ルシフェル』

「分かったよ。遅くならなければね……そう言えば、妹の『ミカエル』は構わないの？」

「邪魔になるからいいや」

と、少しうざったそうに答える。

「少しはお兄さんとしての自覚持った方が良いんじゃない？」

『ルシフェル』の言葉に、ちよっとしかめっ面の『トロンズ』

「そう言えば、『トロンズ』のお姉さん。どう？その後……身体の調子が悪いつて聞いたんだけど？」

そう、『トロンズ』には、双子の姉さんがいる。もともと外に出て行動するのが苦手で、明るい昼間に散歩することはなかった。

「うん……未だ調子が悪いみたい。心配掛けちゃってるね」

「実はこの薬。ちよっとした知り合いから入手したんだけど……鬱病に効くんだったさあ。どう？一つお姉さんに……」

「ありがたいけど……それって、一種の麻薬でしょう？ちよっとね……」

その薬を遠ざけるように『トロンズ』は退く。

「まっ、しょうがないか……それじゃ、いつもの所で待ってるからな！」

そう言うと、『ルシフェル』は今まで割り込んで来ていたこの教室から出て行った。

「相変わらず勝手な奴……」

そんな夢を見て目覚めた。そして、結は辺りを見回した。

真っ暗な視界には何一つ見い出せない。

ボクが「トロンズ」？

それは役職名にしかない名前。本当のこの世での名前ではない。しかし、『ルシフェル』はそう呼んでいた。

『ルシフェル』が、要？

ボク達は親友で……そして、この天界を、宇宙を守護するために働いていた。

「ルシフェル」……要……

どちらの記憶も持っているためか、どちらの名前で呼んだら良いのか見当が付かなくなっていた。そんな折、

「結!」

と呼ぶ声が聴こえてきた。それが、要の声だと気付くには時間は掛らなかった。

「要?」

大分、目が慣れてきたのか、辺りの様子が目に入ってきた。

金色に光り輝く髪を揺らしながら『ルシフェル』の格好をした要がやって来る。

「要の髪。光り輝いてる!」

とは驚愕の声である。

「みんな何処にいるのか捜して彷徨ってたんだ。やっと見つけた時にはそんな姿で、一瞬判らなかつたぜ?」

とは、確かに判らないであろう。全く面影の無いこの容貌であれば。

「さっき夢を見てたんだ。ボク達は、天界を守るための一員だつて言つ夢を……」

要に告げる。

「ああ、それオレも見た。変な気分だよ」

「そう言えば、水の姿を見かけない……」

「水!」

一番最後に棺の中に入った彼女は、さっきの二人と同様、姿を消していた。

「この暗さじゃ、捜し出すのも苦労だな……」
言葉を濁していた時、

「私はここよ!」

遠くから、水の声が聴こえてきた。『バサバサ』という翼の音を伴いながら。

「お前、その姿！」

近くに来てその姿が明らかになった時に初めて驚く。

「私はどうやら、竜神人らしいわね」

と、水龍の姿をした水がそこに降り立った。

「でも、この姿、人型にも出来るのよ！」

と、得意げにメタモルフォーゼして見せる。

「すげっ！」

大きな尖った耳を持った人型の竜神人。顔半分を覆う、爬虫類の青白い鱗がキラキラ光っている。

「何だか変な気分だわ。私の使命。それが解かったとたん、こんな暗闇にいるんだもの」

「お前の使命？」

「そう。私の使命は、晶先輩を守る事。でも何処に行けば良いのか分からないの」

と、辺りを見回す。

三人が出会ったのも束の間、再びこんな場所で時を過ごさなければならぬとは、一体どう言う事なのであろうか。

「確か、オレ達がここに来る前に、後の四つの棺がどうか言っていたよな？」

「うん。既に使命を全うするため……」

あの言葉が本当であれば、既に先に来た者達は、この暗闇を脱し切れたと言っても過言ではない。

「思い出そう。そうすれば、使命とやらがおのずととして導いてくれるかもしれない」

「思い出す？」

「そう、力強く念じるんだ！」

脈絡ない要の言葉を信じて、三人は念を込めた。

「オレ達が行かなければならない所」

その瞬間、水の身体が光に包まれた。

「私、行かなきゃ。晶先輩の所へ！」

すると、オーラに似た光が一つの線を描き飛び去って行った。

「水！」

その様子を見届けて、後の二人も念じた。

「オレの……」

「ボクの……」

そして同時に二人の背中から水と同じオーラが発せられ、二本の光りの線を描きながらこの場から消え失せた。

二人の呪文に似た思い。

晶ちゃん

答えは見つかった。

「遅かったじゃない」

とは、水の言葉。

「悪かったな……お前みたく単純な思考回路、こちとらしてないからな！」

と、要はいけしやあしやあと答える。

「三人三様に、『キーワード』とも言える物を夢に見てもらったのだけど……通じたようで良かったわ」

と、今の結と同様の容貌をした晶が一つの椅子に座ってこちらを見下ろしていた。

「晶ちゃん！」

驚いたように言葉を発する要。

「突然な事で申し訳なかったのだけど、これ以上の犠牲をこの天界に招く事はできなかつたの。結に於いては、本当にごめんなさいね」と、少し申し訳無さそうに謝る晶。

「せっかく私の身体を譲ったばかりで、これからって時に……呼び戻してしまつたなんて……」

「ううん！そんなことは良いよ。で、どうしたの？」

話を元に戻すように問い返す。

「この天界に、異変が起こったの。それも、一回やそこらの事ではなくて、一日に何十回ともしれない異変……私達だけじゃ太刀打ちできないのよ」

「それで、ボク達にもその異変を解決して欲しいと言う事なんだね？」

「ええ、そうよ。この天界での一日は、地球の時間で換算すると百分の一秒と言うくらいに時間しか経たないの……逆にこの天界は地球の二日程の出来事が一日に襖算される程に長い。だから、今あなた達の身体は、地球では死んでいる形になっけていても、生き返る事が可能な程の余裕がある。出来れば、早く解決してもらって、あなた達を地球に返してあげたいと思っているの」

と、語る晶は、忍びないと言う表情で三人を見渡す。

「なあゝに、晶ちゃんのたつてのお誘いとあつちやゝ、オレ達手を貸すよ！」

「そうよ。どう言う事情であろうと、受けてたつわ！」

要も、水もその覚悟は出来てると言つた様子である。

「それじゃあ、まずここであなた達以外の同胞を紹介しておくわ
そう言つと、晶はその四人を紹介した。

「まず、要の兄、鎖。天界では『ケルビム』の称号を受けし者。そして同じくその兄、道。『セラフイム』の称号を持っています。あとこちらは、水の姉、四季。四大エレメンタル『ガブリエル』その兄、光一。同じく四大エレメンタルの一人『ラファエル』あなた達より先に転生した者達です」

と紹介を受ける。

「兄ちゃん達が！？」

「姉さん兄ちゃん！？」

やはりあの時見た光景は真であつたのか……と今はつきり思う二人であつた。

「『ガブリエル』殿は、北の『玄武』の地を守護してもらつたため、

このままこの地を去ってもらいます。周りに気を配って下さい。あと、『ラファエル』殿には、東の『青龍』の地を守護してもらいます。直ちにそこに控える者を従えて、出立して下さい！」

その言葉を受け取り、素直に晶の命を聞き四季と光一は旅立つ準備を始める。

「あとは『ケルビム』殿と、『セラフィム』殿には、この地から南の『朱雀』の地へと赴いてもらいます。この地は『ミカエル』殿が守護しておりますので、一先ずの応援をして差し上げて下さい」

と言うと、あれ程仲が悪かったはずの二人は、荷物をそろえ旅立ちを承認した。

「それじゃ、オレ達は？」

と、要は晶に尋ねた。

「三人には、私と供に、西の『白虎』の地『ウリエル』殿が守護している地へ赴いてもらう事になります」

そう言うつと、

「『ウリエル』？」

と、結が聞き返す。聴き知った名前であることに敏感に反応した。

「そう、あなたには、ちょっとかわりがあったわね……そう、あなたを地球に導いた天使です」

「あの方に会える……」

と、結は心無しか懐かしい気持ちになった。

「それじゃあ、ここに用意している荷物を持って今から出向きます。道中、危険が積み重ねられるとは思っただけど、気を引き締めて行動して下さいね！」

その言葉で行動を起こす要達は周りにいる天使達から荷物を授かり、この宮殿をを発ち、西の地白虎を目し旅立ったのである。

#5 A BOTTLENECK

A BOTTLENECK

晶、要、結、水、が旅立ってから暫くすると、大きな地震が天界を襲った。

「何!?!この大きな地震は……!」

立っている事も困難な程の大地震。

「落ち着いて、近くの木にしがみつくのよ!」

と、無線で指図する晶。

ようやくその地震が止んだ時、大きな地割れが足下をすり抜けて行っただ。

「これが異変?」

「そう……どう言う訳か、日に何十回ともしれない程の地震にあっているの……!」

とは、晶の言葉。しかし、水の翼に乗っているだけにその被害がない。

「おいつ!空中に居るだけ良いじゃないか!」

と、地面を歩いている要は、そんな空中にいる二人に一瞥を食らわず。

「だって、要と結まで乗せると、上手く飛べないんだもん!」

とは、水の言葉。全く何て言い草だろう。

「か弱い、晶先輩に何処にあるかもしれないような西の地までも歩かせる事なんて、出来ないでしょう!?!」

と、道理が通っているだけに反論が出来ないでいる要。

「ええいつ!?!分かってるよ、そんな事くらい……!」

ブツブツと文句はたれるものの、再び歩き出す。結はそんな二人の会話を温かく見守っていた。

「しかし、一体何処にあるんだ?ただ、西へ。って事だけど、見当

が付かないぞ！」

もうすでに、要はくたびれていた。

「この天界は、卵型の球体で出来ているの。果てしもないこの地をただ漠然と西に……と言っても確かに見当も付かない事ね……さっき私達が居た所を中央と思っただければ、少しは解かってもらえるかしら？」

「じゃあ、この方位磁石で西の地を歩み続ければ、その内辿り着くって言う寸法!？」

「そうね。でもごめんなさいね……視察しながら行かなければならない大任を引き受けてもらったものの、歩きだと本当に疲れるでしょう?。」

労わりの言葉が晶の口からもれる。

「いや……それは良いんだけどさ……ただ、慣れないから……」

と、要は晶の言葉に困っている。

行けども行けども、ただ、緑成す大地だけじゃ、好い加減飽きてきたのである。

「この先に宿場町があるわ、そこで少し休んで行きましょう」

「本当!? 飯食える!？」

もう腹ペコ!とでも訴えるかのような要のキラキラな視線が晶と、水を射抜く。

「まったく、食い意地ばかりなんだから〜!」

水は呆れてその宿場町へと、翼を走らせたのである。

「ここは、西の地の入り口の町。『デザートタウン』ここから西は砂漠へと続くため、一時の休息をするためにはかかせない場所」

晶は、宿を取りその説明をする。

「それじゃあ、次の宿場町は、砂漠の中になるってことか……」

「もちろんそうなるわね」

その話を聞いたとたん『どさり』と腰を下ろす要。

「大量の水を買い込まないと……」

「いえ……心配は無いわ。ミズチのウロコが、最低最小限の水分補

給をしてくれるから」

「ほんとか？水！？」

「ええ、本当よ。ただし、要の要求通りにことが進むなんて思わないでよねえ？」

舌を出しからかう水。

「生意気！！」

でも、少し気が楽になった要達は、僅かでもここで休憩を取ろうと布団をあつらった。

「私と水はこの部屋を借り受けたから、何か変わった事があつたらすぐに呼ぶのですよ？」

「オレ達もこつちの部屋を借りたから、何かあつたら呼んでくれ！」

二組に別れた一行は二つ目の太陽が沈んだ時には休む準備が整っていた。

「おいつ。結！」

「何？」

「お前、イビキかくか？」

突然何を言うのかと思いきや、くだらない質問であった。

「オレ、寝言が五月蠅いらしいんだ……眠れなかつたら、どついて良いぞ！」

「……う、うん分かった」

そんなこと出来ないけど、結はそう言うと、明かりを消した二人は眠りに就いた。

『キーツ』

何処からともなく闇の中。ドアが開く音がした。

寝静まった二人はその事に気づかないで、イビキをかきながら眠り込んでいる。

そして、その事に安堵しているかのような足音を忍ばせたその者は、二人の上に黒い影を落としていた。

よく眠っているようだ……今の内に

と、腰から拳銃を引き抜きその眠り込んでいる二人に向かって銃口を向ける。

『ズバーン、ズバーン』という大音響が辺りに響く。

その玉は確かに布団をぶち抜いていた。

「やったぞ！」

と思いきや、突然足を掴まれるその者。

「うわっ！！！」

驚きの余り腰を抜かす。

「ふふふ、残念でした」

と、そのぶち抜かれた布団の下より這い出て来る要。

「ここに来る途中、オレ達のことを追って来る者することに気付いてたんだよねえ」

と、明かりを灯す。すると、既に起き上がっている結の姿が、灯された部屋の中央にあった。

「誰の差し金だい？」

と、結は問う。

「答えるもんか！」

その者は口を堅く閉ざした閉ざす。

「困ったねえ」

そんな会話をしていると、戸口に晶と水とが慌てふためいてやってきた。

「捕まえたのね！」

とは水の言葉。

「どういう魂胆ですか！？あつ、あなた…その紋章は……！！！」

と、振り向いたその者の胸にある紋章を見つけた晶は、驚きの表情に変わった。

「ちっ！！！」

唾を吐きかける勢いでその者が言つと、奥歯に仕込んでいた薬ら

しき物を噛み砕いたらしく、突然倒れ込んだ。

「こいつ、死にやがった……」

要は、その者を受け止めて、布団の上に寝転がす。

「晶先輩！この者のこと何か知っているんですか？」

「ええ、最近見かける謀反を企む者達が刻んでいる紋章です。それはちょうど、この天界を揺るがす大地震が起き始めた頃から出始めた輩……でもなぜ？私達を追い掛け始めたのでしょうか？」

晶は訳がわからないと途方にくれている。

「訳なんて何でも良いんじゃない？確かにオレ達のこと狙っている。これを黙って見ている事なんて出来ない……この旅、一筋縄じゃ行かないってこつた」

要はその者の死体を跪きながらながら見ている。これが死体。普通、そんな者を見た日には立っていられないと思っていたが、この世界では何とも感じられないから不思議だったりする。

「何にしても、貴方たちが無事でよかつたわ」

晶は肩を撫で下ろすように答えた。

「用心してたからね」

結もその言葉に、答える。

「これから先どれだけ多くの者に付け狙われるか分からない。現に、この道中の間、多くの間者を目撃している。気を配らないと……」

要は、胸の奥に仕舞い込んでいた闘志を燃やしているかのようだ。そんな折、店主がこの騒動に青白い表情でやって来た。

その最中気にして無いという風に装った四人は再び自分の部屋で休む事にしたのである。

明日からの旅。心は常に西の果て。同時に、いろんな試練が待っている事を考慮に入れ眠りに就く。

旅は未だ始まったばかりなのであるのだから。

その頃の、鎮と道は、ひたすら声を掛け合う事も無く『ミカエル』のいる南の地『朱雀』へと足を向けていた。

この二人も、『船』^{シッブ}を使う事無く、徒歩での旅をしていた。南に向かう道程は、サバナンナのような草原を越えてその先の熱帯雨林へと入る前に、宿場町『トリッドタウン』で一時足を休めた。

「お客さん。ここから先は、雨具が必要になりますよ」

とは、その旅館のオーナーの言葉であった。

この言葉に、素直に自らの荷物の中にそれらしい物が入っているかを確認する。すると、

中にはそこに行くためにあつらえられた雨具が入っていた。

「ああ、間に合っているよ」

と、鎮はその忠告をくれたオーナーに静かに言葉を返した。

「部屋、二つ用意してくれないかな？」

と、道は頼む。

「誠に申し訳ないのですが、お客さん。この時期、この地方に旅する方々で一杯で、部屋はお二人様に一つしかお貸しできないんです。そのオーナーは答える。

「そこを何とかならないか？」

と、鎮が頼み込む。しかし、部屋は限られているのだ。

「何処へ行つても、その要求は通りませんよ。お客さん？」

仕方なく、一つの部置を借りる事となった。

部屋に入ると、木であしらわれたベッドが二つ並んでいた。

「子供じゃあるまいし……」

と、幼い頃同じ部屋で寝ていた事を思い出しながら、道は愚痴る。痩せた身体は骨張っていて、しかも、銀色の髪の毛がよりその痩せた身体を引き立たせるかのように、短く切りそろえられている。

「仕方ないだろう。空き部屋が無いって言うんだからー!!」

その『うじうじ』と言っている兄をよそに、鎮は端にあるベッドの上に『バタリ』と寝っ転がった。布団から埃が舞い上がる。

「何だよ！掃除してんのか？ここは……」

さらに愚痴る道。

「ところで、気付いたか？」

「ああ……？オレ達の後を付かず離れず付け歩いてる輩やかいのことか？」

「そつだ……」

「今の所は、何の危害も加える事は無さそつだけど……油断は出来ないな」

道はベッドの片隅に腰を掛けながら答える。

この天界の鎮の姿は、青い髪を後ろで一つに束ねた姿をしている。体格もよく、身長二メートル以上もある巨人だ。

「そつだな……寝てる時も気を配るようにしなければ」

「朝までは長い。交代で見張るようにしよう」

「それが得策だな」

了承する鎮。

「ところで、あの地震……何の予兆無しであれだけの揺れをするなんてどう言う事だ？」

信じられがたい揺れ方。それも度々起こる。

「何かの前触れか？地表下で、悪魔が揺すり起こしているとか……？」

「あり得る。もう何千年前もの聖戦の時もこれに似た現象があった覚えがあるし」

鎮は、思い出すかのように答えた。

「何でこんなことが記憶にあるんだらうな？」

と、道が問いかける。

「知るかよ。あるんだから……しょうがないじゃないか……」

実の所、未だに信じられないでいる。

「要もこの地に来てたよな。オレ達の兄弟全員が大移動したんだぜ……やっつてられないよな」

顎の下に拳を作った手を付いて、道は考え込む。

「それを言うなら、親戚中だろ？」

確かにそつだ。宮下家の三人もこの天界に来ているのである。内二人は四大工レメンタルの守護天使だ。

「まあ、あいつはオレに似て、立ち回りは良いからな、それに女運も良い」

そう言って笑う道。その姿をただ見つめる鎮。

「よく言うよ……」『コロコロ』女変えてるあんたに、そう言われたら要も可哀想だぜ」

冗談半分で言ってみる。

「お前になんか分からない……」

それを冗談と取らない道はそう答える。冗談とは取れないのだ。

「……分かりたくないさ」

目蓋を閉じる鎮。

「でもこれだけはいつまでも変わらない……オレは、道を愛しているということ」

一瞬の沈黙。

「二度と言っな……今のは聞かなかった事にしてやる……」

そう言うと、道は布団をひつかぶりそのまま眠りに付いた。

鎮はただ、それを見届けていた。

「おーい！良い天気だぞー！起きろー！！」

とは、水の怒鳴り声。

時計を見ると、朝の六時であった。

しかし、お日様は一つ目の太隅の日の出でサンサンと照り出している。

「うーん、眠い。もう少し……うにゃ」

と、要はその気持ちの良い眠りから起きずに布団を握り直していた。

「あんた一人の事じゃないんだ！！起きろー！！」

ついにはその布団をひつぺ返した。

「……おはよう」

未だ、醒め切らない目を擦りながら、要は水達に挨拶をかわす。

「今日は、これから夕暮れまで歩き続けるんだから、気を引き締め

なさいよ！」

と、齒磨きをしている要をしり目に、水は追い打ちをかける。

「おはよう、水！」

結が既に支度を終えた姿で、声をかける。

「さすがね、結くんは。要とは大違いね！」

誰かさんをノックアウトするつもりで掛けられた言葉に、『ムツ』とする要。

「さあ、出かけるわよ。旅館の主にはもうチェックアウト申し入れてきたから、急ぎましょう」

そう良いながらドアを開け部屋に入って来る晶。

「分かったよ！急ぎますよ！！」

と、要は最後の砦を崩されたかの勢いで急いだ。

「朝から、五度目だね……地震」

今さっきあった、余震を含めた地震を数えながら結は呟く。

「夜中、あの出来事が終わった後にも三度あったわ」

とは晶。

「この地震、シュークリームのクリームが、中から出ようとしてるんじゃないかな？」

要は問いかけた。

「ああ、学校で習った言葉そのまま使うなんて……要らしく！！」

「知ってる？その皮と、クリームの間には魔界と言う空間がある事を？」

水が、その事に付け加えるかのように答える。

「それじゃあ、皮を突き破って悪魔が占領しに来てるんじゃない……」

「あり得る事ね。聖戦の折、同じ現象があったわ……もちろん今回も、その事を考慮に入れて皆行動している」

と晶は有りうる話を伝える。

『ビッグバン』の勢いのために、この世界の秩序に狂いが見られるのも確かであるから、本当の事は判らないのだけれど……時に現

れる野党が、悪魔一団である可能性もあるの。この地上のどこかに歪み^{ひず}が出来てしまった為にそこから入って来る事が可能になったのかもしれない……いろいろな線を当たりながら、今回の旅はあるの。そう伝えようと、水の上に乗っている晶は要達は無線で声をかける。「あなたの、お兄さん達もこの事は知らせてあるの。もし歪みを見つけたら、直ちに塞がなければならぬから……でもその力は、四大エレメンタルの者にしか与えられていないのは事実。いくら位が上である者であっても、その力は発揮されはしないのです。そんな所を見つけたら、直ちに教えて下さいね！」

「了解！……あ、でも昨日、地震があつた時裂けた地面……あれは？」

と、結は思い出したかのように問いかけた。

「あれに関しては、既に胴查の手が入っているの……地震の方は、中央の施設団体が、コンピューターを使ってその探知をしているから心配ないの……ただ、それとは別に、元からあるもの。知られざる内に出来た歪みが今回の調査の対象ってわけ」

晶の言葉に、

「了解！」

と、結と要は頷いた。

一日四十八時間もの長い時間。只二人は歩き続けた。途中、水からウロコを貰い受けるため休息を取りながら……

今は夜更け。今日の所は宿場町に止まる事なく野営する羽目になった。

「一体何処まで続くんだよ、このお砂場は！」
頭を掻きむしりながら背後に倒れ込む要。

「うおー！！」

と夜空を仰ぎ見る。

「雲一つない澄み渡った空には二つに重なる月が出ていた。まるで月光欲を楽しんでいるかのような晶は、

「安心しなさい。後二日もすれば、『ウリエル』殿の支配地の入り口にはたどり着けますよ」

と気軽に言う。

「え？支配地って事は……」

結は頭から黒い布を被り問いかけた。

「きーっ！この先もつと遠くにあるって事だよー！！」

と、倒れ込んだ要はついには、腕を顔に乗せて言う。只の駄々っ子のようだ。

「なあ、オレ達天使なんだろう？翼使って『ヒュヒューツ』と飛んで行けない訳？」

晶の方に視線を送るように身体を捻る要。

「それでも良いかも知れませんが、今回は内密に行動しているので。何処で敵に出くわすかも知れないのですから……それに、歪みを見つけながらの行動を起こしてもらわないと……」

と、躊躇いながらも答える晶。それは暫く辛抱して欲しいとの配慮でもある。

「はい！わかりましたー！！」

と、拗ねるように身を戻す要。再び空を見上げる。

すると、不思議な感覚に気付き起き上がった。

「あれっ？星がない……！？」

そうだそう言えば、あの二つ量なった月はあるものの、星が見当たらないのだ。

「当然ですよ。宇宙はこの天界の周りにはないので……」

と、その疑問に答える晶。

「でもそれじゃ……なんで、太陽や、月はある訳？」

結も不思議に思い問い返す。

「太極は、神の魂を模したものだ。そして、月は、夜の神の魂を模したものだ。これは常識です。覚えておきなさい？」

「へー。そうなんだ……」

水は感心したかのように、その言葉を聞いていた。

「じゃあさ、魔界ではどんな風に見えるんだろうな？」
要は問いかける。

「さあ……実際見に行った事がないから分かりませんが、一日中夜の世界だと言いつたえられています」

「へーっ！未知の世界か……神が支配していない世界なのかな？」

「いいえ。神はどの世界にも存在します。ただし干渉をする事はないと聞いております」

「見てるだけなのか……」

「そういうことですね」

四人はこの暗闇に浮かぶ、月を仰ぎ見て不思議な感覚を胸に抱いていた。

「さあ、明日もこの調子で移動します。ゆっくり休みましょう。特に要は休んでおきなさい。今日みたいに疲れを見せてると、置いて行きますよ？」

昼間の事があるから、改めて晶は言った。

「承知しましたよ。我がリーダー様！」

声掛けて、四人は身体を休めるように眠りについた。

今日は、昨日のように賊にあう事なく、じつくりと休息を取る事が出来た。

そして再び朝がやって来るのである。

それから三日三晩この旅の日々が続いた。

「あそこに見える有刺鉄線があるフェンスの向こうが『ウリエル』
殿の支配下の地になります」

そう無線で、告げながら晶は指をさす。

「あそこって……？」

と、結が目をこらしながら前方を見ている。塵気楼のようなユラユラした視界が印象的だ。

「ほら、ようく目をこらして見て御覧なさい。確かに見えるでしょうっ」

とは言うものの、辺りは砂吹雪が舞い散っていて、目をこらしても上手く見つけられない。

暫くしてやっと、フェンスなるものがちらちらと見え始めてきた。「今日は、あの近くに宿を取ります。朝には通行手形を持ってあのフェンスを越えて中に入りますよ。よく休んで下さいね?」

とは、水の背中に乗っている者が言う言葉じゃないよ……という表情の要。晶ちゃんってばなんて得なんだろう。

「そこからのくらい歩くの?」

「そうですね、そこからは、翼を使って入りますから……一日で着きますよ」

「えっ?翼を使って良いの?」

「そうですね。『ウリエル』殿の支配下はもう探索済みなのです。翼を使っても差し障りはありません」

「ヤッホー!」

と、要は小躍りするかのように足をすすめる。

「お疲れ様でした。要。結」

水も珍しく、優しい言葉を掛けてくれた。

「長い道のりだったけど、何とかなるもんだな……でも、歪みは見つけられなかったぜ?」

「そうですね。こうなると、南に向かった『ケルビム』殿や『セラフィム』殿の方かも知れませんか……」

「見落としはしなかった……よね?」

結が心配そうに訊いて来る。

「ああ、確かにオレ達が歩いてきた道程には、そんなものはなかった……」

「良いのです。心配はいりません……」

少し、言葉にうやむやさが残っているけれど晶は励ますつもりでそう言った。

「あと、小一日もすれば着きます。さあ、頑張ってください」
晶はもう一声かけた。

「おい、待てよ！」

と、鎮が道に声をかける。

「この穴……変だとは思わないか？」

と、先に歩いている道は何の事だともいっつかのように、振り返ってその穴を覗き込んだ。

「……」

ここは密林。辺りは亜熱帯植物や蔓があちこち連なっている。

そして何処にでもあるようなその穴は、地下深くまで掘られている。

「なんだろうな？」

と、道がその穴に首を突っ込んだ時、辺り一面に鳥が『バサバサ』という音に『ギャーギャー』という叫び声をも上げながら辺りを飛び去った。

「そこまでだ！」

甲高い声が頭上から声が聴こえてきた。

「!?!」

見上げると、黒装束の男たちが辺りを取り巻いていた。

「これがお前達の……?」

鎮はその男達が、異変に加担している者だと見切った。

「道!どうやらこれが魔界に繋がる穴だぜ！」

ついに見つけた。と、道も理解した時でこれを報告するために、手首に取り付けてあるリーダーのスイッチを入れようとした。が、『ズバンッ』と言う音が辺りに広がった。

「そうはさせないぜ！」

黒装束の中で一番格が高いだろう男が、そうはさせまいと拳銃をぶっぱなした。

「たった二人で、オレ達に逆らったらどう言う目にあつか、今、見せてやる!!!」

崖から、辺りの岩壁を利用するように飛び跳ねて来る男達。それ

に、

「へっ！相手が悪かったって吠え面かかせてやる！！」

と、道が六枚の翼を広げ、舞い上がる。

腰にさしているビームサーベルのような剣の柄に念力を送ると、青色の炎を放ち剣となった。

「道の言う通りだぜ！ここは、オレ達を敵にした事を後悔するんだな！！」

と、同じく、四枚羽の鎮も翼を広げ、辺りの男達に銃口を向けた。『カキーン』という音や、『パーン』と言う音が辺りを包み込む。

敵に背を向けないように立ち回る二人。

小一時間する頃には、半分以上もの黒装束の者達が辺り一面に血の雨を降らせていた。

「おい、鎮！未だいけそうか？」

「そつちこそ！」

「あつたり前だろ！少し、銃の動きが遅い！！こつちの動きにあわせろ！」

と、道が忠告する。

「誰がなんだって！？そつちこそ息が乱れてるんじゃないか！！」
全くどちらにも憎まれ口を叩いている。

「ちっ！これ以上の犠牲は伴えない！ここは引け！！」

ついには、黒装束の者たちは崖上に退散して行った。

そこで落ち着いて、道はリーダーのスイッチを入れた。

「こちら、南の『朱雀』。『ミカエル』様の配下である『パワーズ』如何致しましたか？」

リーダーから応答の声が聞こえてきた。

「こちら、『セラフイム』南の地の、入り口付近に、歪みを見つけた。直ちに『ミカエル』殿に、封じてもらうように手配頂きたい！」

「了解致しました。直ちにお伝えします！！」

そう言うと、速やかに無線は切られた。

それから間もなくして、『ミカエル』を従えた船が到着した。

「『セラフィム』殿『ケルビム』殿。よくぞ見つけ下さいました！」
オレンジ色の髪を、後ろで編みこんだこの未だ幼さを見せる少女
が『ミカエル』だと知り、二人は驚きを隠せない表情で迎え入れた。
「この穴ですね？」

「この穴に入ろうとした時、黒装束の男達が襲って参りました。それにこの地下深くにまで繋がっているような穴はいかにも不自然です」

道が率直に言った。

「封じておきましょう」

そう言うと、辺りの光を取り込むかのように、手の平に集中する『ミカエル』。掌にできる、その光の玉は次第に増長し、みるみる一人が入る事ができるくらいの大きさにまでにもなった。

その光を、穴に向けて発射する。すると辺りに拡散した光の渦が消えると、その穴は、跡形もなく消え失せたのである。

「これで、一安心です。ここまでの視察御苦労さまでした。これくらいが致しますか？このまま一度、『朱雀』の地に赴いていただければ良いのですが……」

『ミカエル』のその心遣いは嬉しかったが、

「未だ任務が遂行し切れてれておりません。あなたの支配領までは、このまま旅を続けます」

その言葉に、残念そうな表情を見せる『ミカエル』。

「分かりました。この事は、中央の方に報告しておきます。これからの道程も、御気を付け下さい」

と告げると、『ミカエル』を乗せた船は去って行った。

「気付いてると思うが……歪みは、この地だけではないだろうな……」

考える所があるかのように道が言う。

「もちろんだ。あいつらの行動……ここだけだったら、ああも簡単に引いたりはしてないはず……」

「あと半日したら、『ミカエル』搬の支配地に入る。それまで気を抜くなよな！」

「ああ……」

言葉を交し合うと、再び歩をすすめる道と鎮であった。

「やあつと、着いた!!」

宿をとった要はその疲れを落とそうと、この西の地ゆかりの温泉に入っていた。

砂地ばかりなのに温泉が在るとはいかにも奇妙なのではあるが、熱砂で湧くお湯があるそうだ。

「ここんところ、砂まみれだったから気持ちが良いね」

と、結が心の底から晴れやかに喜んでいた。

隣で、「キヤーキヤー」と、騒いでる水の声が響いて来る。ここは露天風呂の様式で、覗こうと思えばいつでも覗けたりもする。

「五月蠅いな、水の奴……」

「『ミズチ』がお湯に入ったから……」

なるほど、という感じで思い思い浮かべてみた。

「出てきたらどうなってるか、楽しみだな？」

「あはは……」

呆れた笑いの結。要のちょっと意地悪な発言に苦笑いしてしまった。

「そう言えば晶ちゃんが、要のお兄さん達、歪みを見付けたらしいって言ってたよね……」

「そうらしい。中央本郎に連絡があったって……これで一件落着じゃないか？」

「……でも、地震は相変わらず続いている」

「……そういえばそうだな」

要は、湯に漫かりながら結の言葉に耳を傾ける。

「歪みは、一所だけじゃないんじゃないかな？」

「あり得る話だ……実際、西と、南しか探索していないじゃないか

？もしかしたら北や、東にあるのかもれない」

「そう、ボクも考えていた。きっと、捜してはいるんだろうけれど、分からないように？自然な形として。上手く歪みは作られてるのかもしれない」

結は考えていた。

晶ちゃんは、ああ言っていたけど……

「まあ、オレ達の任務は取りあえず終了したんだから、明日から少しは楽になるよな」

一段落を付けたぞと要はホツとしているようだった。

「う……うん」

と、気になる事が頭を過ぎる結には、要程、樂觀できないでいる。暫くすると、要の鼻歌が聞こえてきた。安心し切っているようだ。

「はあ……」

と息をつき、湯に浸かる結。

それは、未だもう一つの太陽が沈み切らない夕方のことであった。

夕日がロビーの窓から入って来る。要は、その風景を眺めていた。そしてこれから自分達が向かう西の方を見る。

フェンスの上に巻かれた有刺鉄線。それがこの場からも伺える。

「なあ、何であんなに嚴重な事してるんだ？『ウリエル』の支配領なんだろう？」

「ええ、そうよ。全ての管理がなされてるの……あの場には、『ウリエル』殿の結界が有るのよ」

「だったら、フェンスなんて必要無いじゃないか？」

「脱走する罪人がいると困るから、念のためにね……」

「脱走？」

その話を聞いていた結が口を挟んできた。何だかとんでもない所だと思った。

「『ウリエル』殿の使命の一つ。罪人となる天使にかせられた罰をも取り締まる『白虎』の地。この中に入るのは、そう言う者達が多くを占めているの……」

と、晶は話す。

「流浪の地って訳か……」

「そうね。だから、身分を証明するものが必要なの。今回の私達のように、使命でこの地に訪れるためには……」

そして用意しておいた明日必要になるパスポートを見せる晶。

「へ？こんなものが必要になるとはね」

と、自分のパスポートを取り出しそれを眺める要。

そこには『ルシフェル』という自分の名前が天使文字で刻まれ、免許証のようなものが挟まっていた。

「おいっ、この十九歳ってのは何だよ？オレこんなに歳取っていたっけ？」

「あなたが眠り着いている間の年も換算されてるのよ。気に入らない？」

「いや、気に入らないって言うか……何かしっくり来ないからさ……」

…

と、咳く。

「ボクは二十二歳だ。変なの……」

結もその歳を見ながら答える。

「ねえ、私は？」

と、水が訊いて来る。

「はい。これ」

と、パスポートを渡す晶。

「私は、十五……要より年下？」

と、ちよつと気に入らないかのような水。

「しかも、両性具有ってどう言う事よ！？」

そのパスポートに八つ当たりするかのように『ばいっ』と投げ捨てる。

「水は、『ミズチ』で、生まれた環境とかが違つし、種族的にも龍族だから、要違とは違つのよ」

と晶が言う。

「なんだ……特別なんだ！」

投げ捨てたはずのそのパスポートを取り上げ再び眺める。まったく気まぐれな奴。

「さあ、今日はこのくらいで休みましょう……少し早いけれど、今までの体力を回復するためにもそれが一番良いわ？」

晶は、明日の事も考えてそう切り出していた。

「ほーい。そうしますか？」

と、要もあくびを繰り返していたのでその意見に賛成する。

「それじゃ、失礼するわね」

要達を後にする晶と水。

未だ、西の空には太陽の光が宿っていた頃であった。

次の日、

「なあ、さつきから気になってたんだけど……あの竜巻音は何だ？」

と要は、翼を使って飛び続けながら晶に訊く。

「あの竜巻は、西の『白虎』の地と、東の『青龍』の地の力がぶつかたために起こる竜巻き。この天界は、中央の地から考えて、東西南北を決めているの。」

だから、東と、西が隣り合わせになる。ただし、北と南は上下の區別をつける為に、離れて存在しているわけ」

「『白虎』の地が土。『青龍』の地が風を支配する二人が隣り合わせになるために起こる竜巻って訳なんだ」

と、結が納得する。

「御名答！ちなみに、『玄武』の地は水を。『朱雀』の地は火を司るそのために相容れないの……だから、中央から北と南は、隣り合わせに出来なかったのよ」

「なるほどね」

「じゃあ、あの地上で起こっている、砂地獄の様な物は？」
結が指を差して問う。

「あれが、罪人を……墮天使を、魔界に送るための蟻地獄のような『門』として有名な『地獄門』に当たるの……」
と晶は答える。

「墮天使になつたら……って、どう言う者があの門を潜る訳？」
要はオツかなさ気に問う。

「第一級犯罪や永久犯罪を犯した、天使ね」
「第一級犯罪？」

「神にあだなしたとされる天使。法的には七つの大罪がそれだとされているわ」

「七つの大罪……なんだそりゃ？」
要は問う。

「莫迦ね〜！？それくらい知っていなさいよね！」

「じゃーお前は知ってるのかよ！」

「し……知ってるわよ。えっと、怠惰、強欲、肉欲……えっと……
はいはい、分かりました。結局解からないんじゃないじゃん!!」

「あはは……まあ、七つの欲求の意味よ」
その二人のやり取りを見ながら、

「二人とも、もっと勉強を積みなさいね」
そして七つ全てを晶は唱える。

「傲慢、憤怒、嫉妬、怠惰、淫欲、貪欲、暴食ですよ」
「そっか、七つの大罪とはそう言う物なのか……」

と、やっと意味が解かった二人と、一匹。
「そんな事で墮天使にされたら、こちらだって困るよな……」

「有るでしょう？人間生きてりゃ、嫉妬くらいするもんね。怠惰にもなるし……」

「そんな事を言う要は、確かにそれに近い。」

「……少し、考えを改める事ね……」

と、呆れながら晶は要に対して答える。

「はい……」

その言葉にしゅんと落ち込む要。

「あれ？今、人影を見ただけど……」

と、目をこらして結が問う。辺り一面砂嵐の中に人影を……

「ああ、あれは、下級のな種族の霊よ」

「霊？」

「そう。魔界に送られた天使の亡霊だったりする例もあるそうよ」

「何だか……哀れだね」

少し気がめいる。

「一種の危険地帯。歩く事なんて出来ないでしょ？」

「おっしゃる通りですよ。その上、竜巻をも上手く横切らなきゃならないなんて本当に、厄介だ……」

この地に入ってから、危険が一杯で、気を引き締めてないと、今にもそれにぶち当たりそうである。翼も上手く操るのに時間が掛っていたものの、これじゃ……と、要と結は根をあげそうだった。

「もうすぐですよ。頑張つて！」

そう励ます晶には、小一時間そこから辿り着く『ウリエル』の住む居城が目に入っていた。

そこはオアシスのような、澄んだ景色を従えた、高い塔であった。「よく御無事でいらっしやいました、お待ち致しておりましたよ」

と、塔の最上階にいた『ウリエル』はわざわざこの三人と、一匹を出迎えるために最下層まで下りてきていた。

「お迎え痛み入ります」

礼をしながら晶は進み出た。

「これは、結くん久しぶりですね」

と、結の姿を見かけて声を掛ける『ウリエル』

「せっかく、地球での暮らしに慣れてきたと言つのに、お呼び立てしてしまい申し訳ありません」

非礼を詫びていた。

「いえ。あの地から救い出してくれた上に、晶ちゃんの体までもらっておきながら礼などされてしまったては申し訳が立ちません」

と、結は言葉を返す。

「結、あれは、既に決まっていた事なの……だから気に止む事は無いのよ」

もう終わった事だと晶が答えた。

「ところで、一つの歪みが見つかったと聞きました。が、あとはやはり……」

と、話を戻す『ウリエル』。最上階までガラス張りのエレベーターを使って上りながら話は進められた。

「ええ。やはり、事は急を要するようです。決心はして預けましたでしょうか？」

晶は『ウリエル』に二人だけの話を持ちかけていた。要達には判らない話だった。

「仕方がありません……覚悟は出来ております……ただ、本当に宜しいんでしょうか？」

「はい。構いません。お気を遣って頂いて申し訳がないのはむしろこちらです」

晶は覚悟したかのように顔をあげた。

その横顔には、揺るぎ無いものが宿っていた。

「最善の処置はこちらが致します。あと、『ミカエル』殿の元に『ケルビム』殿、『セラフイム』殿が到着され、今こちらに船で向かっております。小二時間もすれば到着なさる事でしょう……やはり彼等も？」

「ええ、そうです」

この二人の会話が何を意味するか分からない、二人と一匹は、ただ静かにこの話に耳を傾けていた。

「それまで、私の部屋で休息なさって下さい……」

「何から何まで本当にありがとうございます『ウリエル』殿」
直に最上階に着く。

『ピーツ』という音がして扉が開いた。そこには長い通路が目の前に続いていた。

その通路を真直ぐに歩いて行く。すると、『ウリエル』の部屋に到着した。

『ウリエル』の部屋は、丸いドームのようになっていて見渡す限りガラス張りになっている。

「ここでお待ち下さい。私は、二人の到着を待ちに、下の階に行っております」

そう言つと、再び下層へと足を運ぶ『ウリエル』。

暫くの間、誰一人として声を出す者はいなかったが、『ゴーツ』という地響きを立ててやってきた船が到着した時、要が声を掛けてきた。

「さつき、晶ちゃん何の話をしていたの？」

その言葉に深刻そうな表情で、

「……その内分かるわ……」

とだけ答え、再び沈黙は訪れる。

一人、結は静かに、晶の横顔を見ていた。

「『セラフイム』殿、『ケルビム』殿、お待ちしておりました。歪みの発見誠に大儀でございましたね」

と、晶は話しかける。

「いえ、発見できて良かったですよ。本当に……西の方では見かけられなかったらしいですね」

残念な事にと道は言う。

「ええ。見落としはなかったと思うのですが……何しろ、歪みはそう容易く見つけられる物ではないようですから……」

晶は残念そうに答える。

「ところで、本当に実行されるそうですね？」

「ええ。覚悟していただけない、もう迷いは失せました」
晶はすっかり面を上げていた。

「では身体も休まったことですし、『ウリエル』殿……」

と、振り返り、晶は後を続ける。

「分かりました」

と、『ウリエル』はガラス張りのその部屋の中央に有る台の上のボタンを押す。すると、外に向かって一本の光が放たれた。

「晶ちゃん？」

「ごめんなさい。三人にはお世話になったわね」

その言葉に、何を言っているのか分からない表情で、

「どういうこと？」

結は問う。

「私は、これから魔界に行くの……魔界からこの地にある歪みを捜して報告する役目を担った訳なの……」

「そんなの聞いてないよ!!」

と、水が一步前に進み出る。何故私達に話してくれなかったのか？

「自ら墮天使の絡印を押される訳？」

「そうよ。それが私に架せられた使命」

要達は言葉を失った。

道中、魔界について訊いた事を思い出した。まさか、晶がその事を承知で、

魔界の話をしてくれていたなんて思いもしなかったのである。

「一週間ですよ。私の力が及ぶのは。それまでに、全ての歪みの在り処を調べて下さい……そうでなければ、もうこの天界に戻る事は出きませんから……」

「ええ」

と、晶が答えると、

「その役、オレも引き受ける!」

こんなのであったまるものかと要が『ウリエル』に詰め掛けた。

「何を言っているんです!」

「私も！」

「ボクも！」

そして、結、水もその事に賛成するかのように腰を上げた。

「あなた違！？」

「だって、一週間だろう？ だったら、一人でも多くの者が入って、調べた方が良いじゃん？ その方が早く済むってmondだよ？ 違っ？」

と、鼻頭を指で擦りながら要は答える。

「そうよね…… 晶先輩だけがそんな任務を受けるなんて、おかしいわ！」

「仲間でしょボク達！？」

次々と、言葉を浴びせる二人と一匹。

「やれやれ、ここで、オレ達も腰を上げなきゃ男じゃないよな？」

と、道が言う。

「子供ばっかりの旅より。オレ達がいた方が、役に立つってものだ……」

と、鎮も賛同する。

「『セラフイム』殿、『ケルビム』殿……」

「それでは、皆さん…… 魔界に行かれると言われるのですか！？」

とは『ウリエル』。少し気が楽になっているのか、言葉が弾んでいる気もする。

「当ったり前でしょうか？」

と、要が言い放つ。同意するがごとく頷く四人と一匹。

「良いのですか？ もし見つけられなければ、一生魔界の住人。墮天使として生きて行かなければなりませんよ…… もちろん、地球に戻る事も出来ないのです」

「そんなこと、やってみなきゃ分からないよ。それに…… 魔界に行ってみたいし」

と、安直な考えに捕らわれ、答える要。

その様子に呆れてはいるものの、心遣いを分かっている晶は、
「わかったわ…… 『ウリエル』殿、この者達の探査レーダーを下さ

い。お願いします」

「分かりました。こちらです」

と、人数分をホログラムから培養する。それは、カフスのような形をしていた。

「耳にあてがって下さい。特殊な探知機です。このボタンを押すと、この地に有るレーダー機が探知し、歪みを探し当てます」

言いながらボタンを押す。すると、天界を模した球体のレーダー探知装置が光り始めた。

「なるほど、ちょうど裏側にあるその場所が見つけれられる仕掛けか……」

鎮が感心して声を出す。

「あちらの地に行くと、この手形が必要になります。それも今、御用意致しますのでお待ち下さい」

それは、墮天使としての烙印を意味する手形であった。

ウリエルは、一人一人の手形を採って、各々に渡す。

「これが手形……？」

と、『まじまじ』と見る要。

「これは独自の調査でもあります。決して他に漏れないようにお願い致しますよ『ウリエル』殿！」

「もちろん承知しておりますよ」

「と、言う事は……他の四大天使にも秘密な訳？」

と、水が言う。

「もちろんです。調査とは行っても、墮天するのですから……水？あなたのお姉様や、お兄様には秘密になります……それに正式な、あなたの使命は『ガブリエル』殿の地『玄武』を守護する事。それでも良いのですか？今なら間に合いますよ？」

と、晶は念を押す。

「私の使命は、晶先輩を守る事」

以上ですと、目蓋を閉じ、水は決心をするかのように呟いた。

それを『是』として引き受ける晶。
「分かったわ……それでは、魔界での私違の名前を一度復唱しておきます」

「私、(晶) 『トロンズ』はアスタルテ」

「オレ、(要) 『ルシフェル』はルシファー」

「ボク、(結) 『トロンズ』は、アスタロト」

「私、(水) 『ミズチ』は、トウナ」

「オレ、(道) 『セラフイム』は、リヴィアタン」

「オレ、(鎮) 『ケルビム』はアスモデウス」

以上の復唱を終える。一変した名前。覚えるのに苦労する。

「それじゃあ、気を付けて……必ず戻って来る事をお祈り致します
……」

ウリエルはそう残すと、光の道に五人と一匹を導いた。その先には蟻地獄の砂漠が眼前に広がっていた。そして、砂漠をこえる時に見た精霊の姿も。

「私が行けるのはここまでです」

と言い残し、『ウリエル』は退く。

「後の事は頼みました……」

アスタルテは答える。

「……承知致しました」

『ウリエル』の姿は遠ざかる。

蟻地獄の中は、熱く身体が溶けそうであった。

「く……苦しい……」

ルシファーが呻く。

「う、五月蠅い！我慢しろ！」

アスモデウスが叫ぶ。

「意識が……」

遠くなってゆく意識にアスタロトが眩く。

そして、轟音が鳴り響く中、彼等の姿は、砂漠の中に消え失せて行ったのである。

それと同時に、光の壁は消え去った。この先に何が起こるのか分からない事を暗示するかのように……

#6 FALL LAW (前書き)

名前が日々変わってるので、ここで整理しておきます。多分読んだら混乱を起こすと思いますので。

天使とか悪魔を知ってる方は判断しやすいのでは？
とも思いますが。念のためです。

「晶」『トロンズ』はアスタルテ」

「要」『ルシフェル』はルシファー」

「結」『トロンズ』は、アスタロト」

「水」『ミズチ』は、トウナ」

「道」『セラフィム』は、リヴィアタン」

「鎮」『ケルビム』はアスモデウス」

です。登場人物多いのですが、最期までお付き合い頂けると本望です。

それでは、本編をどうぞ。

#6 FALL LAW

FALL LAW

落ちて行った先。その先で、まるで飛び跳ねるかのように身体が浮いた。

各人互いを見回す。

それぞれ、天界にいた時とは違った容貌をしている。髪の色は黒く。翼まで真っ黒く染まっていた。

これが、墮天使かと思わずにはいられなかった。

しかし無事、この地に降り立つ事が出来た事を確認し、安堵の溜息を着いていた時、

「ようこそお越し下さいました」

水先案内人がそう答えた。

「私の名前は、『レテ』です。以後御見知りおき下さい」

「まるで三途の川の様だな」

とは、ルシファアの言葉。

「実際、そうなんじゃないか？」

とは、アスモデウスの言葉。

眼前に広がる川。その水面がゆらゆらと光り揺れている。空は、天界とは異なつて、散りばめられた星で光り輝いていた。

「あなた方は、第一級犯罪を犯されました故、この川を歩いて渡つて頂き、『サタン』様のいらっしゃるお城まで行ってもらいます」

「『サタン』？」

「この魔界の支配者です」

と、質問内容も前に『レテ』は答えた。

「そこで、これからの使命を全うしてもらつ事になります」

「この地での使命とは？」

と、アスタルテが問う。

「それは、『サタン』様がお決めになる事。今の私には想像も尽きません」

とだけ答えて、『レテ』は背後に在る酒屋のような小屋の中に入って行った。

「どうする？行ってみるか？」

と、リヴィアタンが皆に声をかける。

「行かないやこの先、路頭に迷いそうだ」

とは、ルシファアの言葉。

それもそうだと川を渡り始めたのである。

川の流れは急で、上手く足が運べなかった。一人トウナだけが、その水を上手く泳ぎこなしている。

「お前は良いよな……」

と、ルシファアが言う。

「特権つてやつ？」

トウナは、そう言いながらも、みんなの歩幅に合わせている。

「ほら！あそこにお城が見えるわ」

と、アスタルテが指をさした。

そこには、中世に見られる城のような馬鹿でかい建造物が暗闇に聳え立っていた。

「ほんとだ。あそこに『サタン』って奴がいるのか？」

少し、霧が出てきたのでハッキリとは見えないが、確かに、その城はあった。

「さつさと行こうぜ！時間が勿体無い！」

と、重い水を掻き分けるようにしながらアスモデウスは答えた。

「オレ達の使命がこの世界でなんであろうと……天界での使命を優先しなきゃな！」

リヴィアタンは伝える。

頷く五人と一匹。その決心は堅かった。

「開門！」

辿り着いた先で、突如響き渡る声。

門の上に控える門番が、ルシファー達を見つけ出して声を上げながら叫んでいる。

暫くすると、その門は開かれた。

ぞろぞろと中の番人が出てきて、四方を取り巻き始める。

「よくお越し下さいました。これより、『サタン』様の元にお導き致します。こちらへ」

導かれるまま、足を運んだ。暗い通路に灯っている蠟燭の火が揺らめき、ただ歩く靴の音だけが辺りに響いている。

「『サタン』様！お連れ致しました！」

「入るがよい！」

扉の臭より、地の底から聴こえてきそうな太い声が聞こえる。

『ギーッ』と闘かれる重たそうな扉。その奥には白い布が天井より吊り下がっていた。

「よくいらつしやった。『アスタルテ』『アスモデウス』『ルシファー』『アスタロト』『トウナ』『リヴィアタン』よ！」

その布に光が灯り、スクリーンに映し出された『サタン』の姿は、年老いた感じで骨張った骨格をした、顔中髭で覆われた老人であった。まるで、この魔界を支配しているとは思えない程老衰している。

「驚いた事であろうのう？」

サタンはゆったり構えて問う。

「ええ」

と、アスタルテはそれを流すように答える。

「もうこの地を治めてから、数千年が経つ。その間、我は一度も転生してはおらん」

その事を誇りに思いながら答えているようである。

「そろそろ、世代交代の時期だとは思っているのだが……未だそのような人格者に遭っていない」

「……」

沈黙する五人と一匹。考えている事は一緒だろう。こんな世界に

君臨したくは無い。

「さて、本題に入ろうか？そなた達には七つの地を治めている領地に赴いてもらおう。おお……今では六つか……そして、今その場で起こしている使徒の手伝いをしてもらおうか？」

「六つの地？」

「そうだ。今、この魔界は、天界に対し戦いを挑もうとしている……それも生き延びるために」

「それは？」

「創造神は何を考えているのか……この宇宙は拡大し、増長し始めた……もう、この魔界はその片鱗にある……」

「それは、この魔界が圧迫し始めていると言っ事なのですか？」

と、その真髓を聴きたくアスタルテは問う。

「そうだ。何時も創造神に連絡をしているのに答えが返ってこない……何が行われているかさえも解からない。お前達は何が知らぬか？」

『サタン』は逆に問いかけてきた。

「いえ？残念な事に知りません。ですが、こここのところ、大きな地震が起こっています」

と、天界での事をアスタルテは伝える。

「そうか。予兆が天界にも及んでいるのだな……」

「それで、オレ達の行き場所を教えてくださいませんか？『サタン』様？時間の節約を考えて、リヴィアタンが、問いかける。

「そうであつたな……それではこの部屋を出て、番犬『ケルベロス』の後に着いて行けばよい……」

さすればその地に繋がる道を案内してくれるであろう」

「わかった。そうする」

簡潔に手っ取り早く、ルシファーは答えた。

「くれぐれも宜しく頼むぞ」

『サタン』は彼等を見送るようにして、その映像は途絶えた。

「取りあえず行ってみるか？」

「六つの地……に減っているらしい……これは何を意味するのか…
…」
アスモデウスは呟く。

「予想するに、歪みの数だ……行くしかない。今回に限っては、一人で行動する事になるな……」

人数を数えて、リヴィアタンは答える。

扉を開けた。すると、三つの頭を持った番犬がそこに控えていた。
「こちらに着いて来て下さい」

と、その番犬は話をした。その後を歩く。

暫く歩くと、七つの扉が有る部屋に通された。

「『アスタルテ』殿は、こちらの扉より入って下さい」

その扉の前に歩いて行って指図する。

その扉には『憤怒』と刻まれた文字があった。

その扉を開く。その先には業火の道が続いていた。

「それじゃあ、お先に」

とだけ告げて、アスタルテは中に入って行った。

「『ルシファア』殿は、こちらの扉より入って下さい」

と、その扉の前に歩いて行って指図する。

その扉には『傲慢』と刻まれた文字があった。その扉を開く。そ

の先には石畳の道が続いていた。

「じゃっ！お先！」

と軽く手を振り、ルシファアは中に入って行った。

「『アスタロト』殿は、こちらの扉より入って下さい」

その扉には『怠惰』と刻まれた文字があった。その扉を開くその

先には、泥沼の様な道が続いていた。

「それじゃあ、失礼します」

とだけ告げて、アスタロトは中に入って行った。

「『トウナ』殿は、こちらの扉より入って下さい」

その扉の前に歩いて行って指図する。

その扉には『貪欲』と刻まれた文字があった。

その扉を開くその先には、氷の道が続いていた。

「一人か……まっいいか？」

とだけ呟いて、トウナは中に入って行った。

「『リヴィアタン』殿は、こちらの扉より入って下さい」

と、その扉の前に歩いて行って指図する。

その扉には『嫉妬』と刻まれた文字があった。

その扉を開くその先には、雷鳴轟く道が続いていた。

「一人か、やつと清々する……」

とだけ告げて、リヴィアタンは中に入って行った。

「最後に『アスモデウス』殿は、こちらの扉より入って下さい」

と、その扉の前に歩いて行って指図する。

「こっちの扉は？」

と疑問に思い問う、アスモデウス。

その扉には『暴食』と書かれていた。

「その扉……その地はもう閉鎖されたので、こちらの扉をお願い致します」

その扉には『淫欲』と刻まれた文字があった。

その扉を開くその先には、内臓のようなぬめった道が続いていた。

「最後か……」

と独り呟いて、アスモデウスは中に入って行った。こうして、各々が導かれるようにその扉を開け各地に散って行ったのである。

#7 RAGE

RAGE

業火の道を歩いて行くアスタルテ。

そのためか、かなりの暑さで身体がとろけそうである。

一つ足を踏み外せば、火の中に身を投じる程この道は狭かった。

「この先に行けば、歪みがある場所が分かる……しかし……」
アスタルテは考えていた。

本当に……歪みを全て閉じてしまってもいいのであろうか……

あの『サタン』の言葉がやけに脳裏に渦巻く。

『創造神』の行動……魔界の秩序の乱れ……余りにも矛盾している……

歩き続けながら、アスタルテは考えに浸っていた。

『創造神』は、魔界を？いいえ、天界を滅ぼすつもりなのか……
それともこうして、私達の行動を見守られているのか？

どんなに考えても納得の行く答えは見つからない。取り敢えず前に進む事を考え始めた。

程なく進むと、扉が見えて来た。

『ギーツ』とその扉を開く。

すると、火山地帯に小さな街が広がっていた。

「お越しをお待ちしておりました」

と、一人の者が立ちふさがっていた。

ARK

背中には爬虫類のような羽を広げている。

「あなたは？」

とアスタルテは尋ねる。

「私はこの街の支配者。『バルベロ』様の使徒でございます」

その者は答える。

「これより『バルベロ』様の所に御案内致します」

告げると、羽を広げて宙に舞い上がった。

その後を追い掛けるようにアスタルテも自らの黒い羽根を翻し宙に舞った。

暫く飛んでいるとその『バルベロ』という者の館らしい所に入って行った。

「よく参られた。『アスタルテ』殿」

通された部屋で、『バルベロ』はアスタルテを歓迎した。一見も
の静かそうな男で、ゆったりと椅子に腰を掛けている。

「どうです？魔界の居心地は？」

という問いかけに、

「まだ慣れません。この地帯は火山帯なのですね……こんな危なっかしい場所によく生活出来るものだと感じしております」

素直な感想を言うアスタルテ。

「率直な方ですね。気に入りました。それにお美しい……でも、明日からはそんな事を悠長に思ってもらっては困ります」

席を立ち、窓辺に立つ『バルベロ』。

「この火山帯の一角に天界への道を通しております。そこから攻め入る算段を今立てている次第……あなたも『サタン』様の御為、魔界の為、参戦してもらわなければなりませんからね」

振り返り、アスタルテの顔を見る『バルベロ』。

歪みの事だ……

と悟ったアスタルテは、すぐに答えた。

「私の力が、魔界の為になるのでしたら喜んで、お貸し致します」
敬意を称し胸に手をやり答える。

「うむ。期待しておるぞ！」

それだけ言つと『バルベロ』は下がつて行つた。

「『アスタルテ』殿、あなたの生活の場を御案内致しましょう。こちらへ……」

この館に招いた時の男が、家を案内した。そこは、納屋とでも言うべき小屋であつた。その一角をアスタルテに譲る形なのである。

「同僚に、『シエミハザ』という悪魔がいますが、事無きようにお願ひ致します」

それでは。と告げると、その男は去つて行つた。今はいない『シエミハザ』という悪魔。一体どんな者であろうかと少し考えてみる。

しかし見当も付かない者の事を考えても詮方なき事。今はその者が帰つて来るのを待つしか無かつた。

きつと、歪みの場所に行っているのね

とだけ悟るアスタルテであつた。

8 ARROGANCE

ARROGANCE

「一体何処まで続くんだ!? この道は……」
と、ぶつくさ文句を垂れながら歩くルシファー。
「いい加減、先が見えて来ても良いだろうがぁ……」
果てしなく続く石畳。もうこの景色に飽きたとでもいう風に肩の力を落としている。

この道を行けば、歪みの有る場所に辿り着く……そうすれば、オレの役目も果たせるって寸法だ……

と、心に誓って歩く事だけが、今のルシファーを動かす原動力である。

「あゝ、早く着きやがれ〜!!」

荒れ狂いたくなって地団太を踏む。

そんな時、霞んだ視界の先に扉を見付けた。

「やった〜!!」

勢い欲走り出す。

『スタツタツ……』と、今さっきまでとは違い、足取りも軽い。

近づく扉。それを押し開けて中に入ると、一人の少女が待ち受けていた。

「『ルシファー』様ですね。感激です! 『サタン』様の先名と同じ方にお会い出来るなんて!!」

と言いながら気軽に握手を求めて来る。それに戸惑いながら手を差し伸べる。

「これから、主人、『ベリアル』様に御会いになって頂きます。こちらに来て下さい」

と、石像が入り乱れているこの地を、歩いて案内する。

「あたいの名前は、『タミエル』。以後お見知りおき下さいね。これからの行動のペアとして何かと迷惑かけるかも知れませんが宜しくお願い致しますう」

と、人懐っこい表情で話し掛ける『タミエル』。

「この奥の郁屋が、『ベリアル』様の部屋です。でもあたい、嫌われてるから……」

というと、少し身を引くようにして、案内する。

「ここからはオレ一人で行くよ……ちよつと待つてな！」

気持ちを察してルシファーは、通路の突き当たりへと足を運んだ。ルシファーと言います。中に入らせて頂きます！」

と言うと同時に、扉を開いた。

「ほう、そなたが『ルシファー』か!？」

大きな重りのような玉座に『どしっ』と構えた大男が、左拳で顎を支えながら話し掛けてきた。

いけ好かねえ奴……

と、心で思いながら、

「本日よりこの地に入る事になりましたルシファーと申します。以後お見知りおき下さい」

と、ルシファーにしては丁寧に挨拶をする。

「『サタン』様と同じ名前とは……何とも不思議な巡り合わせでしょうかね。これからは私の支配下に加わるのです。

なるべく私の勅に触ることのないようお願い致しますよ。『ルシファー』?では、下がりなさい……」

とだけ言うと、片手で『ひらひら』とさせながら、この部屋を出て行けと命令する。

「けっ。テメエの顔なんざ、二度と拝みたく無いや!! 思いつつ扉

を後にした。

「行って来たぜ、なんともいけ好かない奴だよな〜!？」

と、『タミエル』に愚痴る。

「でも、そう会う事ないから、これで一安心だよ？」

と、『タミエル』は返す。

「それじゃ、これから寮に案内するね〜」

気持ちが落ち着いたので、少し表情が明るくなり建物に案内してくれた。

「こつちが、男子寮、こつちが女子寮」

二つの少し古ぼけた建物二つを指差して説明する。

「朝の八時には、号令があつて、起床するようになってるの。それから仕事が始まるから、

それまでに体力を回復しておくようにしないと、次の日にはぶっ倒れちゃうよ?」

との忠告をしてくれる。

「ありがとな」

「へへ〜それじゃ今日はこれで……」

足取り軽く去って行く『タミエル』。

明日からか……この分だと一週間も必要無かつたな

と、少し安心したかのようなルシファアは、男子寮へと足を運んでいった。

#9 LAZINESS

LAZINESS

『怠惰』と刻まれた扉の向こうに続く道は泥沼であった。

一歩中に踏み込むと足が埋もれてしまう。

『ドボン、ドボン』と言う音を伴い一歩一歩足を進める。
しかしなかなか先に進まない。

このままだと、どれだけの時間を費やす事になるか分かったものではない

そう判断したアスタロトはついに翼を使う決心をした。

『バサリッ』という音がこの回廊に響く。そして開かれた黒き翼はアスタロトを宙に浮かせた。

怠惰か……お似合いだよ……

こんな事を思い、アスタロトは先を急いだ。そのためか、次の扉にさし掛かるのに時間は掛らなかった。

そして扉の前で降り立つ。

これを開けば、一歩歪みの場所を知る手がかりになる事を自覚し、アスタロトは静かに扉を開いた。

その先には、果てしなく広がる泥土の地が広がっていた。

そして、下り来る一人の悪魔。

「いらつしやいませ。『アスタロト』殿」

と、その悪魔は答えた。

「出迎えですか？」

「ええ、この地を支配なさってる領主はんが、丁重にお迎えせえ言

わはるんで、わてがきたんです。あつ遅ればせながら言いますけど、わての名は、『ラムエル』言いますねん。以後お見知りおき下さいな」

「領主様は何処に？」

「宙を舞いながら、アスタロトは訊く。」

「これからお連れしますから、よう、着いて来て下さい。ちよつと距離有りますねん。そやから疲れてはるとは思いますが、頑張って下さいな」

と言うと、『ラムエル』は、アスタロトを先導するかのよう飛び立った。アスタロトはその後に続いた。

「この世界は、泥土の世界なんですね？」

アスタロトは下を見ながら尋ねる。

「ええ、そうです。身動きもとれんからみんな、羽根使ってますわ」「どうやって住んでるの？」

「ほらあれ、あのように泥を乾燥させた土を固めて家を作っているんどす」

確かにところどころに転々とした、家らしい物が見られる。

「簡素ですね」

「この世界は、人口密度が他の世界に比べて少ないんですよ。疲れる世界ですからねえ……それでも、ここの領主はんは、ええ人で……わてらから税を取り立てる事をしませんよって、その点は楽ですわ」

「それって、税を取り立てるのが、面倒だからって言うんじゃないの……？」

頭を掻きながら『ラムエル』は答える。

「そうかも知れへんなあ」

ゆっくりとした喋り方が、やけに耳に残る。

「あつ、あそこですよ」

そう指を差した先は、ほんの少しだけ大きな土を厚く重ねられた

家であった。

「ほな、また後で会いましょ」

地面に足を付けた時、そう言い残す『ラムエル』は、その場に座り込んだ。

「あのう……この中に入ればいいの？」

その言葉にウザそうに見上げる『ラムエル』。

「そつどす。声掛けて入れば宜しいんですよ」

とだけ言つと、再び顎を膝の上にへたらせている。

その様子を見届けて、仕方ないなという表情でアスタロトは一声掛けその家の中に入って行つた。

「お邪魔します」

部屋に入ったアスタロトは、何と表規していいのかに迷つた。簡素で、何も置かれていない部屋。

「ああ、君が『アスタロト』殿ですか……私の名前も『アスタロト』と申します。どうですこの世界は……ゆったりとしていて良いでしょう。お気に召しましたか？」

と、言われ、

「ええ……まあそうですね……」

あやふやに答えるしか出来ないアスタロト。

「ねえどうです？私の地位を差し上げますから……『サタン』様の命令を実行していただけませんかね？もう、面倒でやってられない気分なんです……」

「えっ？」

「いえね、『サタン』様に逆らう訳ではないのですが……私にこの任は重い枷なのです」

「はあ……で、どうすれば良いのでしょうか？」

「指揮をとつて頂ければ良いのですよ。この東の地にある鉾山にその地が宥ります。明日にでも、『ラムエル』を迎えにやりますから、どうか御願ひ致します。では、眠りたいのでこれにて失礼……」

そう言つと、奥に下がって行つた。

しかし暫くすると、

「ああ、そうでした……あなたの寢床ですが、この部屋をお貸します。御自由にお使い下さい。では失礼します」

そしてまた、奥の部置に下がって行つた。

なんて悪魔なんだ……

と心から思つた。というより、この『怠惰』さに気が抜けたとでも言つるか……

それでもチャンスは出来た……この領主に感謝すべきかもしれない……

と、近くに有る椅子に座り込む。

暫くしてお腹が空いた事に気が付いた。

何処に有るかも分からない食事を求めて彷徨う。そして探し当てた台所。そこは埃でまみれていた。

料理さえしないのか？この悪魔達は……

そう窺える程、この台所は簡素化されていた。そして、少しだけ有る食材を、妙めてやつと食事にありつけたアスタロトであつた。

#10 GREED

GREED

『貪欲』と刻まれたその扉を開く。

すると、何処までも続く氷の道が続いていた。

『キーツ』と閉まる扉。周りが暗くなる。

しかし暫くすると、その氷から光が生まれたらしく、ぼんやりと明るくなった。

トウナは、もともと『ミズチ』であるがゆえに、この氷の道はそう大して苦には成らなかった。

途中、階段が続く道。そこをまるで滑るかのように駆け下りる。

床になった所は、スケートでもするかのように足を滑らせる。すると、螢のような光が辺りにちりばめられた。

なんて綺麗……

と、トウナは思った。魔界だと言う気がしなかったからだ。

ふと、旅の途中で話をしていて、七つの大罪の事を思い出していた。

大罪に見立てた歪みか……何とも粹な趣向じゃないの……

と、憶えているその言葉に今一度、アスタルテの事を思い浮かべていた。

ARK

先輩も今頃、私と同じように扉の向こうの世界を目指してるんだろっな……

とは、冒先輩を助けるために挑んだこの魔界行きの決断だったためである。

これからは、自分自身の考えで行動しなきゃいけないんだ！

そう思うと、ふと心寂しくなった。

ダメダメ！強くなんなきゃ！そして、成功させなきゃ……二度と先輩に会えなくなっちゃう

新たに、心構えをするトウナ。

程なく、この通路の終わりが見えて来た。

そして、ぶち当たったその扉を開く。

地底の街であるらしく、氷で覆われた、空のない空間がその先にはあった。

『キヨロキヨロ』と、辺りを見渡す。

行き交う人々は、自分と同じ爬虫類の羽根を持った者が忙しそうに歩き回っていた。

その中を、今来たばかりのトウナは目配りをしながら、一部に寄ってたかっている人の集団を見付け、そこに向かって歩き始めた。

「号外！号外……！」

紙切れを振り撒く魔界人が、三人掛かりでそれを行っていた。

「なんと、あの、『暴食』の地が天界人によって閉ざされたんだとよ……！！」

「これから、この魔界もどうなってしまうんだろうっねえ……」

「『サタン様』！万歳……！」

その周りにいる者達はいろいろな事を言っている。

「ちよつと、失礼……」

と、その集団の中に割って入るトウナ。

そして、一枚のそのばら撒かれている紙を手にとった。

そこには、『暴食』の地の事が列ねられた言葉が書かれてあった。『暴食』の地、敗退する。支配領主『ベルゼブブ』その任を解かれ、只今死刑までの日数を数える……」

見出しはこうであった。

「……」

その集団を抜け出し、トウナはその紙切れに一通りの目を通していた。そんな折り、

「あれ？彼女！新参者だね？それだったらここの領主様に一度顔見せしておかなきゃダメだぜ！」

と、声を掛けて来る一人の魔界人に出会った。

「領主様？」

「そう、この『貪欲』の地では、何より先にそれを初めにしなくちゃいけない事なんだ……もっとも出世をしたければね？」

そう言うと、その魔界人は立ち去ろうとしていた。

「ちよつと待つて！その領主様つて何処に住んでるの？」

トウナが問う。

「ああ、この通りを抜けて、左に曲がった所に住んでいらっしやる……なんなら、付き合つてやつても良いぞ？」

「いいえ、結構。自分で行くわ！」

「なんでえ。気が有るのかと思つたぜ！一つ忠告しておくけどな、この地では自分の事第一に考えて生きてる者が大半だ！他人に何かを要求するには、それだけの報酬を考え動くんだ。お前が何かをオレに託さない限り、答えをやったオレの気が済まないつて寸法だ！」

その言葉を聞いて、トウナは面喰らった。

そして、怒りが込み上げて来たのである。

「そう？……でも私はあなたの力が欲しいつて思つた訳じゃないの。悪いけど、今あなたにあげられる物なんてないわ！有るならこれだけね……」

と、にっこり微笑むと、手に持っていた紙切れを渡す。そしてト

ウナは歩き始めた。

「……」

その言葉を聞いた魔界人は、その様子を見届けて一言、

「莫迦ヤロー！！」

と叫んだ。

その声を聞かない振りして、『スタスタ』と歩くトウナ。

何てとこななの、ここは！

悪意の言葉が心の中を駆け抜けて行った。

あの魔界人が言っていた、領主の館が近くに来ると、どう言っているのかと悩んだ。

果たして、取りあえずの顔見せでここを訪れて来る者なんているのだろうか？

それほどに大きい屋敷であった。仕方なく、呼び鈴を鳴らしてみると、すると、執事らしき男が顔を覗かせた。

「あの、ここに来て初めての者なのですが、領主様にお目通り致したく参上致しました」

その言葉に、につこりと笑って対応する執事。

「顔見せの方ですね、どうぞお入り下さい。奥の間に御案内致します」

そう言うと、執事の後を着いて歩くトウナ。

きらびやかな装飾品、それに多くのメイド達。まるで、王様でも住んでいるかのようである。

奥の間に着き、

「顔見せのお客さまが参りました」

と、執事がその扉の前で声をかける。

「よろしい。入りなさい」

中の住人が答えるのを聴いて『ガチャリ』と、その扉が開かれた。中には、数名の美女をはべらせた大柄の男がごつい椅子に腰掛けしている。

「そちの名前は何と申す？」

思った通りの野太い声が返って来た。

「初めまして、トウナと申します。お見知り置き下さい」

「ここは、静かに礼を尽くそうと思った。

「トウナ。大儀であった我の名は『マモン』……で、そち。特技など有るか？……この地では、少しでも特技が有れば、出世の道が開かれる。何でも良い。申してみよ！」

「はい、私は御覧のとおり天使では有りませんでした。しかし、もともと水を操る特技を持っております。もちろん、氷をも操る事が出来ます。以上です」

とだけ述べる。

「ほう……氷を操る事ができるとそう申すのか？」

「はい」

「では、明日からそちに、魔天道建設の任を与えてやろう」

「魔天道？」

トウナは何の事か分からないとでもいう風に訊き返す。

「『サタン』様直々に頼まれた、天界への道を建設し、守ることを任務とする仕事じゃ」

「わかりました。私にそのような大任を与えて下さり誠に有り難うございます」

深々と一礼をする。

「北の地にて行っておる。案内する者を与えてやるから、頑張つて仕事に励みなさい」

「期待に添えるように、頑張らせて頂きます」

そういつと、この部屋を後にした。通り抜ける通路。そのきらびやかな通路を、一瞥しながらトウナは思っていた。

なんて事？こんなに早くに歪みに行けるなんてラッキー！としか
言い様がないわ！！

しかしその心の裏で、

でもこの地を潰す事で、この領主は死刑になる…

心のどこかで引っ掛かる物が有るトウナであった。

11 JEALOUS

JEALOUS

『嫉妬』と刻まれたその扉を開いた。その中は、雷鳴が鳴り響く暗闇であった。

道自体は、石畳で作られているらしく、歩く度に『カッーン、カッーン』と辺りを反響させている。

扉が閉ざされた時、稲光りと共に光が走った。

「うわっ」と、退くリヴィアタン。

その時、思い起こししていた。

男として生まれて来たと言うのに、何故だか小さい頃から雷と言う物が苦手であったな……

条件反射的に、その音その光で身を引いてしまう。
でもそんな事を気にしている暇などなかった。

ここで、根を上げたら天界に戻れない

すぐさま足を進める。

そのためには、全てを断ち切る他ない

リヴィアタンは一步一步確実に足を進める。道は闇の中何処までも続いている。そして、止む事のない雷鳴。

そう言えば、あの日もこんな天気だったな

と、ふと思い出していた。
もう二度と思い出したくない出来事。弟である鎮に告白を受けた日の事だった。

莫迦じゃないか……あいつは！

雨の降りしきる日。雷鳴をも伴っていた。

突然、奴はオレを抱き締めて、

「愛してる」

と言ったのだ。

その行動に、どうしても身が竦んで反発できなかった。ただ、恐かった。雷鳴が……そして鎮の事が……そして……。

思い出しただけで腹が立つ。あいつが天界に来てまであんな事言うから、こんな時に思い出してしまう……どうしてくれるんだ！

そんな自分に嫌気がさす。

そんな事を考えながらも、リヴィアタンは黙々と足を運ぶ。

思い出さないようにしよう……

ただ気持ちを鎮めたかった。しかし、次から次に思考はその事で一杯になる。

「道兄……」

何時かしら、鎮が自分を呼んでいる。そんな声が、幻聴となり聴こえて来る。

「止める！」

リヴィアタンは、次第に聴こえるその幻聴から逃れるために走り出していた。

『カッーン、カッーン』

その足音はだんだん早くなる。

雪鳴の間隔さえ早くなった気がする。

『何で……光一の約束に応じたりなんかしたんだ……オレの約束は

……』

押し寄せて来る記憶の嵐。

「五月蠅い！黙れ！」

『カッーン、カッーン、カッーン、カッーン』音はそれから逃げるかのように鳴り響く。

誰もオレの事なんか分からない！

どれだけ走ったか分からない。次第に近付く視界の先に、一つの扉を見付けた。

やった、これでゴールだ！

その扉を開く。

そこには自分自身の姿があった。それが鏡に映った自分の姿であるのに気付くのに少し時間が掛った。

遠くで雷鳴の音が聴こえている。

悪趣味な世界だ

リヴィアタンは思った。

四方を鏡で覆った世界であったのである。

暫く立ちすくんでいた。

ここが歪みなのか？しかし、天界の空がない……

早く見つけ出し、この場を立ち去りたかった。

すると、鏡の中の自分が突然座り込んだ。その事に気付かずに、

未だ立ちすくんでる。ようやくと、その姿に気付いた時、

「なんだ……これ？」

と、声を出していた。

まるで、自分自身を抱き込むかのようにつぎまっっている自分。

「よっつ！」

その顔が幽かに持ち上がったかと思うと、こちらを見た。

「何だ……お前？」

「オレか？オレはお前」

四方に囲まれたその鏡の中の自分が答える。そして、

「本当の自分だ……」

「何だと？オレが本物だ！ふざけた事言うな！」

リヴィアタンは己の胸に親指を押し付けて叫ぶ。

「お前は知らない……オレが本物だ」

なおもその虚像はそう言う。

「オレの知らない？」

「そうだ、こちらに來い！案内してやる」

そう言うのと、鏡の中の自分の腕が伸びて來た。そして、リヴィア

タンの腕を掴む。

「いたっ……」

力強く掴まれ腕は、その鏡の中へと促される。

「こちらに來い！今見せてやる。お前の本当の姿を！」

そして、鏡の中に引きずり込まれたリヴィアタンは、渦巻く闇の

中その姿を見た。

「……ば、莫迦な……」

そう言うのと、その先に見た者は、まだ小さな少年の道の姿をしていた。

その少年はリヴィアタンに手を差し伸べている。

「お兄ちゃん、こっちへおいでよ」

無邪気に呼び掛けて來る少年。

「こっちに、面白い者が見れるよ！」

そう言った少年に導かれてリヴィアタンはその少年の手に導かれてその方へと進む。

「これは……」

「嬉しいでしょ？弟が誕生するのを心待ちにしていた瞬間だよ！」

三歳の自分……。そう、母親が鎮を出産する日に居た病院だ！

この日、初めて弟ができるという事で、父に連れられて、この病院で、今か今かと待っていたその時が目の前に映し出されていた。

「おとうさん、ボクおにちゃんになるんだよね？はやくうまれないかな？」

そう言っつて、心待ちにしているかのように笑っている。

「そしてこれが、弟の名前を考えている所だよ……」

いきなり場面が変わる。

「ねえ、なんてなまえにするの？」

母の手に抱かれている道。

「ボクね。かっこいいなまえがいいな」

と、自分の名前を決めているかのような発言。それに苦笑いする両親。

また場面が変わる。

「おかあさん！まもるがボクのおもちゃをはなさないんだ！！」

「道は、お兄ちゃんでしょ？少しぐらい我慢出来るよね？」

これは、鎮の癖で、いつも与えられた玩具を投げ出しては、道の玩具を奪っては遊んでいた時の場面。

「鎮ちゃん待ってよ！」

ARK

鬼ごっこしている時の場面、

次々と過去の自分の姿が流れて行く。

何時も何時も、鎮が側にいて笑いかけて来る。そんな懐かしい場面が……

しかし、成長して行く鎮に抱かれている自分の姿。その場面が流れた時。

「やめる!!」

と、リヴィアタンは叫んだ。

振り向く少年の道。

「どうしたの？これは望んでいた姿じゃないか？」

と、冷ややかな顔で語りかけて来る。

「違う！こんなのオレじゃない！」

「どちらがうの？確かにボクの望んで来た姿じゃないか……鎮のこゝとを愛し、そして嫉妬して来た君の姿！」

「黙れ！」

少年の姿が己の涙で霞む。

そんな折、声が聞こえて来た。

「ようこそ、この『嫉妬』の地へ参られました、リヴィアタン殿！」

「誰!？」

辺りを見回す。

そこには、一人の女性が立っていた。

「過去の自分の罪。如何でしたか？お気に召しましたでしょうか？」

「……お前は誰だ!？」

と、訊き返すリヴィアタン。

「私は、ここの領主『シャリート』別名『リヴィアタン』と、申します」

「リ、リヴィアタン？」

「あなたの本来の姿であり、『サタン』様の命令で、今まであなたに変わってこの地を治めて参りました。が、あなたがこの地に足を運ばれた瞬間、今一つになり、これからの魔界の一つの砦を担って行く者です」

「オレが、お前だって!？」

「そうです。これからは、打倒『天界』を目指して共に頑張りましょうぞー！」

そう言うと、リヴィアタンの身体は、その『シャリート』に引きずり込まれるかのように、魂を投げ出していた。

こうして一つになる。

「これで私達は、やっと完成したのです。それでは、屋敷に戻りましょー！」

渦巻く暗闇の中、一つになった『シャリート』は、導くように、足を館の有る方へと運び出した。

オレが……オレの使命は……

しかし、リヴィアタンのその意識は、『シャリート』に支配されて成すべがなかった。

ま……鎮……

最後に残した魂は鎮を呼んでいた。

しかし二度と、リヴィアタンは目覚める事はなかったのである。

12 LUST

LUST

『淫欲』と刻まれた扉を最後に開いたのはアスモデウスであった。その開かれた扉の向こうには、内臓のようなぬめぬめとした道が続いていた。

「げっ、気持ち悪！」

歩く度に、糸を引く足下。アスモデウスは吐き気をもよおしていた。

気持ち悪くなる要因はこれだけではなかった。酷い悪臭が辺り一面に広がっていたのである。

「みんな、こんな道を歩いているのか？」

他の仲間のことが頭を過った。

先に進んで行った仲間たち。歪みを見つけるため、アスタルテの意志を尊重して集まった五人と一匹。その各、後ろ姿を見送った。

「やってられない……飛んでしまえ！」

背中の黒い羽根を広げる。そして飛び上がった。

見下ろすと、よけいに気分が悪くなった。本当に内臓の上にいるかのようなのである。所々血管のような管が脈を打っていた。

道兄……平気かな？

と、ふとリヴィアタンの後ろ姿を思い出していた。

粹がっついていても、気の弱い人だ

と、小さい頃から見守っていたアスモデウスには、それが心配でならなかった。

天界に来てまで、あんな事言うつもりはなかったのに……

と、旅立った先でのことを思い出していた。

でも言わずにはいらなかった……

あの、か細い背中がそう言って欲しいと待っているかのようで……

でも拒む。オレは、兄貴にとって、必要のない者なのか？

自分の行動には責任を持っているつもりであった。

あの時だって、本当はあんな事をするつもりはなかった。だけど、余りにも愛おしくて……悔しくて……

飛行しながら思い出していた。

いつでも側に居たかった。なのに、光一を選んで……オレを裏切った

自分の何処がいけなかったのか？その事を永遠と思い返してみても思い付かないでいた。

約束は破るために有るって言うのか？

そんな事は決まないと、思ったかった。

あの日以来、一度も二人になっても声さえ掛けてくれなかった。

それほどオレのことが嫌いであったのか？それともこの思いは間

違った物だと言っのか？

決してそんな事はないと信じている。せめてオレに背を向けては欲しくなかった。どんな時でも、笑っていて欲しい。

そう願うのは罪であるのか？

こうやって墮天使でいる自分のことを考えた。

お似合いだよ。この姿が……

アスモデウスは、今この場所にいる事を、実の所安心していたりもしていた。

一度、道のいない所で自分を見つめ直しておきたい

そんな思いに浸っていた時、扉を見付けた。

「あれが、『淫欲』の地」

近付いて来るその扉を見つめながらアスモデウスは、ただ集中して飛行していた。

そして、その扉の前で降下した。

『ギーッ』と言う音がしてその扉は開かれた。

その先には蜘蛛の巣がはり巡らされていた。その糸の上に複眼を持った女郎蜘蛛が、待ち構えていた。

「ようこそおいで下さいました『アスモデウス』様。直ちに領主邸においで下さいませ」

というと、糸を吐き、アスモデウスを捉えると、その身体を自分の背中に乗せる。

『シャカシャカ』という足取りは、糸の上を滑るかのようでとてつもない早さであった。

「そんなに急いでどうしたってんだ？」

アスモデウスは問いかける。

「御領主様の遺言です。この度は『アスモデウス』様に後を継がれて欲しいという……」

その、女郎蜘蛛が答える。

「何故、オレに？」

「神託が下ったのです。現領主『アスモデウス』様の代わりをする考が現れると言う御神託が……」

「神託……」

アスモデウスは考えていた。

オレは、天界を守るための使いでこの地に赴いたんだ……それなのに、そんな神託が下るとは一体どう言う事なんだ？

迅速な女郎蜘蛛の動きは、目の前に広がった、領主宅の入り口を目指していた。

そして、『スーツ』と、中に滑り込んだ。

「新領主『アスモデウス』様がいらっしやいました……部屋を案内下さい！」

そう言うと、中から、若い女の魔界人が『ワラワラ』と出て来た。

「初めまして、私が貴方さまの身边を任されております『アラキバ』と申します」

と、深々とお辞儀をする。

「前『アスモデウス』様は、老衰のため、この地を残し、先立たれました。次に転生する迄貴方様に、後を任すようにとのことです。

もちろん『サタン』様の御命令をも継がねければなりません。その事に関しては、今は『ダネル』殿が引き継ぎ下さいました。その御報告は後程、御本人にお聞きくださいませ」

と、『アラキバ』は伝える。

「致し方ない。私のこの地での任務を成し遂げよう。して、気にな

るのは、『サタン』様の命令ってやつだ。『ダネル』殿は何処にいらっしやるのだ？」

「ただ今は南の地に出向いて、その任を果たしていらっしやいます。二日後には戻られますので、それまでお待ち下さい」

と、『アラキバ』はアスモデウスに言う。

「分かった。で、我が部屋は何処に？」

「こちらです」

と、案内してくれる。

「今は少し休みたい。申し訳ないが、一人にしてくれないか？」

アスモデウスは、『アラキバ』にそう伝える。

「承知致しました」

と、部屋を退く『アラキバ』そして独り残されるアスモデウス。

天蓋の有るベッドに腰を掛けた。

着任そうそう、この待遇。そして、『ダネル』の帰りを待たなければこの先動きがとれない

領主としての任。こんな物まで背負う羽目になろうとは……思ってもいなかった

ゴロリと寝つ転がる。その時、幽かだったが、道の声を聴いた気がした。

ん？空耳か？

それ以降そんな声は聴こえなかった。

二日後……？七日経ったら天界に戻れなくなってしまっ……それより、この地の一日は、天

界のどのくらいの時間を意味するのかさえ判らない……こんなんで

本当に大丈夫なのか？

不安が過る。そして『すーっ』と眠りに就くアスモデウスであった。

13 A MISSION

A MISSION

アスモデウスの不安は適中していた。

扉を抜け様々に領主の元に辿り着いた一行が費やした日数は、天界での三日を費やしていた。

『白虎』の地にいる『ウリエル』は、待ち望むレーダーに未だに何の知らせがない事に苛立ち始めていた。

「何をやっているのだ……私の力が及ぶ日数でないと、どうしようもないのだぞ」

今か今かと、眠りに就く事さえもつたいなく感じる。

「よう！『ウリエル』。勝手に入らせてもらったぜ！」

と、背後から声が聞こえて来た。いきなりの訪問者に振り返る『ウリエル』。

「申し訳ございません……お止めしたのですが、カづくで通られると……」

その背後に『ウリエル』の配下が跪いていた。

『ウリエル』はこの動揺を悟られないように微笑む。そして、

「これは、これは、『ラファエル』殿……如何致したのですか？何か、変わった事でもございましたか？」

東の地『青龍』の地を守護する『ラファエル』の姿がそこにあった。

「いや？……ただ遊びに来ただけさ。それより、『ウリエル』おまえ顔色が悪いぞ？」

それもそのはずである。『ウリエル』はここ三日の間、まともな睡眠をとってなどいない。

「気のせいだ。この部屋の照明のためにそう感じるんだろう……」
そう言うと、再びレーダーを見る。

「さつきからお前何やってるんだ？そんなリーダーを眺めて……」
 そう言いながら、『ラファエル』は、『ウリエル』の隣に来てそのリーダーを覗き込んだ。

「ああ……これか？これは歪みを見つけるための装置だ……」
 嘘は言っていない。ただし隠している事は有るが。

「へえ〜こんな物何時作ったんだ？と言うより、こんなので判る物なのか？」

と、『ラファエル』は関心を持って問い返す。

「ああ、判る。その内判ったらお前達に、働いてもらわなければならなくなる」

その言葉に、

「歪みねえ……そう言えば一つは見つかったんだよな？」

「そうだ。南の『朱雀』近くでな」

「『ケルビム』と、『セラフィム』が見付けたと聞いた……あいつ等見かけないけど今何処にいるんだ？」

「……いま、また偵察に向かっている。その内帰って来るであろう……」

確かに偵察だ。どう言う偵察かは教えられないが……

「何だか、取込み中の様だな……だったらこれで失礼しよう。歪みの件、何か分かったら連絡をくれ……」

そう、『ラファエル』は告げると、もと来た通路を歩き始めていた。その時は頼んだぞ、『ラファエル』

「お前こそな……何隠してんだか知らないけれど、無茶だけはするなよ！」

手の平を『ヒラヒラ』させながらドアの前まで来るとそう言い残した。『シユン』と閉じられるドア。

残された『ウリエル』は『じっ』とリーダーを見つめていた。

魔界に挑んだ、五人と一匹は、それぞれ次の日を待ち望んでいた。アスタルテは、同僚の『シエミハザ』に会い、明日からのことを

話し含っていた。

ルシファアは、男子寮で一夜を過ごしていた。アスタロトは、領主の怠惰さに呆れつつも、明日のことを考えていた。

トウナは、夜道で野営をしながら、明日を待っていた。

リヴィアタンは、引きずり込まれた意臓に負けられないように、ただ己を取り戻そうともがいていた。

アスモデウスは、二日後に帰還する『ダネル』を待っていた。

各人それぞれがそれぞれの意思を持ち、歪みのことを考えていた。

そして、時は訪れたのである。

『ウリエル』の部屋のレーダーに、赤色に輝く二つの点が現れた。

「来た！」

それは、五日目の朝のことであった。

「東の地、6・5地点に一つと、北の地3・9地点に一つ」

そう口走ると近くに有る単独の無線機に向かって叫んだ。

「『ラファエル』殿。聞いておられますか？東の地6・5地点に、歪みを発見。ただちに処理をお願いします！」

すると、

「了解！程なく処理する！」

と、返事があった。

そして引き続き、北の地に無線を切り替える。

「『ガブリエル』殿、北の地3・9地点に歪みを発見しました。速やかに、処理願います！」

そう言うと、

「はい、了解致しました！」

と返事が返って来た。

その言葉を聴くと速やかに無線を切る。そして、ドーム状の空間に光の道を繋げた。それは、

地庭に流れ込む砂漠の道へと繋がる光であった。

「我、この地から呼び戻す。我の支配に有るカフスを持つ者よ！今一度この地に戻りたまえ！」

その光は、神々しい光の渦となって二人の像を描き出した。そして暫くすると、そこには水と結が立っていた。

「よくお戻り下さいました……五日経っても何の動きも見せられないから、もうどうすれば良いのかと、考えておりましたよ」

『ウリエル』は安心したためか、その場に崩れるかのように膝を着いた。

未だ、その二人の背中には、残像のような光が付き纏っていたが、いきなりふらつく『ウリエル』の姿に駆け出すとようやく消え失せた。

抱き起こす結。

「大丈夫ですか？『ウリエル』殿……これって衰弱してる！？」

「結！私、下に行つて人を呼んでくるわ！それまで動かしちゃダメよ！」

水は、すぐさま駆け出して救護してくれる者呼びに行った。

ドアが開くと、その場に近衛兵が待機していた。理由を話し、『ウリエル』を療養させるようにと促す。

「『ウリエル』様！」

駆け込んで来る、兵。

「何と言つ無茶をなさるのですか！歪みのことは、ボク達が受け持ちます。もし、西の地のどこかに歪みがあつた時いかが致すのですか？それまでに力を貯えて下さい！」

結は、忠告をも兼ねてそう言った。

「これくらい、平気だと思つていた……それに、リーダーを見ていないとこちらに貴方達を引き戻す事が出来ない。後になればなる程それは困難になって来る……私の力が及ぶ限りは何とかしたかったのだ」

額に汗を掻きながら答える『ウリエル』。

「分かりました。取りあえず、レーダーに反応があったらお呼びします。それまでに何とか、休まれて下さい！」

結には分かった。これが並々ならない、大変な事であるのだと言う事を。

「『ウリエル』殿こちらへ……」

そういつと、担架たんかを運び込んだ近衛兵はその上に『ウリエル』を乗せて運んで行った。

「結くん、ここは二人で交代に番をしましょう！？まず、私が休んでおくわ。夕方になったら起こして！そして今度は、貴方が休むのよ！？」

水はそう言っただけで床に布を広げ眠る用意をした。

「分かった。それじゃ……」

と、レーダーに目を光らせる結。

そして、『ウリエル』の言葉を思いだしていた。

五日だって？そんなに経ったような気がしない……時間のズレがあるんだ……他の皆はその事に気付いていない……

心配になって来た。しかし、レーダーには何の変化も見られなかったのである。

時間は刻一刻と流れて行く。

こんな日々を『ウリエル』はたった一人で乗り越えて来たんだ。

そう思つと、胃が痛くなつて来た。

晶ちゃん、要、鎮さん、道さん……早く何とか返事して！

思いが通じたのか、交代するその時刻が来た時、レーダーに一つの光が点滅した。

「西の地9・5地点」

直ぐさま、『ウリエル』に連絡をとった。

すると、ふらつかせた身体で赴く『ウリエル』。

そして、その者を呼び戻す。

すると、輝かしい光に包まれ要がこの地に舞い戻ったのである。

「それでは、私は、歪みに出かけます。後のことはお任せ致します。もし何かあつたら連絡を下さい！」

そう言つと、ドアを急いで出て行つた。

「要！無事で何より！」

結は駆け寄つて手をとつた。

「手間取つただけで、何とかなつたぜ！あそこの領主、すげえ腹立つ奴でさあ、ど突いてやるうかとか思つちやつたぜ！」

頭の後ろに腕をまわしながら、そんな事を言う要。

「それはボクもそう！何が自分に変わつて任務を受けてくれた！？冗談じゃないよね！」

と、あの『怠惰』な領主のことを思い出して、穏やかな結さえも腹を立てていた。

「領主の変わりに？」

何時の間にか起きて来た水。

「そうなんだ。同じ名前だから良いだろうとか言つてたよ？」

と、説明を付け足す結。

「知ってる？魔界では、歪みのことを『魔天道』と言つらしいわよ……そして、各領主が『サタン』の命令であの道を守る事を任じたらしい」

「へえ、そんな事調べたのか……？」

「調べたと言うか、教えてくれたと言うか……あの扉の有る部屋憶えてる？」

「うん。七つの扉のあつた部屋の事だね？」

「そう。あの場に、一つ閉ざされた部屋があつたの……それが『暴食』の部屋。そこは、以前歪みを潰されたせいで、その為潰されたらしいの……そして、その領主『ベルゼブブ』は、その責任をとつ

て死刑にされるそうよ!」

あの紙きれの事を思い出しながらそう答える。

「死刑!?!」

「結くん! あんた、ちょっと間違ってたら、『サタン』に殺されていたわね?」

「本当だ……」

身震いする結。

「しかし、潰されるってどうなっちゃうんだろう?」

「部屋、と言うか……世界自体が消滅するんじゃないかしら? 実際、私達がその場にいる訳ではないから、解かりっこないんだけど……」

「……『タミエル』……」

と、ふと要は呟く。

「えっ?」

と、結と水は要を不思議そうに見た。

「魔界にだって良い奴は居たんだ……これで本当に良かったんだらうか?」

と、短い時であったが、『タミエル』とコンビを組んだ要は、その事を悔やんでいた。

「確かにね、人間界に居そうな人物だって居た。私より優れた人物も居た。でも、天界を守る事が、第一条件じゃない!」

水は要に忠告した。

「『サタン』は、一体何を恐れていたんだろう? 初めに、魔界が圧迫されている事を唱えていた……そして、『創造神』の事を嘆いていた……」

結は、思い出すかのように言葉を発する。

「そう、圧迫とは何を意味していたんだろう? 一方的にその……水が言っていた『魔天道』とは何の必要があって作られたんだろうか? そして、この世界を襲う地震……」

要は普段にない真剣な面持ちで考え込んでいた。

「私達がそんな事を考える必要はないんじゃない? 私達の使命に従

つていけば、間違いはないわ！」

「しかし考えなきやいけない事じゃないのかな？数千年も前に、聖戦は終わっている。その事を未だ根に持っているとは思えなかった……確かに戦を仕掛けるとは聴いたけど。あの老衰し切った『サタン』からその野心など見受けられなかつたし！？」

要は頑固にも、未だ考えている。

「ボクも同感だ。一度ちゃんと話し合いを持った方が良いのではないだろうか？」

結は要の意見を聞き入れた。

「あんた達どうかしたんじゃないの？」

しかし水は断固として、反対を押し切る。仕掛けられたら、その責任を取るべきだと思っているらしい。

「中央部は何をしているんだ？……話し合いもしないつもりなのか？」

疑惑が生まれた。

そんな時、地震が起こった。

何時の間にこんなに酷い地震が来るようになったのか……その揺れは、今までに感じた事のない程大きな揺れであった。

周りの物に掴まりその地震に耐える三人。長い地震は、程なくして何とか収まった。

「歪みを潰す事と何かかわりが有るのかも知れないな……」

要は思った事を素直に言った。

「何かの秩序を壊しているのかもしれない……」

結はその可能性が有るのではないかと思いはじめていた。

『シエミハザ』は、気持ちの良い女性であった。何に関しても、速やかに行動出来る。

「『アスタルテ』どう？魔界も捨てた所じゃないでしょう？」

そう言う『シエミハザ』の顔はにこやかであった。

そんな彼女に共感が持てた。

「そうね。住めば都。とは恐れ入るわ？」

こんな火山帯にいるのに、アスタルテは、慣れ始めていた。

「ほら、あそこよ。『魔天道』は！」

途中厳しい山をいくつも越えながらも、二人は疲れも見せず語り合っていた。

「なぜ、貴方はこの魔界に来る事になったの？」

気さくにアスタルテは『シエミハザ』に問いかけた。

「言うなれば、親殺しの罪『受胎告知』昔は、『ガブリエル』様がしていた仕事だったけど……今ではマザーコンピューターが支配しているでしょう？その意識にちよつとした思いで、受胎するアンブルを摩り替えてしまったの……」

「何故そんな事を!？」

永久犯罪だ

と、アスタルテは思った。

「私は、自分の子供が欲しかったの。でもそれが適わない身体だと知った時に、怒りが込み上げて来たの……不様だなんて！」

『シエミハザ』は答える。

「そう、愛していた人が居たのね？」

「ええ……罪だとは知っていた、だけど、どうしようもなかった」

ふさぎ込む『シエミハザ』。

「……」

「その事がバレた時、私は『ウリエル』様に身柄を渡され、この魔界に降り立ったの。でもここは良い所よ。愛する者に何時でも話し掛けられる……愛しあう事ができる」

「シエミハザ』は、なおも続けた。

「私の愛する人も、私の事を追い掛けて来てくれたわ……第一級犯罪。『憤怒』の罪を彼って……」

「そして、この世界のどこかにいるのね。もう出会ったの？」

「ええ、今、私は幸せよ」

その言葉に、心が熱くなったのを感じた。

「さあ、もう少しよ！頑張りましょう！」

と、『シエミハザ』はアスタルテに言う。

こんな『シエミハザ』を見て、アスタルテは悩んでいた。

私がこれからする事は正しい事なの？

心から迷っていた。

この魔界で、幸せでいる者を裏切らなければならない。『サタン』の言葉、あの事も気になるでも相談出来る者はいない……

しかし、アスタルテは、天界人である。

「ごめんなさい……」

次第に近づく『魔天道』。

アスタルテは、耳のカフスに指を持って行った。

私こそ、罪人ね……

そう心に思った瞬間、ボタンを押した。

それから程なくして、大きな暖かい光に包まれて、アスタルテは、この地を去ったのである。

「晶先輩！」

現れたシルエットに向かって水が駆け寄る。

「ただいま、戻りました」

それは、六日目の明け方のことであった。

「ご無事で何よりでした……」

『ウリエル』が晶に話し掛ける。

「他の皆は？」

辺りにいないことに気付き、問いかける。

「貴方で、四人目です。もう後一日しかないのに、後の二人がこの地におりません」

「何ですって！？もうそんなに時間が経っているって言うの？」

魔界での日々はたったの二日である。

「時間の流れが違うのです。これは私の計算ミスですね……」

『ウリエル』は頭を抱えていた。

「落ち込まないで下さい。それが始めから解かっていたら、私一人で行っていたら、ここに戻って来る事など出来ませんでした……」

と、晶は『ウリエル』を励ますかのように話しかける。

「で、後二人とは？」

「『ラファエル』殿と、『セラフイム』殿です……」

『ウリエル』は答える。

「あと、一日と、半日……」

そんな所に、要と結が顔を覗かせた。

「晶ちゃん！」

要が嬉しそうに駆け寄る。

「心配掛けたようね……ごめんなさい」

頭を下げる晶。

「無事で、本当に良かった！」

と、結が続ける。

「『ウリエル』殿？ところで、これから中央部に行きたいのですが、一台船を用意して頂けませんでしょうか？」

『ウリエル』の方を見上げながら、晶は問う。

「どうしたのです？『トロンズ』長こんな早々に！少し休まれた方

が……」

『ウリエル』は不可思議な晶の言動を問う。

「そう言う訳には行かなくなったのです！」

「えっ？」

四人は、晶を見る。

「改めて、魔界の『サタン』と話をしなければなりません……こちらの歪みと地震について……話によっては、これ以上勝手な事は出来ないかも知れませぬゆえ……」

「それは一体どう言う事なのですか？」

「私達『トロンス』は中央部に所属する者。上からの命令で動いて来ました……しかし、本当にこれで良いのかという疑問が生まれたのです……」

考える所があると、晶は唱えた。

「それじゃあ、やはり何か有ると言う事ですか？ここ数日地震は酷くなる一方だ」

『ウリエル』はそう答える。

「晶ちゃん？」

要は、自分の中に生まれつつある疑問を晶も感じ取ったんだと思っただ。

「結も来てくれますよね……あなたの地位も、中央に属する者。あなたの発言も必要となり得ますから……」

その言葉に結も決心していた。

「オレも行きます！地位的には下っ端なんだろうけど……オレの証言も必要だろ？」

要もそうしたいと思った。

「晶先輩が行くんだったら、私も！」

「いえ……あなたは、北の地『玄武』に行きなさい。そして、『ガブリエル』殿の手伝いをしなさい！」

「えっ！？でも……」

水は思いつきり渋った。

「でも……ではありません。今、この天界の北の地をあなたのお姉さんが、一人で切り盛りしているのですよ……手伝って差し上げなさい……」

と言うと、晶は『ウリエル』に進言する。

「船の用意が出来たら教えて下さい！出来れば、『セラフイム』殿と『ケルビム』殿が戻ってくださったらとは思いますが、これ以上は待つてはいただけませんゆえ……」

そして、リーダーを眺める。

既に、五つの歪みが消滅してしまった。

「『ウリエル』殿。カフスのボタンが押されない限り……引き戻す事は出来ないのですか？」

と、晶は問う。

「ええ、そう言う仕組みにしたものですから……押さない限り、こちらからはどうにも出来ません」

残念そうに答える。

「そうですか……分かりました。では、後のこと宜しく御願ひ致します」

そういうと、近くの椅子に腰を掛けて仮眠をとりはじめる晶。その様子を眺める四人であった。

仮眠をとった晶が目覚めると、用量された簡易版の船に乗り込んだ。

七日という期眼の内、あと丸一日を残して、中央部へと向かう。

『セラフイム』、『ケルビム』の帰還もなされないまま、誰もが張り詰める緊張の中、晶に全てを託していた。

「では、『ウリエル』殿。もし、二人が帰って来たのであれば、中央部に乗るように伝えて下さい。お世話をおかけ致します」

そう言い残すと、晶と結、そして要はこの西の地『白虎』を旅立った。

残された『ウリエル』と水はそれを見送っている。

「では、『ミズチ』殿。あなたも、一刻も早く北の地『玄武』へ旅立たなくては行けませんね」

と、今もなお、その船を見送っている水に向かって『ウリエル』

は告げる。

「……そうでしたね」

気のない返事に、

「やはり、一緒に着いて行きたかったのですか？」

と優しく言葉をかける『ウリエル』。

「そうですね……でも晶先輩は、私の使命を果たすようにおっしゃったのです。だからそれに従います……」

そういうと、思いを断ち切るかのように、『ウリエル』を振り返った。

「では、小一時間もすれば『玄武』から送迎の船が来ます、それまで中でお待ち下さい」

「御迷惑をおかけします」

そう言って二人は、『ウリエル』の部屋へと入っていった。

「『ウリエル』様。取りあえず今の所は別段何の変化も見られません」

「大儀であった……下がって良いぞ」

と、近衛兵に伝える。

晶遅の船を見送る間、レーダーに変化がないかを監視させていたのである。

それからの二人は、そのレーダーの前に立っていた。

依然と何の変化も見受けられない。

「『ウリエル』様は、何故地球へ転生されなかったんですか？」

水はふと、今まで感じてた疑問を投げかけた。

「私が？地球へ？」

「そうです。だって変ですよ……私の姉『ガブリエル』や、兄『ラファエル』は転生していたと言っのに……」

「私は、天界の死活を維持しなくてはいけない使命を受けた者、これに関しては、コンピューターで補う事は出来なかったからです」

「コンピューター？」

「そう。この天界は、今では『マザーコンピューター』と言われる物が全てを担っているのです……そのため、必要であるもの以外は地球や、その他の生命が生きて行く事ができる惑星へと転生していただきます」

「私達にはその……必要がなかった類に入るのですか？」
少し心外だという風に水は問いかける。

「必要が無い……と言つには言葉が悪かったようですね。天使である……天界にいる要素が不可欠で無くなった者は人員削減のため……そう言う魂の流れを作ったのですよ。『マザーコンピューター』は……」

「その、『マザーコンピューター』って見た事有るんですか？」

「ええ、建築のおり、一度だけですが」

「一体誰が作るように言つたのですか？」

「そうそれが問題だ。」

「今では、その発案者が誰であつたかは分かりません……中央部に行けば分かるかも知れませんが……それが？」

「逆に問いかける『ウリエル』。」

「何だかうさん臭いから……だつて変じやないですか？天使の手で出来ない事だけを押し付けて、そうじやない者には転生させているなんて……」

「言われてみれば……そうなのかも知れませんが……しかし、聖戦を終え、この数千年の間、ずっとこの体制を敷いて来ました。誰も不思議に思つ事もなく」

「もし、今度のような事が起こつてなかったら……私達は、この地に来る事はなかったの？」

「そうです。危機迫つた事がない限り、この天界にお呼びする事はなかったハズです」

その言葉に、考えるふうになっている水。

「私達の役目が終わつたら、また再び、地球へと、戻されるのですか？」

「もちろんです。そのために『トロンズ』長は計らっています」
 「晶先輩が？」

「そうですね。一度、地球での魂の一生を終えない限り……本当の転生は出来ない決まりですから」

「それじゃあ、私達の記憶は？」

「記憶は私が消させて頂きます」
 静かな物言いだった。

「……来なければ良いのに……」

『ボソリ』と水は言った。

「えっ？」

「うっん。何でもない！」

「……」

水は、後ろに有る椅子に腰を掛けた。

「それにしても遅いわね……」

「そうですね。こんなに、各自バラバラになる程……時の進み方は違うのでしょうか？不安になります」

この六日間の事を『ウリエル』は思い出していた。

「魔界では、たったの二日間だったのよ？」

とは水の言葉。

「変ですね。地球とここでの時の流れ方は、計算できません。もちろん、魔界での時の流れも……こんなになるなんて思ってもいませんでした……まさか！！」

と、『ウリエル』はいきなり声を荒げた。

「えっ？どうしたの？」

驚く水。

「……これまでの異変で、すべての時間に狂いが出来たのでは……！？」

と、拳を振り上げるようにしてリーダーに叩き付ける。

「一体どう言う事？」

突然のことに、立ち上がる水。『ウリエル』のこう言う所を見た

事が無かったからだった。

『ウリエル』は、突如、レーダーから離れ、近くの機械類に手を伸ばした。

「やっぱり……大変な事になった」

その様子を追い掛けるように覗き込む水。

「こ……これは？」

それは、小さくはあったが、モニターであった。

「これってどう言う事!？」

そこには、地球の自分の器を救急車で運んでいる姿が映し出されていた。

「確か、ここでの一日が地球では、百分の一秒だって事じゃなかったの……!？」

そうである。ここに着いてから一週間そこらだと言うのに、この有り様はおかしかった。

「秩序が……壊れかけている……」

『ウリエル』は小さく咳いた。

「こうしてはいられない!すぐに、『トロンス』長にお知らせせねば!！」

そう言つと、『ウリエル』は身を起こし、無線機の有る所まで駆け出した。

その時である。レーダーに赤い点が輝き始めたのは。

「『ウリエル』様!」

「こんな時に!？」

そう言つた、『ウリエル』に、その赤く光った地点を確認し、無線線を使った。

「『ガブリエル』殿、北の地7・9地点に歪みを発見しました。速やかに、処理願います!」

拳をきつく握りながら、『ウリエル』は伝える。

「北の地?」

水も焦っていた。

「はい、了解致しました！」

と、『ガブリエル』より直接返事が帰って来る。

「私も行きます！『ウリエル』様！送迎の船はまだ来てませんが…この西の地からもそう遠くはないようですね。姉上にお伝え下さい。そして、これにて失礼します！」

そう言うと、水は駆け出していた。

「『ガブリエル』殿！『ミズチ』殿もそちらに参られます。着きましたら、少しお待ち下さい」

「水が？分かりました。ありがとうございます」

そして、無線は途絶えた。

「我、この地から呼び戻す。我の支配に有るカフスを持つ者よ！今一度この地に戻りたまえ！」

その後、直ぐさま『ウリエル』は行動を起こす。その両手から放たれる光は、神々しい光の渦となって一人の像を描き出した。

そして暫くすると、そこには鎮の姿が浮き上がったのである。

「ご無事で何よりです……」

『ウリエル』は近付いて鎮に声をかける。

「少し手問取つちまった。二日後に帰って来るといって『ダネル』を待っていたんだ。だけど、四日経っても帰ってこない。心底間に合わないかなって思ってたんだ」

その言葉に、

「では、魔界ではどれだけの時間を過ごしたのですか？」

『ウリエル』は不思議な気分に陥った。

確かに時間のズレが有るはず。

「六日は経っていた」

しかし、同じ時間の流れだ。

「……」

『ウリエル』は考えていた。

「どう言う事なのだ？選んだ道の違いで、これだけの誤差が出るとは……」

沈黙する『ウリエル』。

その理由を知らずに、鎮は問いかけた。

「後の皆はどうしたんだ？もう帰って来てるんだろう？」

「……」

「おいっ？どうしたんだ？『ウリエル』さん!？」

鎮が問いかける。

「……ああつ。すみません。考え事をしてたものですから……」

「他の皆は？」

「ああ、ええ……『セラフイム』殿以外は戻って参りました……今、中央部へと参られています」

その言葉に、

「道がまだ戻っていない……？」

「ええ、天界と魔界では時差が生じているんです……そのために、みなさん、ここに帰って来る日がまちまちで……『ケルビム』殿が

初めてです。同じ時間を過ごされた方は……」

「何だつて？時差？」

恐ろしい気分陥った。もし間違っていたら、二度と天界に戻って来れなかったかもしれないなんて……

「そう、『トロンス』殿からの伝言です。この地に戻ったら、中央部に来て欲しいそうです。ただちに船を用意致しますのでそれまで待機して下さい」

『ウリエル』はそう言うと、まず晶に連絡をしようと無線機に手を伸ばす。

「こちら『ウリエル』。『トロンス』長に内密なお話がありますので、変わって頂けませんか？重大な事です！」

「了解致しました！暫くお待ち下さい！」

そう言うと船員は晶に変わるように連絡をつける。

その刹那の間に、

「『ウリエル』殿。申し訳ないんだけど、オレが中央部に行くのを待ってもらえるか訊いてもらえないか？」

と、鎮が持ちかけた。

「……『ケルビム』殿？何を言ってる？」

「良いから！黙って言う事を聞いてくれ……」

「……」

その、鎮の真剣な面持ちに圧倒された『ウリエル』は黙って頷いた。

「こちら、『トロンス』。『ウリエル』殿、如何致しました？」

「落ち着いてお聞き頂きたい……どうやら、魔界だけではなく、地球に対しても時差が出来ているようです。少なくとも、一分以上の誤差が出ています……これが、この天界の異変と何か係わりが有るかも知れませんかゆえ、お伝え致します」

「何ですって！一分……それでは、これ以上の長居が、地球での結達の生死に係わると言うのですか……何てこと……」

「あと、ただ今『ケルビム』殿が帰還されました……しかし、中央部に行くのは一度見合わせさせて頂きたいとの申し出です」

「……そちらに関しては、承知致しました。『ケルビム』殿に一任致しますと言付けて下さい……」

「それでは、以上の報告を終わらせて頂きます」

「御苦勞様です。『ウリエル』殿」

晶がそう言うと、『プツリ』と無線は切れた。

後には静けさが戻って来る。

「『ウリエル』殿。申し訳ないが、もう一度、魔界にオレを戻して下さい！」

その申し出に、

「何を莫迦な!？」

と、驚きの表情の『ウリエル』。

「莫迦な事は承知の上です。でも、道があの場合に残されているのは、

どうしても我慢ならないんです……今思えばあの時……確かに道の声を聴いたんだ……何かが起こっている可能性が有る……それを確かめに行きたい」

と、鎮は一步足を踏み出して言い寄る。

「しかし、危険です。時差が……」

「分かっています。そこを何とか……」

「……」

『ウリエル』視線を外す。

「このカフスに、天界の時間を刻む事は出来ないのですか？」

「……出来なくは有りません……ただし、魔界特有の磁気などが働いたら、全く使い物になりませんよ……」

「それなら大丈夫だと思いますよ。だって、しっかりと、こちら側のリーダーは働いていたのだから！」

「なる程……」

鎮の言葉に一理有ると思った。

「分かりました。ただし、必ず戻って来るのですよ。そうして頂かないと……」

「判ってる。祈っていてくれ！道のいる場所の時差が、ここより遅い事を！」

そう言つと、鎮ははめていたカフスを『ウリエル』に渡す。

そのカフスに細工するのに、三十分掛けてやっと出来た。

「これが、この天界を指し示す時刻です。と、言うより残り時間の方が解かりやすいので、その時間を刻み込みました。かならず『セラフイム』殿を連れて帰って下さい。約束ですよ!？」

「ああ、判っている……オレだって、あんな魔界に居たくなんかないからな」

そう言つと、鎮は再び魔界に行く支度を始めた。

一度入った道、その道をまた辿るなどとは思ってもいなかった。ただし今度は、たった一つの部屋に入る事になる。

目的地は一つであった。

「『サタン』に不審がられないように名前をすり変えておきました。こちらが手形です。」

何分偽造なので怪しい所が出るかも知れませんが上手く切り抜けて下さい」

そう言うと、『ウリエル』は手形を渡した。

「感謝致します」

「御武運を……」

そういうと、再び魔界への道が開かれ鎮は旅立って行った。

その姿を見つめる『ウリエル』。

「神よ、あの者にご加護を……」

静まっていく砂吹雪。

その視界から離れた所から『ラファエル』が見詰めていた事など知る由もなかった。

14 A W I S H

A W I S H

ここ、中央部に向向中の船の一室で三人は大理石で出来ている丸いテーブルを囲み、話をしている最中であつた。

そして、『ウリエル』からの通信を受けた晶は、この世界の秩序について疑問が生まれ始めていたのである。

「どう言う事なんだ？晶ちゃん！」

要は、先程から黙つてしまつている晶に詰め掛けた。

「地球上での時間に狂いが出ているなんて……宇宙始まつて以来だわ！」

「それじゃ……ボク達は、死んでしまつた事になつて居るの？」

結が問う。

「そう言う事になるわね……ごめんなさい。こんな事になるなんて思つてもいなくなつたわ……。もう猶予はないの、急いで中央部に行つて、この話を纏めなければ、全てが手後れになる」

「でもどうやって？これはオレ達の話だけで纏まるものなのか？…

…それとも……まさか、最終的手段が何か有るつていいのか？」

要が問う。

「最終的手段。奥の手が有るわ。直接神と対峙するつもりなの……」

晶が『ボソリ』と呟く。

「そんな……神は何処にもいないつて、以前晶ちゃんは言つたじゃない？」

結が思い出したかのように言う。

「ええ、確かに今、この天界に神はいない。『神の玉座』と呼ばれている扉の向こう側に呼び掛けても……決して返事は帰つてこなかった……だけど、もう待てない！一刻を争うと言う事態にもなつて、この世界の『創造主』が何の返答もしない何てことあり得る？余り

にも不自然だわ……きつと何か有るのよ……それを調べるの!」

「『神の玉座』って何処に有るのさ?」

晶の言葉を飲み込んだかのように、要は問いかける。

「中央部・第一監査室。そこから入った世界樹の一番上に有るわ…

…」

「そこに向かうのには何か策がいるの?」

「いえ……監査長にそのための手続きが必要になってくるわ……でも、礼拝をする事を理由に忍び込むの……つまり、今回の事変の話を持ち出し、今一度神のお言葉を聴きに行くという名目で!」

「なるほど……それだと怪しまれずに済むし……無駄な争いが起る事はない」

要はなるほど頷く。

「後は、会議でどれだけ立証を得られるかだ……他の『トロンス』や『ケルビム』『セラフイム』にどれだけ印象づけられるか……そこが問題だ」

「それには、私達の罪が暴かれる事になる。しかし、今回の事は已む得ない調査ではあった。それをどれだけ理解してくれるか?なの」

三人は沈黙した。

魔界に入った、その事。それも、無断で『ウリエル』を味方に付けて行った。その事がバレれば、どう言う処罰おとがが下るか……

「『ウリエル』殿には良くしてもらったわ……しかも、これからその事を打ち明けに行かなければならない……彼にも罪を被ってもらう事になる……」

晶は頭を抱えていた。

「ねえ。サタンが、神に連絡を取ろうとしていたのだったら、この天界にも連絡があったんじゃないかな……その点はどうなの?」

結は、一度話を戻した。

「ええ、それに関しては調べてみないといけないわ……誰かがその事実を曲げてしまっている恐れが有るから……」

晶は考えに耽って言う。

「それがあつたとしたら？ 一体どうして隠していたんだろう？ 不思議だとは思わない？ だってこうなる前に……つまり、歪みなんかを作り出す前に、自体の悪化を防げていたんじゃないかな？ 引っ掛かるんだ」

結は、丸いテーブルに肘をつきながら不思議そうに問う。

「確かに変ね……この事は何の議題にも上がってこなかった……ただ、歪みが地震に関係が有るかもしれないからと言う名目で動いて来たに過ぎない……」

「ほらっ、おかしい……不自然すぎる」

「誰がこの指揮をとっていたんだ？」

要は晶に問いかけた。自らは、ただ晶の指示を受けたに過ぎない。「私達『トロンズ』には七人の長とその上に総指揮をする『トロンズ』総指揮長がいるの。その、指揮長から下った命なの」

「その指揮長つて、『ケルビム』や、『セラフィム』にも有るの？」

「そうよ。その各指揮長がそれぞれの命令を配下の天使達に下すの……」

「膨大な人数がいるんだな」

要はフムフムとだけ頷く。

「ええ。その七人の『トロンズ』に私は、位置するのだけれども……権限は十分にあるわ」

「ボクは？」

「あなたは、私の指示に従う『トロンズ』の一員……でも、私の命で行った事の証明になるの……だから来て欲しかった」

「そう言えば、オレってどう言う身分なの？」

とここで要は問いかけた。

「あなたは……アークエンジェル。天使の階級ヒエラルキーで言う所の『ラファエル』と同じ大天使。しかし……」

突然晶は言葉を濁す。

「しかし？」

その言葉に問い返す要。

「いえ。その内にわかります。あなたの使命については……今はそうだと思うって下さい」

その言葉に、何かを隠していると思った要は言葉を無くした。

「中央部まで、あと三十分もすれば着きます。それまでに、会議で発言出来る全てをまとめておいて下さい！」

そう話を元に戻すと、晶は報告書を取り出して、それに目を通させる。

「書き出せるだけ書き出しておいて下さいね。会議後それを提出しなければなりませんから……」

その報告書を眺める結と要。

「何だかめんどくさいな……口答で喋るだけじゃダメなのか？」

それで良いじゃないか。と、文句を垂れる要。

「そうだよ。突然思った事を言う時はどうするんですか？」

「その時は、メモをおとり下さい」

そうして、めんどくさいと思いつつも、二人は向かい合ってその報告書にペンを走らせた。

「終わったら、私の所に持って来て下さい。判を押さなければなりませんから……」

そう言った晶は、二人の邪魔をせぬようにと席を外し、自らも報告書作成のためにペンを走らせるのであった。

『嫉妬』と、刻まれた扉の前に『ケルベロス』に導かれた鎮は、今その扉を開こうとしていた。

何とか、『レテ』の導き、『サタン』との対話を程よくこなした鎮は、安堵のため息をついた。

「もう残される部屋はここだけです。あなたはここで、生涯過ごさなければなりません……覚悟は出来ておりますか？」

そんな事を問われた。

「はい」

なんて殊勝に答えたが、鎮には『さらさら』そんなつもりはなか

った。

オレは、必ず道を連れ戻す。オレ達がいるべき場所に……

そうして、道が辿ったであろうその回廊に足を踏み入れた。辺りは雷鳴が轟く世界であった。

道の奴、良く我慢してこの回廊を通って行けたよな……

と、雷嫌いの道の事を思い浮かべていた。

行けども行けども、鳴り止む事のない雷鳴。

あいつどっかで気絶でもしてるんじゃないか？

そんな事さえ頭を過った。

今一度、カフスに手を伸ばし、時間を確認する。

残り時間十二時間。

刻む秒数は、天界のものに比べて二秒程遅かった。

ツイている！

と、鎮は思った。

そして翼を使った。少しでも早く目的地に着きたかったからだ。程よくして、扉が見えて来た。

ここを抜けると、道がいる……

と、その扉を開いた。

しかし、その先にあったのは自らの姿であった。

「なんだ？ここは……」

四方、鏡で覆われた世界。それに気付くのに時間が掛った。

痛っ！

鏡にぶつかって、頭を押さえる鎮。

「ようこそ、『カビエル殿』」

鏡の中から声が聞こえて来た。

「誰だ!？」

「私は、この地を治める『シャリート』」

「有り難い。領主様自らのお出ましですか……」

鎮は答えた。

「この地は鏡の迷宮。私がたまたまこの場に居ただけですよ」

「へえ……それは運が良かったと言う事か……それじゃあ、先にこの地に赴いた者の事はもう知っているだろう?」

「そうですね……この迷宮に上手く入る事が適った者であればね」と、『シャリート』は答える。

「それじゃ訊くが、『リヴィアタン』と言う者は知っているか?約一週間前にこの地に入ったはずだ」

冷ややかに問う鎮。

「リヴィアタン?それは、私の事だ」

と、答える。

「何?」

動揺する鎮。

「今、私の中に『リヴィアタン』はいる。それは私の半身であるからだ」

「それじゃ……リヴィアタンは?」

「二度と私の中から出て来る事は出来ない。捜し者がそいつであれば……」

「莫迦な!」

呆然とする鎮。

「そう、ここに『リヴィアタン』の屍が有る。そいつを葬っていた事に気付いて私はここに帰って来た」

「そういうと、足下を指さす『シャリート』。」

「……道……」

「道？その者の事をそう呼ぶあなたは何者だ？」

「瞳孔が開いているその死体はもう肉塊のそれであった。」

「お前……道に何をした！？」

崩れ落ちるかのように跪いた鎮は、背中で息をつきながら、『シャリート』を見上げた。

「ただ、失われた半身の魂を我が身に取り込んだだけだが、それがどうした？」

『シャリート』は平然と答える。

「お前の中に、道の魂が有ると言うのか？……むりやり道の魂を取り込んだのか！？」

仰け反るように、鎮は立ち上がる。

そして、『シャリート』の胸倉を掴んでいた。そうしないと、この激情を何処に持って行けば良いか分からなかったからである。

「今すぐ、道の魂をこの体に戻せ！」

要求する鎮。

「ほう……触れて分かった……そなたが、我が半身、『リヴィアタン』の弟か……それならば、思いの持って行き場に困っている事であるのだろうか？」

「何！？」

もう一度胸倉を大きく揺さぶる鎮。

「そなたの『リヴィアタン』……いや、道は、素直に私の魂に同化したのだ！」

「何を、莫迦な……」

すると、周りに囲まれた鏡から、少年の道の手が伸びて来た事に気がついた。

「……わ……わたる……道？」

そして、鏡の中に引きずり込まれる。

「見ておくが良い。そなた達の嫉妬が生み出す世界を……そして、我が元に跪くのだ！」

『シヤリート』の言葉半ばに鎮は、身体全部を鏡の中に埋もらせていた。

その先には、微笑んでいる少年の道。

その手に導かれるように、鎮はその先に有る鏡の中の世界に身を投じたのであった。

「なんで、まもるは、ボクのおもちゃであそびたがるの？」
道が問いかける。

「だって、わたるおにいちゃんのおもちゃのほぅがいいんだもん」
小さい頃の日常のニコマであった。

「ボクのおもちゃのほぅがいいの？」

「うん」

素置に首を縦に振る鎮。

「おにいちゃんがあそんでるののほぅがいいんだもん」

「じゃあ、それあげる。だったらこれ、ボクがもらうからね……」
と、車の玩具に手をかける、道。

「ダメ！」

「えっ？なんで？それじゃ、ボクがあそぶおもちゃがないじゃないか！」

と、分からないという風に、思いつき叫ぶ道。

「わたるおにいちゃんは、ボクとこれであそぶの！」

つまりは、一緒に遊ぼうと言いたい訳であるらしい。

「わかたよ……それじゃあいっしょにあそぼう！」
と、笑いかける道。

その二人の様子を見守る鎮。

オレはお兄ちゃんっ子だったっけな……

そんな事が思い出された。

そして場面が変わる。

必死で鎮は道を追い掛けているシーン。

「ぜえ、ぜえ……道兄速い!!」

鬼ごっこをしている二人。

この頃、近くに遊び相手となる同じ年頃の子供がいなかったため、二人だけで鬼ごっこをしたものである。しかも、じゃんけんでは、道に勝つためしが無い鎮はいつも鬼になっていた。

鬼になると、どうしても歳の違いで追い付く事が出来なくて、泣きべそをかいていた。

そんな鎮に、しょうがないなと言う顔をして、足を止めてくれる道。

「今度は、道兄が鬼だよ!十数えてから追い掛けるんだよ!!」

そんな感じで毎日を過ごしていた。

そして、また場面は変わる。

小学生に上がった道。

ランドセルを嬉しそうにかかっている。

その横でベソを掻いている鎮。

「これからは、お昼に道兄と遊べなくなっちゃうの?」

と、悲しそうな表情の鎮。

そう言えばこの頃、よく、道のランドセル隠してたよな……

と、学校に行かせないようにするために、そんな事をしていた事を思い出した。

しかしその一年後、自分も、幼稚園に通うようになった。でも、その幼稚園では、ろくに友達もできず、やはり、道の後を追いつけてばかりいた。

そして又場面が変わる。

小学六年生の事だった。

一人の少女が自分宛に手紙をよこしたのだ。

一言、『好きです。付き合ってください』とだけ書いてあった。

この頃の鎮は寡黙で、真面目な印象。その上、そこそこの頭も良く、スポーツ万能。容姿だってそこら辺にいる小学生に比べて劣らない。そんな鎮に憧れる女の子がいても不思議ではなかった。

しかしそんな事、おくびにも見せないでいた鎮。

それがやけにウケていたのである。

中学生になった鎮は、バスケット部に入った。

そして、今まで以上に、人気が出ていたのである。

練習試合だつて言うのに、観戦しにやって来る女の子は皆、鎮を見に来ていた。

でも、鎮はそんな事知らない風に、練習に励んでいた。

毎朝、開ける靴箱は手紙で溢れる。しかし一切その手紙に興味がなかった。

逆にそれが好評で、『硬派の鎮』として定評があったのである。

しかし、そんな鎮にも弱点があった。それが、道であったのだ。

過ぎ去って行く時の流れ。次々と場面が変わって行く。

「明後日の文化祭、模擬店やるんだ……お好み焼き屋！是非来てくれよな！」

家に戻った鎮は、道の部屋に駆け込むと、そう言った。

「へえ……だつたら、食べに行くよ。一年B組だつたよな？お前の

クラス」

「そうだよ、道兄が来るの待ってるから！」

そう言うと、ベッドに腰を掛けて鎮が尋ねる。

「道兄のクラスは何するの？」

「オレか？」

勉強机に腰掛けて、早くも受験勉強をしている道。

「オレのクラスは……」

と言いかけたが、突然黙る。

「何？」

と、無邪気にその言葉を待っている、鎮。

「……何だって良いじゃんか！当日くれば分かるよ！」

と、突然勉強の邪魔だとも言うかのように、言葉を切る。

「……分かったよ。それじゃ、当日行くから。えっと、三年C組だったよな……？昼は混んできると思うから、朝か、夕方にも行くよ！」

そう言い残すと、鎮は部屋を出て行った。

しかし、これが後の祭りになるとは思ってもよらなかったのである。

そつだ、あの時ちゃんと聞いていれば……

と、記憶の中で鎮は思い返していた。

当日、鎮のクラスの模擬店は、繁盛していた。

鎮目当てにやって来る学校中の女の子で、賑わっていたからだ。

「結城！お前のおかげで、大繁盛じゃん！」

と、クラスの男達が声をかける。

「オレ、疲れた。奥の方手伝っても良いか？歩きっぱなしで足がもう棒のよう……」

と、ウキウキとしているそいつに言う。

「だめ、だめ！お前は外！」

言い切られてしまった。

仕方なく、ホールの方でお客さんを持って成している。この分だと、

道が何時やってくるか分からない……それに、何時動けば良いかさえも。

そこで、夕方まで待ってみようと思った。

「おいっ、三時になったら、休憩取るからな！絶対！」

と、奥に控えたクラスメイトに一方的に言う。それを渋々と受けるクラスメイト。今は二時、後一時間もすれば、道のクラスに行く。

そう思うと、一頑張り出来た。そして、刻限が来たのである。

「オレ抜けるからな！」

そう言うのと、身に付けていたエプロンはずし、一目散で道のクラスへと向かった。

三年生は、別館であった。渡り廊下を走って駆け抜ける。訪れているお客達をよそにして……

そして、クラスの前に来たのである。

その前には人ばかりで一杯であった。教室の窓にはり紙があった。それを何と無し気に読む鎮。

『美人コンテスト？』

へえ……こんなのやってるんだ

と、初めて知った。

そして中を覗き込む。

暗くなっている教室内。そこで、今それが決まったと言う発表があった。

「一位！結城さん前へ……」

「結城？」

自分と全く同じの名字に不思議と目を奪われた。遠目で見ているから『ハッキリ』とは分からなかった。が、それが道である事に驚きを隠せなかったのである。

何なんだ、これ！

「さて、結城さん女装部門ナンバーワンに輝いた感想は？」

という言葉に、

「女装？」

と、言葉が漏れた。

隠していたのはこの事だったのか。と悟った鎮は笑いを押し込めていた。しかし、次の瞬間、その笑いが冷めたものになった。

花束贈呈に、なぜか、光一の姿があつたからである。

『パチパチ』と拍手の乱れる中、鎮は呆然とした。

なんでここに、光一がいるんだ！？

今でもその光景が脳裏に蘇る。

そう言えば、一度も、道は自分のクラスに寄ってこなかった。何故来なかったのか？そう考えるが答えは出ない。

程なく、その授賞式が終わった時、道と光一が教室から出て来た。

「道兄！」

と、呼びかける鎮。

その呼び掛けに、一瞬身を凍らせるかのように立ち止まる道。

「オレに話さなかったのは分かったよ。でもなんで、光一には話していたんだ！」

詰め寄る。振りかえる道。その姿は、驚く程美しかった。

「やあ、鎮！？これには事情があつて……」

と、光一が話し掛けようとするのを制するかのように、

「オレは、道兄に訊いてるんだ！他人は黙っていてもらおうか！」

「何を……！？」

「良いんだ……光一……済まなかったな、模擬店に行けなくて……この格好で学校中歩き回らなきゃいけないかったんだ」

「学校中？」

「已む得なく、投票してもらったために、顔見せ程度だけど……」

「だったら、オレのクラスにも顔出せたたる」

「……そうだな」

「そんなに嫌だったのか？オレにその姿見られるの……」

「……そう言う訳じゃ……」

押し黙る道。

「……お前には判らないよ……」

そして、その言葉が出て来た。

「判らないって何が!？」

二人の沈黙は続く。

「鎮……少しは道さんの気持ちも考えてあげたら……」

「お前は黙ってる!」

「光ーごめん……オレこの化粧落として来る……」

そう言うのと、道は『パタパタ』と、廊下を走って、トイレに駆け込んで行った。

その後ろ盗を黙って見ている鎮と光一。

「何だつて、オレとの約束をすっぱかしてこんな事やってるんだよ

……」

咳く鎮。それを、光一は、

「お前！少しは、考えてやれよ！自分の事ばかり……オレ、見損な
ったぜ！」

と言うと、道の後を追う。

ただ独り取り残された鎮は、ただその場に立ち尽くしていた。

「こんなものを見せるんじゃないやねえよ!!」
と、鎮は叫んだ。

「でも本当の事だよ！君はこんな風にして道に、光一に嫉妬したん

だ……何故自分が仲間外れにあつたのか？その事が判らずに……」

少年の道は何時の間にか、自分の姿をしていた。

「ああ、オレは嫉妬したさ……光一に！」

「いいや、道にも……」

と、自分の姿が唱える。

「道に嫉妬なんかしていない！」

「そんなはずはないだろう？」

と、腕組みをするもう一人の自分。

「正確に言えば……何も言い訳をしてくれない、道にだ！」

「……」

「本当は、鎮のクラスに行きたかった。とても言つて欲しかったんだらう？」

「……」

「そして、モテる鎮を見たくはなかったと、言い訳して欲しかったんだらう？」

「よせ！それ以上言うな！」

鎮は眉間に皺を寄せて、頭を抱えた。

「何故道は、お前には分からない！つて言ったと思う？鎮のことが好きだからに決まってるからさ！」

「黙れ！」

傲慢にも自分はそんな事を望んでいたかと思うと吐き気がして来た。

「オレは、道を追い込むために、愛してると言った……きっと、道は反発してくれると思つた……こんな不毛な事があつてたまるもんか！」

と、肩で息をしながら鎮は言い捨てる。

「でも、オレ達は愛しあつた……それは違つたのか？」

「黙れ！お前なんか消えて無くなつてしまえ！」

叫ぶ鎮。

そして、思い出す快樂。

道もこんな風に、過去を見たのか？

心臓が『バクバク』と音を響かせている。

そして自らの魂をあの方に委ねたと言うのか？

ならば全て、鎮に責任が有る。

「道兄！出てこい！オレが苦しめたんであれば……もうその苦しみを解き放つてくれ！……オレは確かに道兄を愛してる……でもそれが嫌なんだったら、二度とそんな事は言わない！だから、自分に負けないでくれ！」

すると、もう一人の自分が、道の姿に変わったのである。

「鎮……」

「道兄……」

二人は初めて心にゆとりを持って、対峙していた。

「道兄が弱い人間だって事はオレがよく知ってる。それは、弟である特権だ！」

「鎮……？」

「道兄が、どんなに苦しんでいたか、どんなにオレを愛していられたか……もう十分に判った。だから、もう一度本来の自分の魂を信じてくれ！」

「ありがとう……鎮。でも今だから言える事がある。あの時、お前のクラスに行きたくはなかった。それは、オレの嫉妬がそうさせたんだ……お前にはそれを信じて欲しい」

「道兄……」

「こんな感情を持ったまま、天界にはいけない……だから……」

「それは間違っている！オレ達は人間だ、今は天使かもしれない……」

…でもそれは、あつて然るべきものだ。オレは思ってる！だから、オレと供に天界へ、地球へ戻るんだ！」

「……鎮」

その瞬間、この暗闇にまばゆい光が灯った。それは神々しくも渦を巻いていた。

暫くすると呻き声が聴こえてきた。

『うおー！』

その声と供に元の鏡張りの地に戻されていた。

地面に横たわっている二人。そして、うめき声を上げている『シヤリート』。

目覚めた鎮は、カフスを取り外す。あと、二分で七日になるのを確認した。

すると、今までピクリとも動かなかった、道の瞳孔が元に戻ったのである。

このチャンスを逃さない手はなかった。

直ぐさまカフスのボタンを押す。

そして、道の身体を抱き寄せた。

その中、『シヤリート』のうめき声は続いていた。

「『ウリエル』……早く！」

時は一刻を争っていた。

リーダーに気付いた『ウリエル』は、その地点を見詰めるより先に、後、一分もないこの時刻に目を光らせていた。

「我、この地から呼び戻す。我の支配に有るカフスを持つ者よ！今一度この地に戻りたまえ！」

『ウリエル』のその両手から放たれる光は、神々しい光の渦となつて二人の像を描き出した。そして暫くすると、そこには鎮に抱きかえられた道の姿が浮き上がったのである。

「ただいま」

と、鎮は、『ウリエル』に声を掛けた。

「寿命が縮まる思いでしたよ。『ケルビム』殿！」

と駆け寄る『ウリエル』。

そして、抱きかかえられた道の為にベッドを用意するように近衛兵に連絡した。

「この『セラフィム』殿の衰弱の仕方、並々ならないですね……よほどの危険があつたのですか？」

「ああ、魂を抜かれていた……」

「何ということ……しかし、良く取り戻せましたね……時間も少なかったのに！」

「あつちの世界の時間の流れが、ここよりも遅かつたおかげだな……」

「そうですか……しかし、この天界は一体どうしたんでしょう」

「さてな？……ところで、中央部に行かなきゃならないんだっけ？」

と、話を戻す。

「ええ、そうして頂ければ、『トロンズ』長も助かるはずですよ。ところで魔界での歪みの場所は特定できたのですか？」

「いや……それをする暇はなかった。申し訳ない事です『ウリエル』殿……」

「いえ……ここまで漕ぎ着けたのです。一つ欠けたくらい、なんともない事でしょう……それに、全て消してしまうには、何だか問題も有るかも知れませんか」

そう言うと、『ウリエル』は言葉を濁した。

「……」

「それでは、『セラフィム』殿の事は私どもに任せて、中央部に行つて下さい。ただ今船を用意致しますので！」

そう言うと、『ウリエル』はリーダーの前から立ち去った。

「よう！『ケルビム』殿」

片手を振り上げながら光一が部屋に入って来た。

「光一……いや、『ラファエル』!？」

と、驚く鎮。

「どう? 仲直りは出来たかい？」

「……どうしてそれを？」

「今、さっき『セラフィム』を運んだ担架を見かけたからな……
ピンツ』と来ただけだ」

と、人さし指を立てて語る。

「『ラファエル』には、なんて言っただけか……」

と、俯く鎮。

「何。気にする事はないさ……でもちよつと妬けるけどな？」

と、腕組みをする。

「えっ？」

「こつちのこと……じゃ、お前の使命、ちゃんと果たせよ! 『セラ
フィム』の事はオレに任せておけば良い! 必ず癒^{いや}してみせるさ……」
そう言い残すと、その場を去る光一。

「光一……」

何が言いたいのか少しだけ判った。でもそれはどうする事も出来
ない。

「ありがとう……」

と言う言葉が自然と漏れた。

船の準備は滞る事なく行われた。

そして、鎮を乗せた船が出立するのは夜更けの事であった。

15 A CONFERENCE

A CONFERENCE

晶達が中央部に着いたのは真昼であった。

着いた早々晶は、会議の申し出を、『トロンズ』指揮長に預け、暫くの間中央部の自分の部屋に身を置いた。

それから、夕方になった頃、会議の申し出の許可を得る。しかし、緊急とあつては、今すぐ取り持ちたいのだが、何分すぐに集められる事はできないとの判断が下ったそうだ……明日の朝、八時に、決行する事になった。それで良いな？」

晶の部屋のモニターに指揮長の姿が映っている。

「已むを得えません……ありがとうございます」と、晶が言うとモニターが切れた。

「晶ちゃん……」

落ち込んでいる晶に、結が声をかける。

「仕方がない事です……確かに緊急であろうと、者が集まらない事には話がつきませんから……」

「オレ達、気にしてないぜ！成るようにしなければならないさ……それに、晶ちゃんに全てを委ねてるんだ。信じてるよ！」

と、要は盛り立てようとする。

「ごめんなさいね。一分でも早く貴方達を地球に返してあげたいのですが……でも、心配しないで。確実に私が貴方達を生き還らせてあげます！」

晶は、自分の部屋の玉座で決心を改めた。

「今日は、何もする気がしないわ……各自部屋を用意させて頂きました。そこで一時の休息を取って下さい。明日は荒れた会議になる事でしょうから……」

そういうと、近衛兵が要と結を各部屋に案内するように取りはか

らった。

「それじゃ……又、明日」

二人は静かにこの場を離れた。

しかし、晶は眠れない夜を過ごしていた。こんな夜更け前に、『ウリエル』から連絡が入ったのである。

「夜分済みません……明日の朝、『ケルビム』殿が、そちらに到着する事でしょう。それと、最後の一人『セラフイム』殿が帰還されました。が衰弱が激しいため、こちらで『ラファエル』殿の元で、身柄を預らせて頂いております。もし回復されたら、そちらに向かうようにと事付けましょう」

「そうですか……無事に帰還できたのですね。良かった……承知致しました、『ケルビム』殿。『セラフイム』殿の件は確かに聞き届けました」

「そちらは如何です？会議の方は……」

少し語尾が弱い『ウリエル』。

「今日の所は遅くなったため、明日決行する事になりました。さすがに緊急会議は無理だとの判断です……ところで、『ウリエル』殿……先に伝えなければならぬ事。二度の件、会議の中で発言しなければなりません。それが気掛かりです。お許し下さいますでしょうか……？」

モニター前で晶は、その事に関して『ウリエル』を巻き込んでしまう事を気に掛けていた。

「『トロンズ』長。その事は、もとより承知しておりますよ。そうでなければ、貴方に力を貸す事など有るはずがないではありませんか？」

『ウリエル』は優しく微笑んでいた。

「そんな私の事を気に掛けるより、明日の会議の事を心配して下さい。今回の件で得た情報。それをいかに、他の者達に伝えられるか……それが、全ての鍵なのですよ！？」

「ええ……分かってるわ。罪を被っても確かな情報を伝えます。もう、後戻りは出来ないのですから……全ては、この天界のためを思っている事。その事だけを念頭に置いておきます。色々ありがとうございます……」

頭をモニター越しで下げる晶。

「礼には及びません。正しい事をしたと私自身、誇りに思っています。それでは……」

と、一礼をする『ウリエル』の姿を後にしモニターは切れた。

『ウリエル』……

その心遣いを思い晶はモニター前でうつ伏した。そんな夜、ついに晶は眠る事が出来なかつたのである。

「『ケルビム』殿、間に合って良かったですわ」と、晶が語りかけた。

「正直、もう会議は終わったものと思っていました。間に合って本当に良かったです」

明け方、晶の部屋に鎮は訪れていた。

「これで、『ケルビム』の七人の内の一人の長に有効な発言を求められます」

晶は一礼をしていた。

「本当だったら、『セラフィム』も連れて来れるはずでしたが……」と、問いかけた。

「知っています。『セラフィム』殿の事は『ウリエル』殿にお聞きしました。休養を取って頂かなければ、こちらが気になります」

そんな折、

「あっ、鎮兄！」

と、言う元気な要の聴こえて来た。

「おっ、久し振りだな？」

と、久方ぶりの兄弟の再会。

「道兄は？」

「ああ、ちよつと体調が悪いから、此処に来れなかった」

「えっ？体調が！？」

「まあ、すぐに良くなるから心配はいらない。それより、今日の会議、ちゃんとののはしほれているか？」

と、話をはぐらかす鎮。

「もちろん。報告書にはちゃんと記入済みだよ！」

と、子供扱いする鎮に少し不機嫌な要。顔に出やすいタイプであった。

「後、一時間もすれば、会議場に向かいます。準備は良いですね？」

晶はそんな二人を微笑ましく見詰めながら問う。

「もちろん！」

要の元気な声が部屋中に響き渡った。

「それでは、『トロンス』の長よ。発言を御願ひ致します」

『トロンス』の指揮官が、この場を取り持つかのように会議は始まった。

辺りは、薄暗いホール。

そのホールにスポットライトのような光が晶の元に落ちた。

「今回会議を持ちましたの言うまでも有りません。此度の、天界を襲っている地震と歪み事についてです」

その台詞に、辺りがざわめく。

「数千年前の聖戦からこちら、一度もなかったこの事態、奇異な事ばかりです……しかも実際、地球の時の流れが今までのこの天界のそれと、異なつて来てもいるという事態も発覚しました」

瞬く間に、辺りは騒然とした。

「それは本当なのですか？『トロンス』長？」

と、一人の『ケルビム』長が発言した。

「本当です。しかもそれだけではありません……魔界の時の流れに

も、異変が起きているのです」

「何故そんな事が分かる！？誰一人としてその地を訪れた者などいないはずだ！」

『セラフイム』の長の発言。

「それは、罪だとは判っていました。しかし、歪み探索の命を持って、私達は、西の地『白虎』を守る『ウリエル』殿に頼み、魔界へと足を運んだのです。その時に発覚したのがこの事です……」

「なんだと？誠か！？それが真であるならば、裁かれなければならぬぞ！」

と、『トロンズ』の総指揮官がそんな話は聞いていないという風に立ち上がった。

「申し訳ございません……これは私の単独行動です……しかし、今一度、この天界を思つての行動だと信じて頂きたい！」

と、片手を胸に持つて行気話を押し進める昴。

「ここに来て私の指示で動いた者達の発言を、お聞き下さい。そしてこの会議の主旨を御考え頂きたい！」

すると、後方より、スポットライトを浴びるかのように『ケルビム』が現れた。

「お聞きの通り『ケルビム』の七天使長であるオレは魔界に行つて来た。そして魔界の総帥『サタン』に会い見えた」

「『サタン』に？」

ざわめく者達の声で、鎮は暫しそれが止むのを待った。

「その『サタン』は、七つの歪みを魔界人に守らせていたのは事実だった。しかし、それは、我々天界人を仇なすために作られた物では無さそうだった。既に老い衰え、神の意向が何なのかを知りたいがため、その歪みを確保しているようであった。そして何度も、神に連絡を付けているとそう言っていた」

「『サタン』が何故、神の意志を？」

と、『ケルビム』指揮官がそう問い返した。

「それは、魔界にも訪れている異変のためだった。そしてビッグバ

ンの勢いに押しつぶされるといふ奇異な問題であった」

「魔界に異変？そんな話はこの天界に届いてはおらぬぞ？」

『ケルビム』総指揮官は問う。

「それはおかしい……誰かがそのやり取りをしているはずだ……魔界の総帥『サタン』にも判らない異変を、誰かが握りつぶしたと思えない！」

ざわめくホール内。

「魔界と交信が出来る指揮は誰がとっているのでしょうか？」

今度は結がそのスポットライトを浴びて立ち上がった。

「それは、監査室第二監査使長の私です」

と、その者が立ち上がった。

「通信があつたはずです……覚えはないのですか？」

その言葉に、

「いいえ有りません……ただ、おかしな通信はありました。それは確かに魔界からのものでした」

「何故報告を怠つたのです？」

「それが……通信に全て乱れが有り、悪戯であると思つたからです。一同がなんと云う事だと声を上げた。

「今すぐ、魔界と連絡をとれ！」

『トロンズ』指揮官がその監査室第二監査使長に通達した。

「はっ。了解いたしました！」

「この件に関しては、連絡を待つしかありません……取りあえず話を進めて下さい」

『トロンズ』指揮官が結に依頼した。

「はい。それでは、次の議題に入ります」

と、結は一步前に踏み出した。

「ボクも、魔界に降りた一人ですが、歪みを見付け、『ウリエル』殿に報告致しました。そして、速やかにその歪みは潰されました。しかし、日ごとに天変地異。地震は酷くなっています。それは何故に起こるのでしょうか？これが、サタンの企みであるならば、逆で

なければなりません。つまり、この世界自身の崩壊を意図するのではないだろうかと言ふ疑問に触れたのです」

そこで、要が席を立ち上がった。

すると、スボットライトが要の上に落ちて来た。

「あれは誰だ？」

という人々の声。

「オレは、ルシフェル。今の議題を取り上げている者達と一緒に魔界に降りたアークエンジェル。身分違いだとは思ったが、敢えてこの列に参加させてもらった」

すると、誰もが言葉を返して来た。

「不吉な……」

「『サタン』の名前と同じ者だ……」

「信じられるのか？」

辺りが騒然としていた。しかし要は、そんな事に気を取られる事なく、話を進める。

「オレは思った。この世界の『創造神』は、本当はこの世界を壊すつもりではないのか？と。それは、創造神が一言も助言をくれない所から来るものだ。自分で創った世界にピリオドを打とうとしているのではないのか？そうでなければ、神の声が聞こえてこなければ変だ！しかし、その声は無い。そうですよね？」

と、『トロンズ』指揮官に視線を送った。

「今言った者の言う通り、神の声は有りません。しかしそれは今始まった事では無い……神がいらっしやるはずの玉座は、千年前の『聖戦』以来ずっと空なのです」

辺りはざわめきの嵐。

「では、確認しましょう。今一度、神の御言葉を戴きに行くのです。そして、真偽の程を訊くのです！」

要は言い終わると、席に着くために下がった。

中央に集まった、『トロンズ』『ケルビム』『セラフィム』の、総指揮官達三人。何やらもめているらしかった。

そこに、先程の議題に上った監査室第二監査使長が駆け込んで来た。

そして話は決まったようである。

程なくして、『トロンズ』総指揮官がスポットライトを浴びて立ち上がった。

「分かりました。では、お祈りをしに行く事を許可します。ただし、無礼な行為はしないで頂きましょうか？」

議題の決定に静まるホール。

そして、晶達一行は、『神の玉座』へ行く許可証を手に入れたのであった。

世界樹を上り始めた先、その、『神の玉座』へと足を運ぶのには骨を折る思いであった。

どうやらここだけは、天使の羽も使えない領域であるらしい。しかも、近代的な仕組みも施されていない。

本当に毎日誰かしら『神の玉座』に訪れているとは思えなかった。石は風化されている箇所がいくつも有る。

だんだんと細くなって行く階段。下を見るとその高さを目眩がして来る。

一行は、気が遠くなる程の気持ちを押さえて一段一段上って行った。

「一体何処まで続くんか。この階段は……」

一番初めに、要は息を切らしながら問う。

「夕方に着けば良いくらい高い所に有るんじゃない？
とは、結。

その言葉に『ゲツ』と嫌そうな顔を見せる要。

「少しは我慢しろ！果て無い道と言う訳じゃ無いんだ！」

根性が足りないぞ！と言いた気に鎮は後に続いている要を一瞥した。

「へーい。判ってるよ。もうっ！」

しかし、こう何処までも続かれると、変な気分になって来る。それでもペースを保ちつつ足を動かした。

そして夕刻になると、やっと、その頂上を頂く門が目の前に見えて来たのである。

「第一の扉を開くわよ！」

「第一の扉？」

「そう。ここには、七つの扉が有るの。七つ目のその奥に、『神の玉座』は有るの」

「うへーっ…まだ歩くのか？」

「そう大した距離は無いから、頑張りなさい！」

晶は呆れ果てながらそう言い残すと、大理石で出来たその扉を開く。

中に入る四人。進んで行く度にだんだん小さくなる扉。最後の禁断の七つ目は、腰を曲げて入るくらいの大きさにまでなった。

「これが玉座？」

初めて入ったその部屋は、神どころか、虫一匹いなかった。

「果てしなく広がる床に、たった一つの椅子……そして、空」

今や二つ目の太陽が沈みかけようとしていた。

「やはり神はいらっしやらない？」

晶はため息を漏らした。

「おーい神よー！出てこい！」

不躰にも要は叫んだ。

しかし、誰一人としてこの場に現れなかった。

「こうして初めてこの目で見たけど、噂は本当だったのね？」

「どうしよう？晶ちゃん……このままだと、夜になっちゃっ……」

弱腰で結が晶に両いかける。

時間は三十四時を指し示していた。

「已むを得ないわ……祈りましょう」

そう言うと、玉座の前に跪く晶。

それに習い、要、結、鎮は文句も言わず跪く。

それからどれだけ経ったのであろうか？時間さえ忘れて熱心に祈っていた。すでに日は沈み、

二つに重なった月が東の空から昇ろうとしていた。しかし、そんな事にも気付かずに四人は跪いていた。

静かであった。何も聴こえてこない。だんだんと、その静けさが心地よくなって来た。

しかし、跪いた足が痺れて来る。

でも誰一人声をあげる事は無かった。

あの要でさえも……

静かに時は流れて行った。

そして、月が天空に辿り着いた時、一筋の光が玉座に降りて来たのである。

『よくぞ参られた、我が愛し子達よ』

その声は、ゆつたりとした、凜とした声であった。

途端、面をあげる四人。

光の粒子で固められたその姿は、流動しながら揺らめいていた。

「貴方が、『創造神』ですか？」

と、そのまばゆい光に問いかける晶。

『そう、我こそはこの世界の『創造主』だ』

「では問いたい！今、この天界。そして魔界をも揺るがす異変。これは貴方が起こされている事なのですか？」

と、鎮は両手を広げて問いかける。

『いかにも。我が意志で起こしている事である』

「それは、何故です？」

結が問いかける。

『この世は乱れた。そのため、我が手で壊そうと思った』

「乱れた？」

「要が問う。」

『創造主の事をも忘れ、したい放題……あまつさえ、自分の手で考える事を忘れてしまった者達に制裁を加えなければならぬ』

「制裁……」

「『マザーコンピューター』などと言う物に全ての管理を任せているとは……天界も堕ちたものよ。確かに、上手く管理は出来ているようだが……そんな甘いことでは、その内何もかもが墮落してしまうのでは無いか？」

「お言葉ですが……あれを作るように命じたのは、他ならない、貴方様ではございませんか？」

「晶が問いかける。」

『いや？……作る事を認めたに過ぎない』

「認めた？」

『そうだ、我が命じたのでは無い。認めたのだ……いつでもそうだ……我の意志を伝える時は無い。意志とは己の中で起こすもの……私はそれを認めるに過ぎないのだ。何か間違っているか？』

「それでは、お訊きします。『創造神』とは、如何なる事をなされているのか？」

「鎮は問いかけた。」

『我が使命は、万衆の意志の道先案内だ』

「しかし、此度の事はどう説明するのです？貴方自身の意志なのでしょう？」

「結が問う。」

「そう。それが、この世界を創った者の責任だと言う意志が働いたからだ』

「では問います！この世界を救う手段は、あるのですか？」

「要が問う。」

『この世界を救う手段？……『創造主』である我が意志が、それを無効に。と思う意志に変われば、救う事も可能である』

「では、可能性が有ると言う事ですか？」

晶は問う。

『その答えを導き出せるのであればな……』

「オレ達の意志を一つにし、この世界を救う事を考えます。オレ達は生きたいんだ！」

『生きたい……？』

「そうです。生きてもっと楽しい事、辛い事を経験したい！」

結が言う。

「しかし、多くの魂は、死を望んで天界を蠢いている……我が目にはそう映っているが？」

「そんな事は無い！みんな必死なんだ！ただ選ぶ道を間違えるから死を選んだりする。殺しあう！だけどそれは……いろんな思いがあつてそこにあんたが言っている意志と言うものが働きかけて、そう言う者が出る！ただそれだけだ！」

要は神の御前で有るのも忘れ叫ぶ。

「思い……使徒や、人は、その思いが無くては生きられないのか？そんなふうには私はこの世界を創つたのか？」

「そうだ……あんたは、そんな事にも気付かないでいたのか？頂点に立っているからつてなめるんじゃないぞ！」

要はだんだん腹が立って来ていた。

『お主、どこかで見た事が有るな……名は何と言う？』

突然『創造神』から質問を浴びせられ、

「オレは、『ルシフェル』。この天界の名前でいうならな！」

「要、言葉を慎みなさい！」

流星に、晶はそんな要に言葉を浴びせた。

『よい。威勢が良いのは良い事だ。『ルシフェル』と言ったか？』
「そうだ」

『千年前の事を思い出す……『サタン』となった天使。我が意志を裏切り、天界から墮天した使徒も、『ルシフェル』と言ったかな？その世継ぎか？』

「えっ？」

その言葉に驚く要。

「『サタン』も、此度の件で、我に連絡しようともがいていたな……しかし、我が意志は許す事が出来なかった……あの『聖戦』でどれだけの被害があつたかなど、とうの昔の事のように忘れておつたからな……こんな時にだけ、我を頼ろうとは、虫が良すぎるという言葉のだ！」

と言い切る『創進神』。

「ちよつと待つた。オレが、『サタン』の世継ぎと言つのはどう言う事だ！」

と、詰め掛けるように立ち上がった要。

「自分の使命を忘れたのか？名前は引き継がれて行くのだ。お前はその内『サタン』になる……」

「莫迦な！オレは、地球に戻つて結城要として生きる！魔界など行かない！『サタン』そんな事知つたこつちやない！」

「ほう？それがお前の意志か？それも良からう……使命は果たせないが、本当にそれで良いのか？魔界の帝王になれるのだぞ？」

その問いかけに、

「オレは、結城要だ！それに、魔界に興味も無い！」

『ふむ……面白い。天使としての自覚が無い者がいるとはな』

「それを言うなら、ここにもいるぞ！」

と、鎮が言う。

「ここにも！」

結が言う

「私もその類に入るかも知れませんか？」

晶も言う。

『不届きものばかりと言つ訳か……それもお前達の意志であると考えに入れても良いのだな？』

「もちろんだ！誰の指図も受けない！」

要は頷いた。

『ふははははは……神をも恐れないその態度、大変気に入った。もし、お前達が、この話をただの使命として終わらせようとしたのであれば、このまま我が意志は、亡びの道を綴ったであろう……しかし、そう言う訳ではなかった……思い留まろう。我が世界にピリオドを打つ事はこれにて止めよう』

と、『創造神』は語った。

『想いか……よく分かった。一度じっくりと人界を観察してみるとしようか。楽しかった。それでは時が来た。また会う時があったらその時に会おう！』

そう言った『創造神』は、光の螺旋を描き、天上へと還って行った。後に残された昌達は、その有様をいつまでも眺めていたのである。

#16A STARTING POINT

A STARTING POINT

「こうして、私達は『創造神』と対話をする事が出来ました」
会議は翌朝開かれた。

休む間もなくその会議に出席した晶達は、疲労困憊していたものの、そうは見せないでいた。

「では、神はこの世界を救ってくれたのか？良かった……」

何もしなかった、者共がざわめき始めた。

「これからは、もっと自分の意志を持つようにとおっしゃってました。つまり今の私達に欠けている物を取り戻す事が重要なのです」
そう言った話し合いがもたれた。

正確に伝えられたであろうか？それはこの先の私達の行動によって実証される事であろう。

そして、無事会議は幕を閉じたのである。

「長い間、本当にごめんなさいね……」

晶が、要達には礼を言う。

「でも良かった！……一時はどうなる事かと思っただよ？地震もおさまったようだし」

と、結が語る。

「それに、要の言葉！『創造神』に向かってタメ言葉だもん。ヒヤヒヤした！」

「そんなに、凄かったのか？要……」

と、道が問う。

「それはもう……冷や汗が出るってもんだわ」

鎮が、要の頭を揺すぶりながら答える。

「私もその場に行きたかったなあ」

とは水。

「水には使命があったでしょう？」

と、四季が、水の肩に手をかけて宥めていた。

「まあ、でも無事終わって良かったよ」

と、光一が、腰に手をやりやれやれと言った感じで答える。

今ここに、八人が揃った。

その様子を、『ウリエル』が眺めていた。

「それじゃ、そろそろお別れね……地球に還ったら、この記憶は無くなるけど、どこかで感じていて欲しいの……決して無駄な事じゃ無かったのだと言う事を」

晶は、胸の前で手を組み、別れを惜しんでいた。

「忘れないよ！きつと憶えてる！」

拳を握りなおし、要が自慢げに語る。

「ボクも」

「私も！」

それぞれが、口々に晶に向かって言付ける。忘れたくなど無い。

「本当は、『マザーコンピューター』を廃止にしたかったのだけれど……そうすると、今までの秩序が壊れてしまう可能性が出て来るの……だから、『玄武』『青龍』の地を守る二人にはこれまでと同様に地球に還ってもらいます。お世話になりました」

と、四季と光一の手を取り握手をかわす晶。

「また、何かあったら呼んで下さい」

と、四季が一言残す。

「いつでも構わないぜ！あっ、出来れば夜中にしていただけると助かるんだけど？」

とは光一の言葉。

「まあ……」

と、晶が微笑ましく呆れていた。

「それじゃあ魂を地球に返すわね？」

それぞれの、棺には既に眠っている『トロンズ』、『ルシフェル』

『ミズチ』 『ケルビム』 『セラフィム』 『ラファエル』 『ガブリエル』の屍体。

全てはここから始まった。

それはまた目覚める事があるのであるのか？それは今は分からない。ずっと先の事。

「元気で！」

その晶の腕からシャボン玉のように煌く光が七人を取り巻く。そして、やがて消え去った。

「これで良かったんですよね？ 『トロンズ』長？」

と、後ろから肩に手をかける『ウリエル』。

「ええ、これで良かったんですよ」

二人は消えて行ったその先をいつまでも見守っていた。

「要！」

と、母の声を耳元で聞いた。

「オレ、どうしたんだ？」

見なれない、白い天井が目に入って来た。

「もう……どうしたの？ じゃないわ……どれだけ心配したか……」

すると、涙目の母が要の視界に入って来た。

「突然、舞台から落ちるや、息をしていないんだもの。心配かけただけじゃ済まないわよ！？」

「舞台？ ああ……ロミオとジュリエットの劇か……」

だんだん思い出して来た記憶。

「宮下の水ちゃんも同じに倒れ込んだのよ。あなた達一体どうしたって言うの？」

と、隣を見る。

すると、そのベッドには水が横になってこっちを見て笑っていた。「水ちゃんもさっき目を醒ましたの。もうダメか？ と言われてたんだけど、よく還って来てくれたわ……」

と、ハンカチで目もとを拭っている。

「光に包まれたんだ……夢なのかな……」

「えっ？」

「凄く長い夢を見たんだよ、母さん！」

でもどんな夢だったのかは忘れた。そして、何時の間にか頬を涙が伝っていた。

「あれっ？何だろう……どうしてかな？涙が出る……」

それは次から次に溢れ出して来る。

「こんな事、今までなかったのに……」

晶が死んだ時だって、涙を流した事は無かった。どんなに辛くたって、一度も流した事など無かった。

「何だか思い出さなきゃいけない事が有るような気がするのに……思い出せない」

込み上げて来る思い。

涙で滲んだ視界で隣の水をもう一度見た。

同じように涙をこぼしている。

「母さん、オレ……」

言葉に詰まった。

「もう良いのよ。ゆっくりお休みなさい……」

そういうと、額に手が寄せられた。

「うっ……」

また込み上げて来る涙。

母の掌は水仕事で『カサカサ』に荒れていた。

これがオレの母さん……

そう思うと、止めど無く流れて来る涙を、押さえる事は出来なかった。

生きて還る……

それがどんなに大切な事か、骨身にしみた。そんな一コマがここにあった。

この日、要達三人は、それぞれ同じ病院に運ばれていた。そして、一時間の間止まっていた心臓が再び動き始めたのである。

もともと痛弱だった晶の身を案じた晶の母は、要と水二人とは別の個室を用意してもらっていた。しかし、目覚める事が出来た。

その事をたいそう喜んだと言う。奇跡が、二度起きたのだから。

そして鎮は、練習試合の最中、突然倒れたと言う事で、要とは違う病院で治療しているとの事であった。今は父が、付き添っているとのことだ。

道は、たまたま家で寝ていたため、この事に気付かれる事は無かった。

しかし後で聞いた話だが、突然苦しくなったと言っていた。

一番大変だったのは、宮下家の人たちであった。

長男の光一は、道を歩いている際に突然倒れて、死んでいるとみなされ、警察に通報された。

長女の四季は、神社の片づけをしている際に倒れたとの事で、父親に運ばれて即刻病院へ。

しかし、こつも同じ症状で、原因不明の病気に掛ったのである。

この事件は、要達一族の間で密やかに後々まで語り継がれたこととなる。

「水！倒れていた時の事、憶えてるか？」

二日の安静を取ってから、学校に出て来た水に話し掛ける。

「うっん…それが、思い出せないんだ」

そう言っている水は、悲しい事があつたかのような雰囲気であつた。

「実はオレも…思い出せない。まるで、晶ちゃんの事と関係があつ

たんじやないかって……そう思ったんだけど」

と言葉を濁す。記憶は、晶が死んでしまったと言うその前が無い。つまり、結と言う存在を忘れてしまっていた。

「もしそうなら、きっと忘れてはならない事ね？」

と、水は言う。

「こんな想い、どうしようもないな……」

「でも、想い出そうとする意志が有ればそれも適うんじゃないかしらっ。」

そんな会話をしていた。

そんな折、授業が始まるチャイムが鳴る。

「はい。席に着きなさい！あらっ？結城くん、宮下さん。もう良くなったのね？」

と、久々に学校に出た要に、担任の先生は微笑んだ。

「はい。御心配おかけしました……」

こうして、今一度、出発点に立った六人。

それぞれの思いを乗せて、時は流れて行く。

それは、破滅の道か……それとも、輝かしい未来なのか……今は、誰にも判らないことであった。

FIN

#16A STARTING POINT (後書き)

未来なんて判らない。

それも有るけれど、この世界の秩序を造り出している物は何なんだろう？その辺りから、この話は始まりました。

今回は、天使や悪魔を題材として書いたのですが、余りにも名前を乱用してしまったので、(只でさえキャラ多いのに・・・)判りづらい話になったのではなからうか？と言う感じがします。でも、描いてみて楽しかったのは然り。またこのテーマに関しては形を変えて書いてみたいと思います。

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9407c/>

A R K

2009年3月24日12時07分発行